
変な学校

akaoni0026

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変な学校

【Nコード】

N9618B

【作者名】

akaoni0026

【あらすじ】

突如学校に現れた異端者、“怪物” その前に立ちはだかる秀才、耕輔は、生命の危機が訪れているにも関わらず、ポケエと突っ立っていた…！！ 一人の少女と、少年が送る、学校ドタバタ劇。

其の一（前書き）

えっと、オニです。

この『変な学校』は、当方のブログにすでに掲載されている小説です。

さらに、ジャンルは“恐らくファンタジー”と言つ危ついでモノです
あらかじめご了承下さい！

其の一

放課後の廊下。

夕方の光が窓から差し、薄汚れた廊下の白をオレンジ色に照らし出している。

この学校に通っている生徒が下校し、遠くからは野球部の声と、ときたま小気味良い「カキーン」と言う金属音しか聞こえない、普通のどこにでもある放課後。

しかし、それを覆す異端な音が、その時学校で響いていた。

今、その異端なものの前に、ぼうつと突っ立っている少年と、その少年の足に抱きついていて中肉中背の教師がいた。

異端者達…怪物と呼ばれる、生存理由不明、出所不明の異形の生物。

理由は分からないが、ヤツらは人間を喰らう。

その怪物たちがゆっくりと、しかし確実に差を詰め、そろそろとうごめいて来る。

「ひ、ヒイツ！！また出たー！！」

少年にしがみついている教師が叫んだ。

「小岩先生、ちょっと大人げないですよ」

少年、伊井森 耕輔は、その教師に少々渋い、鬱陶しいと言う様子の顔を見せた。

「きき、君が大人げありすぎなんだよっ！し、死ぬ死ぬ、死んじやうううう！！！」

まあ。確かに現状突っ立てる場合ではない。このまま何もしないでいたら、命を落とす危険性がある。

それにしたって先生は怖がり過ぎだ。蜘蛛のような足に蟹の頭をくつつけたような緑の怪物たちが迫ってきているかといって…。もう少し待てば彼女が来るだろうに。彼女が来れば、助かる。

このように毎日が危険に晒されている異常な学校だが、なんと。

今まで“この学校”で死人は一人さえ出たことがない。

別に兵器が充実しているからとか、実は学校の生徒みなが熟練して鍛え上げられた兵士ってわけでもない。

ただ一人の少女が、この学校に来たときから、この恐怖は“恐怖”でなくなつた。

…いや。彼女と違い、僕ら人間なんて、カイブツたちの前でも非力なものだから、恐怖くらいはしてもいいのか…。

ああ、今がそうかもしれないな。ヘタをすれば死ぬ。

時計を見る。怪物が現れてから約30秒。…彼女はまだ来ていない。…何でこういう絶望的なときに、あいつは遅れるんだよ…。

彼女が来れば100%助かる。が、万が一来ないとすると話は別だ。死ぬかもしれない。しかしどうやら僕の中の怖いと言う感覚は麻痺しているらしい。全然怖くないのだ。加えて、頭は結構冷静に動いてくれている。混乱するどころか、落ち着いている証拠だ。

と思考をそこで止めて、気付けば…未だ足元でヒイヒイ言つて、僕の足を掴んでいる“先生”。

小岩先生である。本名、小岩こいわ 師鉄してつ。中肉中背の中年教諭だ。

僕と違つてこの先生はまだ怪物に慣れていない様子だ…。はあ。この人、僕ら生徒には、先生が小さい頃勉強が結構出来たからつて「これくらいなんで出来ないんだ」とかいつつもエバりながら言つてウルサイのに…。こうゆうときに限つて…

いや、これまた違う意味でうるさいな…情けな…。

依然ジュルジュルいいながら、コチラに向かつてくるヤツ（怪物）ら。そのおり、彼は腕時計を覗き込んだ。

今日はアイツ、ホント遅いな…40秒…。今までなら有り得ないタイムロ

「おーっ！コンサート会場はここだったのかーっ！！」

その時、パスパスと軽快な足音を鳴らしながら長いポニーテール揺らして健康そうな少女が「ダムンツ」と眼前に立つた。

小岩が泣きそうな声で彼女の名前を呼んだ。

律佳と。

「はあ…。遅いじゃないか？」

僕はその少女「律佳」に、抑揚のない声でたずねた。正直死ななくても良いという安堵感も得たが、ちよつとした変な戦慄も得てしまったからだ。

「んああ、ちいちゃんにスパゲッティもらってさ」

彼女はニツと笑ってペロリと舌なめずりした。

ああ、だから口許に赤いソースがついてるのか。ナツトク。コンサートに遅れたのもついでに。って、いやいや、そんなことよりも「早く何とかしろよ」

死ぬにはまだ、早すぎるからだ。実際、少年と怪物の距離はかなり詰まってきた。

律佳はニヤツとして、パキパキツと指を鳴らし、

「okok、焦らないでー」

カイクツたちに武器もたず、飛ぶような速さで突撃していった。そう、この少女こそ、先ほどから言っていた“彼女”だった。と言っても僕らは恋愛中ってわけではない。ただきまぐれにそう形容しただけだ。

耕輔は頭の中で、今までの対怪物戦を基盤として現行の戦闘を予見した。

相手は10。律佳は絶好調。 余裕だな。彼は笑いもせず口

許が緩んだ。

カイクツたちは、その一人の人間 律佳に対して、鎌のようになっっている腕を振り上げ、ブンと振り下ろした。

けれどその鎌は、少女を切りつけること無く空を刺して、廊下に大穴を作っただけに終わった。

その瞬間にも律佳は、素早く、鮮やかに怪物に間を詰め、

「おせーんだよ、ぶあーか」

愛嬌を含んだ声で言っつて、そのカイクツの顔面 赤い目と目の間に、グローブをはめた拳を、怪物の顔を潰すほど埋めた。

ブシツと緑の血液が噴出し、その怪物はそれきり沈んで動かなくなつた。

「よえー、相手になんないな」

こんなもんかといった様子で、律佳は同様に怪物たちを片付けていった。

と簡単に表しているが、実際は次々と飛ぶ返り血を浴びながら、律佳は笑顔のまま勢いよく、カイブツたちを殺戮していったのだ。ホントエグい。怪物とは言ってもヤツらは生物なわけだし…。

そこら中に緑の血が吹き荒れ、肉片などがベチャベチャ飛び散りもした。んんむ……。

それが終わった頃には、彼女はペンキでもかぶつたように緑でドロドロになつたいた。しかし彼女の表情は、砂場で泥んこになつた幼女のような笑顔だったりして。おくびには出さないが、その矛盾はかなりの度合いで不気味である。

本当に因みになるが、その頃にはすでに小岩の姿は無かつた。いつぞや逃げ出したようだ。最後まで情けない。

明日、みんなにあいつのことチクリまくってやろうつと…。

などと頭の中でつまらないことを考えながら、彼は律佳に呟いた。

「はあ…まあこうも景気良く、バシバシバシと…」

耕輔は軽く発汗したこめかみを、人差し指で掻いた。

「うーん。シゴトだからねー」

聞かれた律佳が無頓着に言う。

「嘘だ。どう見たって楽しそうだった」

「あー、やっぱリーバレたー？」

にんまり笑つて、手をヒラヒラさせている。まあいつもこの調子だから、慣れたと言えば慣れたが…。

「あー、もう…」

慣れはしても、見てると相変わらず疲れる。彼は彼女に背を向けて、ぶつきらぼくに片手をあげた。

「処理任せたー」

言いながら、コツコツと階段を下りる。

処理、と言うのは、飛散した怪物の血や肉を、明日までに綺麗にしておくことを言う。それを知っている律佳、「うぁーっ!!!? 卑怯者ーっ!!!」

と後ろから耳が機能しなくなるのではないかと疑問を持たせるくらいにうるさく叫んで来たが、耕輔はそこをどうにかして聞く耳持たず、そのまま学校を後にした。

正門の玄関口まで出てきて、耕輔は学校を振り返った。

背から夕陽を浴びている古びた学校。そして感慨に耽る。

…危険な、それでいて日常的な変な学校。今各地で、こんなことが起きている…。

其の二

こんな日々に慣れてしまったと言う自分がおかしい。そう感じることは、不思議でもないし、それもまた日常茶飯事で。慣れてしまえばこっちのもんだ。

この変な日常を作り出したのが、怪物…なんだけど、実際僕にはそう思えない。

『ライド』とか言ったか。

怪物を倒すために作られたヤツ（ライド）ら…まあこの、トボけた女がそうなんだけど…コイツがどうも日常を壊してくれたように思うのだ。

今は朝飯時。律佳^{ヤツ}がおかずナシ（と言うかコイツが食ってなくなってしまった）で漫画みたく山盛りにした椀の中のご飯を、もりもりと擬音が付きそうなほどに米を散らせつつ口の周りに付着させつつ目減りさせつつ食っているところである。

こんな性格でなければ、見た目もスタイルも良いんだし、もっと言えば（僕は興味ないが）セーラー服に身を包んだ小動物的可愛らしさを持っているのだから、目の保養にも十分なってくれたんだろうが、いかんせん、この内面の性質^{タチ}は悪すぎた。何せ、コイツが視界に入ってしまうと、普通女の子には抱かない様な心配ばかりさせられるのだ。例えばご飯。空になってないだろうかとか。例えば行き過ぎた腕力。傷害事件起こしてないだろうかとか。そんなこんなで考えている内に、

「メシ！」

勢いよくヤツがお椀をこちらに突き出してきた。それこそズイッと。しかし言ってみよう。

「ない」

紛れもない事実である。

「えーっ！なんでないのお…」

向けた茶碗をコトンと腕ごと机におとすコイツ。律佳。

僕はその茶碗をとりあげ、洗面器につけた。

「うあーっ！！卑怯ッッ」

ドカン、と机を叩く律佳。

ミシと音がした。これ以上の衝撃は、この机を破壊しかねない。

怒らせないようにしなければ。

「今何杯目でしたかー？」

ぶっきらぼうに聞いてやる。ヤツはいつも通りに元気良く手をあげた。

「よん・はい・めーっ！」

「ね」

「何がよう！！！」

食いすぎだと思ってないらしい。頭に来ても皮肉ることは出来ない。だからと言ってヤツと喧嘩をすれば絶対に殺される。もはや怪物よりおそろしい。

毎日こうなのである。もっと酷いことさえあった。ラーメン三杯にどんぶり四杯、とか。日常を壊してくれた、と思うのはそれではないが、経済的に殺されかけているから、そう思うのだ。ただ政府からの特別資金が補助されているので、今のところは大丈夫であるが…焼け石に水になることもしばしば。

とにかく窮地だ。いや、日常ではなく、今。机が破壊されてはたまらない。

こう言う時はこのセリフに限る。

「あー、時間だー学校いかなきゃー」

ワザトらしく言うと、思惑通りヤツは慌てふためいた。学校に怖いものは、ヤツにはないはずなのに。ともかく効果てきめんである。「マジかーっ！！！」

律佳は時間を確認するため、ミッキーの時計をまっしぐらに掴んだ。いや、掴んだと同時にグシャと金属音がしてしまった。

「あ」

「あ」

僕と同時にあいつも目が点になる。

「ちいちゃんにもらった時計が…」

と律佳。

「…でも三代目だぞ」

と僕。つてか聞いてないな。

「わぁーちいちゃん！ごめーん！！」

律佳はその壊れた時計を抱いて、盛大に泣き始めた。無論これも三回目だ。最初はオロオロしたものだ、今はもう情性で

「あーうつせうつせ。同じヤツまた買ってやるから」

すでに制服に着替え終えているヤツの腕をひいてやや強引に、いやもう全力で、強引に玄関へ連れ出した。隙を見せるところとばかりにコイツは反撃してくるからである。

「うえー…ちいちゃん…」

外に連れ出しても泣き止まぬ律佳の声は、当然ご近所様に聞こえているだろうが、これも三回目だ。朝だろつともう気にしないだろう、と思う。除いて一つの理由もある。

「律佳ちゃん！？どうしたのー？」

隣近所の“ちいちゃん”こと智香^{ちか}が、律佳の声を聞きつけて、焦った顔で玄関から、文字通り飛び出してきた。

童顔で眼が大きく、その眼は深い青色、髪も同様に青く、シヨートヘア。律佳と同じ制服を着ている。つまり同じ学校の者。同じく『ライド』で、律佳の世話係。だったハズなのだが、結局僕が律佳の面倒を見てしまっている。

「ちいちゃん！ごめーん…ネズミさんの時計壊しちゃった…」

「いいえー、いいんですー…。また買ってさしあげますからー…」

「だからー…三回目じゃない…？」

手を握り合って泣いている二人には、やはり僕の声は届かない。

はあ…智香さんは律佳とさえないなければ普通なのに

そこへ制限速度無視の軽自動車が走ってきた。もうどう見たって

制限速度無視の速度で。

「あ！律佳ちゃん！あぶないー！！」

咄嗟に律佳を壁に吹っ飛ばして、車の真正面に大の字で立つ智香。その車の主は、視界の隅にいた少女が同級生であるう少女を、人間離れした力で壁に吹っ飛ばして、わざわざ車の真正面に出て大の字で立ったことに驚き、「キキーツ」と急ブレーキをかけた。が、間に合わなかった。

ゴシヤツと鈍い音がして、数十mに渡りきりもみしながら智香が吹っ飛び、その勢いでごろごろと転がり、数m先でようやく止まった。

運転手は慌てて、車から這い出るようにして「だいじょぶかー！！？」と焦った大声を出しながら、智香に走っていった。

その恐るべき状況にも関わらず、耕輔はどこかぼうつとして律佳に話しかけた。彼女は未だコンクリートの壁に大の字でめりこんでいる。

「お前はだいじょぶか？」

「…痛いね…かなり…」

うん、だいじょぶそうだ。

それより、さっきの言葉は撤回しよう…智香さんだけでも、十分問題だ。

丁度そう思った頃に、車にでも轢かれたかと言うくらいの勢いで、さっきの運転手がきりもみしながら飛んできた。飛んできた方を見ると、智香が、あぶないでしょ、律佳ちゃんが轢かれるところだったんですよ等と声を張り上げている。男は、大の字で立たなくても・・・と呟いている。

智香もライドのはしくれ。あの程度の衝撃は、本当の意味でびくともしない。その証拠に、当たった車のフレームがめちゃめちゃになっっているのにも関わらず、智香は遠目に無事だ。

隣でボコツ、パラパラと、コンクリートの音がした。律佳が出てきたようだ。

「いこっか？」

「待った待った！！病院に連れて行かないと！！」

律佳の服はところどころ破れていたが、全くの無傷で、運転手がかえあげると走り去ってしまった。

「早く来いよー」

とは一応言ってみたが、もう律佳の姿は視界になく

「行きましょっか」

と、いつの間にか横に立っている智香と共に学校へ急いだ。彼女の体はやはり、無傷だった。いや、驚くべきことに、衣服も破れていなかった。

それより、車どかさないとダメなんじゃないのか…？

其の三

校門を抜けると、智香はすぐさま律佳の下駄箱を覗いた。

「まだ来てませんね…」

悲しそうにうつむきながら、耕輔のもとへと戻る。

「どうせ、まだ来てないんだろ？」

こくり彼女が首を縦に振ると、耕輔はため息を一つついて、教室へ向かった。

耕輔は席に着き、鞆の中のノートやら教科書やらを机に詰める。

そのおり、男子生徒が机の前に立った。友人の、真鯛またい 雪也ゆきや容疑者
無職

「また変な想像してるだろ」

はつとして、耕輔は首を振った。

「そんなわけ、ないだろ」

「どうかね…」

苦笑いしてから、彼は隣の空席を見た。

「律佳ちゃん、まだなんだな」

「ああー、せいせいするよ」

雪也はムツと声を強ばらせた。

「何言ってるんだ、それでも律佳の彼氏か？」

彼氏：彼にとっては冗談かもしれない言葉は、耕輔にとってとてもつもなく苦痛だった。冗談であるか本気かは関係無しで、とにかくそれを律佳の耳に入ることだけは防ぎたかったのだ。しかしそれも過去のこと。

雪也に対し、少し前までは、律佳の目の届く範囲内で、その彼氏と言う言葉を口にするなどの、絶交するだの、あの怪物のようにしてやるうかと言ったものだが、律佳本人が彼女、彼氏の意味を全く解していない様子につけて、口癖のように雪也に彼氏彼氏と呼ばれ

ると、気だるくなつて、否定しないようになったのだった。
話を戻そう。

ムキになる雪也に、耕輔ははくんと不気味に笑った。

「な、なんだよ」

「なに？律佳のこと好きなのか？」

雪也は軽く首を振った。違つようだ。

「ノンキなこと言つてるなよ。もしヤツらが来たら、俺たちじゃ犬死にだ」

ヤツらとは、無論怪物のことだろう。その前に、そもそもなぜ怪物がいる学校に来なければならぬのか？なんてことを考える人間はもういなかったりする。

カンタンなことだ。生徒が学校に通わなくなった市町村は、なくなつたからだ。人が、みんな。その惨憺たる有様と言つたら…語る舌も持たないが、語られたくもないだろう。とにかく、そんな感じで皆ライドに頼っているわけで…

「まあ…」

雪也がこう言うのも、ごく自然なこと、ということだ。

「早く呼び戻せって」

「つて言つてもなあ…」

「？」

ふう、と一息つき、耕輔は彼に朝の出来事を話した。

「はあ…」

話を終えた頃には、彼は目を真ん丸くしていた。

「まさか智香さんが…」

運転手の無事とこの学校の無事より、智香の大胆で恐ろしく秩序ある行動に驚いているようだった。ちなみに、智香はライドだが、戦闘用ではないので、律佳の足元にも及ばない。

「つてことだから、律佳はスグ帰ってくるよ」

「ああ…」

彼は半ば放心状態で、自分の席へ戻つて行つた。

結局律佳が登校したのは、丁度怪物が現れたときだった。学校中の怪物警戒サイレンが鳴り終わった頃だ。

「お待たせー」

楽しそうに教室に入る律佳だが、そこには耕輔と雪也以外誰もいなかった。

「あれー……」

「遅かったな、律佳」

耕輔が言った。

「みんなは？」

「グラウンド見なかったか？」

雪也が言う。

「うーん……ちいちゃん＋知らない人がいっぱいいたよー」

「……」

耕輔と雪也は同時に困惑した。まさか、学校の者を知らないと言ううとは。

律佳ははてなマークをちらほらと浮かべ散らし、首を傾げた。

「ま、まーとにかく。グッドタイミングだ。律佳」

耕輔が焦りながら言った。

「そ、そうだ、律佳ちゃんなかなかツイてるね」

雪也も焦っていた。

「なにが？」

律佳が疑いもなげに二人をポカンと眺めていた。

2年4組教室前、つまり、耕輔たちのクラスに突如現れた怪物は、当然2年4組の絶体絶命を作り出した。しかし、智香がオトリを果たし、今怪物たちを、一階下の2年2組教室前におびき出したという。恐らく、智香のサポートアビリティ、『ダミーウィンド』で、怪物の視覚に幻を映し出し、それを足止めとして怪物のオトリにし、ヤツらの足を止めていると思われる。幻覚を完全に“人間”と錯覚

している怪物たちは今、その幻覚を斬りたくっていることだろう。

耕輔と雪也は、律佳をそこへ案内した。

その幻覚を見る怪物を見るなり、律佳は首を傾げた。

「なにやっつてんだあいつら」

誰もいない、ましてや見間違っほどの物も無い空間に、五体ほどの怪物がごぞつて鎌を振り下げている。その特定の部分は穴だらけ、見るも無残になっていた。

「さつさとやれ」

僕が命令すると、律佳はどしどしい顔になった。

「ヤダ。何かつまんなそー」

「つ、つまんなそうって…」

つまんなそうで、何人死にかけてると思っつてんだよ…。

「さつさとやれって」

「あー」

お？珍しい。と思えたのは束の間だった。

「やいコラア！！こつちむけやー！！」

大声で思い切り挑発気味に宣言する律佳。

「お、おいおい…」

雪也は顔が青ざめ、一步後ずさった。

「はあー…」

何故か展開が読めていた耕輔は、肩でため息をついた。

だが怪物たちは気付く様子もなく、そこをドカドカと叩きまくっていた。見ていると、なんとなく健気に見えてくる。

「…何だか可哀想だな」

一言、耕輔が、雪也に聞こえないほどの小さな声で呟いた。律佳の大声の挑発は全く気にしなかつたくせに、耕輔の呟きは、怪物たちの赤い目をギラリと光らせた。なんだろう。“可哀想”と言つ言葉に反応したのだろうか。まさか。怪物が人語を理解できるはずがない。

…じゃあ、

「…なんで」

困惑する間もなく、律佳が、耕輔、雪也の前に立った。そして怪物たちに負けないほどの、キラキラとした眼光、何故か手をニギニギして豪快に白い歯を見せ付ける。

「さあ！！殺してやる！！」

… やっぱり可哀想だった。

律佳は昨日の勢いで怪物らを惨殺した。何かの18禁映画のワンシーンの様に残酷だったのは言うまでもない。

「いつ見ても恐ろしい…」

振り返った悪魔（少女）の姿を見て、

「殺しつぷりだな」

本当に僕は思う。律佳はやっぱり緑まみれで、だが、お手洗いを済ませた様なスッキリとした顔をしている。

「で…」

振り返り、雪也を見やる。雪也はあの状態、一步後ずさったままの状態で、固まっていた。目がウロコになっている。

目からウロコとは聞いたことがあるが、まさか目がウロコとは…

…。

「何か捉え方間違ってるな…」

そう思いながら、僕は怪物たちの掃除を始めた。

其の四

騒ぎはおさまり、授業は事なきを得て再開。被害者ゼロと言う数字はもはやお約束であった。

「ねねー、アレ食いたい」

下校中のことだ。屋台は珍しくはないのだが、そこには『モデルカ』と言う名のやきそば屋台があって、律佳はそこを指差し、僕の腕を強烈な勢いでミシミシと潰し、猫なで声でそう要求していた。本人には、きつと僕の腕をへし折るつもりはないんだろうが、このままでは絶対右腕が死ぬ。

そもそも何故食いたい等とコイツがほざくかと言うと、珍しいモノ好きだからだ。普通そこには、クレープ屋か、アイスクリーム屋、またドーナツ屋があるはずなのだが、今日はやきそば屋。よりにもよってやきそば屋…！クレープとか売ってた方が売れるだろうが！！とにかく、珍しいと言うことだけで買わされるハメになるとは、全く頭に来る話だ。恨む、やきそば屋

屋台の前まで来ると、店主はにこり笑いながら、注文を聞いてくる。

「へい、らっしやい。なににいたしやしよう？」

「やきそば二つー」

「いや、僕はいいよ」

「いいから〜」

なにやらわくわくしている律佳。一体何を企んでるんだ！

しばらく待っていると、おまちどーと言いながら、店主は透明のプラスチックトレイと箸をゴムに巻いて、律佳にやきそばを手渡した。

「ハイ、お代だよ」

「つてええ！？」

驚くことに、律佳がお代を払ってしまった。

店主はにこやかに微笑みながらも、暗黒のオーラで僕の目をギリと見た。恐ろしい誤解を招いているようだ。女に払わせるのが相当キライな性質なのだろう。

「い、いや！これは違うんですよ！ワザトじゃないっ」

必死に弁解している耕輔の隣では、右手と左手に一つずつ、出来立てのやきそばを持って、はてなマークを頭に植え付けている律佳が、ぼけーっとその様子を眺めていた。

「なにやってんの？帰るよ」

突然律佳が耕輔にタツクルし、器用に彼をおぶると、びゅんと言ふ風の音共に消えて行った。

机に向かい合って、耕輔と律佳は、やきそばを食べていた。いや、食っているのは律佳だけで、耕輔はまだ手をつけていない。

「おいしいね」

「うちに帰って食うもんなのか…？屋台ものって…」

にこにこ笑いながら食うコイツの耳には、届いていないようだ。

「まあ…そんなことより…なんで金払ったんだ？」

理由もわからないし、第一そのおかげで店主には恐ろしい目で睨まれた。

律佳はやきそばをずーずーと吸いながら、キョトンとした。

「いっつもお世話になってるし、それに、お金のことになると、こうすけえらい顔になるでしょ？」

そんな顔、してたか？しかし、そうだとしたら、結構人の顔見てんだな。……。いや、いっつも見てるな。コイツは。

どっちにしろ、ここは素直に礼を言ってもいいか。

「…まあ、ありがとう」

「どういたしまして。あ、いらないんなら食うよ！」
そうゆう魂胆かいつ！

「頂きます」

「ちっ」

とりあえず余分な出費が出なかったから、良いとするか。

其の五

「 次のニュースです」

土曜日の朝、いつものようにＴＶを見る。女性が顔色一つ変えず、どこかで起きたニュースを、また読みはじめた。

「昨日の午前十一時頃、銘迎高等学校で、怪物による死傷者が出ました。重傷が」

そのニュースによると、生徒死亡数、男子四人と女子二人の計六人、重傷は50人に上ると言う。

律佳は気にもせず、おいしそうに焦げた食パンをかじっている。バターと塩で味付けされているだけだが、十分らしい。

「聞いたか？」

「うん」

彼女はこちらに向くこともなく答えた。

「うちは毎回ゼロ人だから、まー何と言うのか…現実味ないよなー」
もちろん被害者数のことである。

「まあねー」

あまり関心もなさそうに言う彼女。実際、関心は怪物殺戮と食べ物だけだ。

それにしても 僕らだけ助かっていていいものか？もちろん、こちらの高校に被害は出て欲しくないし、怪物たちに殺されていないことは、喜ぶべきことだ。疑問をもちかけるところじゃない。それでも、自分たちだけ助かっているのは、いい気分ではない。

聞いている限り、ライドの生産は月に10体が限度で、生産開始されたのが、約一年と二ヶ月前：最高でも140体しか配備出来ない。しかも今回被害が出た学校は、“ライドが護衛していた”。今でもこの律佳が傑作機とは信じ難いが、ことを受けると、事実そうなのだ。

「なあ律佳

他の学校のヤツらも助けに行かないか？」

「むーりー」

やはりこちらには向かず、かぶと食パンをかじる。

律佳と同居して五ヶ月間、何度もそう言ってみたが、いつも『だめ』だの『むり』だの『もう一杯持って来い』だの、聞いちゃくれない。かたくなにそれは嫌がる。理由は聞いても、絶対答えてくれない。この律佳が、唯一、故意に無視することだから、相当だ。

「律佳：じゃあ、俺らだけ助かってもいいと思うか？」

律佳は答えず、ただパンをかじる。

「お前でも分かるだろ？あいつらが、怪物が人を殺すってことぐらい」

「それでもだめ」

「どうして!!」

「……」

律佳は食パンをかつこむと、席を立った。

「お腹いっぱいだよ、寝るね」

笑ってから、彼女は部屋に行ってしまった。

いつかは聞きたいものであるが。

其の六

ある日猫を踏んでしまった、

「みゃあー!!」

「あ、ごめーん」

律佳がいた。

ここは近所の守かみたらい衛公園。住宅街から近いので、柵で囲まれているが、結構な広さがある。遊び道具はいたってフツで、滑り台や砂場、シーソー、ブランコ等。

その公園の砂場の横で、事件は起こった。

「見たことないカタチだな…キミ、なんての」

律佳は猫を踏んだことがない。もとより、猫を知らないのである。情報を主として嫌う律佳は、極限的にモノを知らない。驚異的知識を誇るなら、食べ物に関する何か。

「みゃあ」

猫はすっかり落ち着いた様子で、答えた。滅多にないことだが、踏まれ慣れているのかもしれない。

「みゃあ…？変な名前だね。じゃあみゃあくん、家はどこ？」

「みゃあ」

「名前じゃないよ、家を聞いているの」

「みゃー」

猫は歩きまわるのをやめ、尾を巻いて座った。律佳もしやがみ込む。

「ねってば。しゃべれないの？」

「みゃあ…」

「そういえばドク太も喋れなかったもんなあ」

ドク太とは、隣の隣の家の人の犬の名前だ。

「みゃあとは違ったけど、ワンしか言わなかったよ」

言いながら、猫の頭を撫でてやる。

「にゃあー」

どこかしら笑っているように見える。と思うと、みゃあは何かを思い出したらしく、いきなり駆け出した。

「あ…！ちよつと待ってよ！」

まず猫は手頃な木に登り、頂上から周りを見回した。律佳は、そこをひとつ跳びで登った。

「みゃあ！？」

何故かみゃあが毛を思い切り立て、ビクウツと擬音を出した

「ナニ？」

とりあえずみゃあは、その恐ろしい出来事を置いて、周りを見渡した。

「よお、母さんでもいんのかよー？」

律佳も一緒に探してみる。

「み…！」

発見したようで、みゃあはそこを飛び降りて、その場所へ向かった。律佳も慌てて追う。

「みゃー！」

と何故か仁王立ちで爪（指）さした方は、魚屋だった。

「ここお前んち？」

「みゃー！」

「ふーん…」

と納得していると、店の店主が出てきた。

「へい、らっしやい！」

「あー、いえ。見るだけだから」

「そうですかい…」

何故か恐ろしいほどどよんとする店主。律佳はいつものように小首を捻った。

「何でそんなに落ち込むの？」

「いや、よく盗られるんすよ、魚が」

「魚が？」

「ええ…ほら、その猫ちゃんのような猫に…ってあああ!!」
その猫　みやあが、一匹の鮭を今持ちさらんとしていた。

「っこの!!」

乱暴に捕まえようとしたところを、その突進する力+上への突き上げ運動の拳を、律佳が放った。アッパーだ。

「うお…ッ」

店主は約2mほど打ち上げられ、自由落下で落ちた。その頃には、律佳とみやあの姿は完全に消えていた。

「にゃあ」

律佳はどこからか袋を仕入れて、盗んだ鮭をそこに入れ、みやあを抱いて歩いていった。

「いきなり攻撃しようとするなんて卑怯だよね」

「にゃあ」

「せめて、いくぞコラーくらい言って欲しいよね」

「にゃあ」

「…いきなりしっぽ踏んだのは、いいの？」

「にゃあー」

心なしかみやあが笑った気がしたので、律佳は許されたんだと納得した。

「みやあ!!」

突然みやあが律佳の手を離れ、道路の脇の溝へ入って行った。

「あー、もう、またあ…」

律佳がそこを覗くと、違う猫がいた。みやあより大きい。多分みやあの母だ。しかし律佳には、それが分からなかった。ライドに両親などいない。しかし代わりに思った。それは…

「みやあにも、こうすけがいるんだね」

につこり微笑んで、袋に入った鮭をそこに放した。理由は分からないが、何故だかそうしたくなったのだ。それをみやあは喜んで、みやあみやあ鳴いた。

律佳にとってもうここに用もないので、彼女は立ち去った。

いや。去れなかった。動けない。何故だか離れたくなかった。さびしい、もう会えないかもしれない。そう考えると…。そうゆう感情が初めて生まれた瞬間だった。だが

次の時には、律佳はそこにいなかった。

目から“水”が出てくる。止まらない。止まらない。よくわからない。そのおりみやあの顔が浮かんでくる。幸せになるといいな。とりあえず、私も帰ろう。こうすけのところへ。

其の七

今日も出る出る怪物出沒。そのたびにこやかに律佳がそれらを惨殺していく。校内は緑になって行くし、律佳も合わせて緑になっていく。

「今日も討伐完了！」

ぱしつと拳をもう片方の手で受け止め笑う律佳。毎度ながら楽しそうにやってくれる。

「いやー、気分爽快だねっ！」

振り返り様こう言ってきた。感想は言うまでもなく、やっぱり、だった。

こうやって毎日倒していくうちに、何だかこれが当然のように思えてくる。しかしこれは緊急行動であり、決して当然などではない。怪物がいつか止むことを信じて、闘っているのだ。

さて。緊急行動も終わったし、解除ボタンを押すか。

説明していなかったが、怪物を全て消滅させた後、“緊急行動終了ボタン”（解除ボタンと呼んでいる）を押し、グラウンド側から見た校舎にデカデカとつけてある、“緊急ランプ”の赤い光をこれで消し、グラウンドに緊急退避している生徒たちに安心を報せ、生徒たちが帰ってくるようになっていくわけだ。

このようにカンタンな設備で済んでいるのは、何故か怪物は、日が上がっているときにしか出ないことと、外には出られないことが判明しているからである。

とりあえずそのボタンを押そう。

とした瞬間だった。

「待った！！」

律佳が叫んだ。

「どうしたんだ？まだ怪物がどっかに？」

そんなことがあっては、生徒が入ってきた順に怪物たちの餌食だ。

思っではいけないのだが、なかなかどうして、生徒がさかさまになつて怪物たちに食われていく様が見える。『ぎゃあああ』等と背景に書いてある。

そんなことはいいとして、律佳は汗をつつつかいて、頭を振つた。

「ううん。いないけど…」

「じゅあいいじゃ…」

ないか。と言うまでに、律佳がカットイン。

「待って！！それは核爆弾スイッチだよー！」

「はあ？」

焦つてさらに汗を噴出し、叫んできた。

…わけのわからんコイツの理由を考えてみよう。

…すぐにわかつてしまった。なんとなしに情けない。

あれは授業中のことだ。授業に苛立ちを隠せなかつた律佳は、「意味わかんないよ！！」と叫びながら歴史の教諭を殴り飛ばしてしまつた。普通、律佳の拳を受けた者は絶対立てないのだが、その教諭は、よろよると、奇跡的に立ち上がり、「お前は補習だ」と、律佳に宣告したのを覚えている。この教諭の補習は面倒臭いことで非常に有名だ。

律佳は、きつとこの補習が嫌で、もつと長引かせて補習以下授業をさせないつもりだろう。

だがそれを怖がるより、そもそも先生が授業、もとい補習出来る体ではない（律佳の一撃を受けて、無事でいられるはずがない）し、それに補習でも済むならお安い御用のはずだ。なにせ、教諭殴つたらフツー退学だろう（何で補習で済むんだ？）。とりあえず、補習は怖がらなくていいと思う。

「もういいから押すぞ」

と押そうとした時、また律佳が止めた。

「ダメダメ！！それ地球破壊爆弾のスイッチだよー！」

「んだからー・・・」
「要人の破壊ボタンかも!？」
「いや、やべーだろ」
「人工衛星の自動破壊用だったり!？」
「いや、これ手動じゃない？」
「五年前埋めた起爆装置かも!！」
「いや、埋めてないしお前と会ってもないって」
「私の妊娠ボタンだ!！」
「え!? そうなの」
「と聞き終えたところで、カウンターでボタンを押す。
「きゃああああ! 生まれるうっ!」
律佳がかがんで痛そうに腹を押さえてしゃがみこむ。
「だからねーだろって」
「じゃあ世界のどこかで大統領が!！」
「爆破してない爆破してない」
「地球が破壊されッ」
「あるって。地球」
「じゃあやつぱりお腹の赤ちゃんだあー!」
「うわーんと言いながら、何故か僕を恨めしそうに睨んで走って行った。」
「なんなんだよ・・・ったく・・・」
と振り返ると、ぞろぞろとクラスのみんなが帰ってきていた。
「あ、ああ・・・そんな・・・律佳ちゃんと耕輔くんが・・・緊急行動中にそんな破廉恥なことを・・・」
ペタリと白い頬に手をつけて、次の瞬間真っ赤になり、ヘナヘナと壁にもたれかかる智香。
「お、お前ってヤツは・・・!」
さして僕のことにはきにせず、智香を支える雪也。
「おいおい・・・マジかよ・・・」
「私はやると思ってたわ・・・席も横だったし・・・」

「賭けが当たったぜー！」

「律佳ちゃん大丈夫かしら・・・」
と口々に言うクラスメイトたち。

「ち、違うんだー!!これは!!」

じりと後ずさると、そこへ律佳が、白い布で“何か”を包んだものを抱いて、憂鬱気に歩いてきた。緑まみれだった服が、いつのまにか綺麗になっっている。

「見て・・・赤ちゃんだよ・・・」

う、嘘だ!!人形に決まってる!!

そう思いながら“それ”を見てみると・・・。

「ばぶ」

哺乳瓶を咥えた赤ちゃんがいた。動いてるししゃべってる。あつたかい。

「つてええええええええつ!!」

漫画じゃない!漫画じゃない!現実だぞ!!

そう、現実にいる。赤ちゃん。

クラスメイトの白い目が突き刺さる。

「うわっ・・・エゲツな・・・」

「多いんだつてよ、最近・・・」

「律佳ちゃん大丈夫かしら・・・」

「ち、違うんだー!!」

と叫ぶが、誰も聞いちゃいない。そこへ、智香が律佳に歩み寄った。

「まあ・・・頑張ったのね・・・」

赤ちゃんを覗き込みながら、智香が言った。律佳が憂鬱気に赤ちゃんを見ながら、フツと笑った。さながらシングルマザーよろしくの顔だ。

「うん・・・こうすけと別れて、一人で育てるつもりだけど・・・
ってか結婚してませんってええつ!!」

「そう・・・収入はどうするの・・・?」

その話を通じる智香には、当然僕の心の声は聞こえない……。収入云々の話が終わると、今度は智香が切り出した。

「私たちはそんなことにならないようにするわ！」

何だかいつもの智香と違う調子で言って、雪也にピトッと寄り添った。雪也はそれを左の肩で抱いた。

「うん、頑張つて……」

と律佳は、片目の涙をスツと拭き取ると、僕に向き直った。

「じゃあ、幸せにねっ……」

律佳はふわっとポニーテールを風になびかせ、後姿を見せて走り去った。

「お、おうい……」

その“時”の“なんとなく”の流れに逆らえず、僕は彼女を引き留められなかった。

っというか……。

「どーなんだ……？コレ……」

其の八

「ねえ〜今日どこ行く〜?」

「いや、どつこも行かなくていいだろ」

「ええ〜!つまんない!」

いつもの家の様子がこれだ。もちろん学校から下校した後の話で、律佳はいつも外に出たがる。元気がありあまっているのだろう。しかしそれは、耕輔にとつても、まわりにとつても、いいことではない。律佳は外に出ると余計なことばかりして、面倒なのだ。だから、外には出ない。正確に言うと、出たくない。

出たくないと思っただけでも、律佳にかかると、毎回外に出なくてはならなくなるのも大問題で、例えば家の食べ物全部をなくす(「全て食う」なんてことは、嫌でもいつももある。非常に困る。

「仕方ないなあ・・・今日は私一人でどつか行ってくるよ」

これは珍しい。一人ででかけるとは。うん、いいことだ。

「あ、ああ、気をつけて」

「うん!」

さつさとシューズを履いて、玄関を出て行ってしまった。

「・・・なんか無性に嬉しいな・・・」

律佳と暮らし始めて五ヶ月間。何故か、こうやって一人になったのは久々な気がする。なにせ学校でも毎日ヤツが隣。明けても暮れても隣。一人の時間が極度になかったのだ。いや、一人の時間最高。

ドゴーン

はっはっはっは。幸せー・・・って?何の音だ?

ドゴーン

工事かな?ま、いや、紅茶でも入れてクッキーを・・・あああ・・・考えただけで至福のときが・・・

ドゴーン

・・・うるさいな・・・。見てくるか。

靴を履いてる間にも、その轟音は聞こえてくる。何だかとても不吉な予感だ

外に出ると・・・

恐ろしい光景が視界の中で繰り広げられていた。

「このっ！このっ！このっ！」

一定感覚で、止まっては離れ、止まっては離れる一匹の鳥。移動してきた区間だろうと思われる壁は、見事に上だけ吹き飛ばされ、歯が抜けた壁のようになっていた。

そんなことになった理由は、その鳥を何故かアッパーで仕留めようとする律佳のせいだ。

何でストレートで攻撃しないんだよ……。と思うが、意味がない。だって、アッパーなんだもん。

「ってコラアーーー！！！」

怒鳴って律佳のところへ歩いていく。何故か彼女は、これ幸いとした顔で、耕輔を見ていた。

「なにやってんだよ！！律佳！！！」

「違うんだよ！こうすけ！」

何が違うと言うのか。ちなみに鳥は、壁から律佳の頭に移っていた。

「この鳥が逃げるから！ムカついてやつちやたんだよー」

ど・こ・も・違わないじゃないか。見た目通り。はははは。あー、頭イテー！

・・・無駄と思うが、一応アッパーの理由を聞いてみることにする。

「何でストレートで攻撃しなかった!？」

律佳はもじもじとして、うつむいた。

「だって、ストレートだと避ける猶予が鳥にはないでしょ・・・？あと足場をなくしてく意味で、アッパーでえ・・・」

壁を壊したと。なるほど、後戻りすれば壁がなくなっていくって、だんだん地に近づくと言う戦法か。それはなかなか。って

理由になつてねー！っ。

とは思つがもう何だか、とりあえず壁どうすんだよ……。

「ようは遊んでたつてことだろ……？」

「うん……」

そんな遊び、やめちまえ！と言つのは簡単なので、一、二プラスして言つてやる。

「お前なあ！鳥殺そうとする遊びなんかすんなよ……！」

「違つよ！殺そうとなんかしてない！」

殺す気なかつたのにアツパーしてたんかいっ！！大問題だぞ！永久的に終わらなかつた可能性が！！いや、一つの生命が助かつたことを喜ぶべきか？いやいや、もともとから壁破壊すのが大問題だつっの……！！

「言つたじゃん。遊んでるだけだつたんだよ」

と、人差し指をぴっぴつと振るう律佳。

何を自慢気に言つ。

「つまりー」

俺が抑揚のない声で言つた。さながら保育園のお兄さんのように。

「うん」

「壁ぶつ壊して遊んでたと」

「うん」

……はあ……なに、ソレ……笑えない……。

大体壁壊して何が楽しいの？ねえ、ちょ、何が楽しいの？病的に聞きたかつたが、ここはグツとおさえる。俺は、保育園のお兄さんだ！！（と思つしかない。

「結局鳥の意味は……？」

「口実だよ……」

ぐつとガッツポーズする律佳。そのガッツポーズの意味を教えてください。

「そっか……鳥狙つてた……言つたら壁壊してた理由になるもんない」

「そうそう!!」

なるかーっ!!アホーっ!!

「じゃあ、とりあえず帰ろうか・・・」

これ以上の被害を出すとヤバイ。いや、もう、通り過ぎてると思うが。とりあえずこれ以上、律佳を放置するわけにはいかない。

「うん」

と帰ろうとした時、律佳が待ったをかけた。

「何だ？」

「うん・・・ちょっと待ってね」

彼女は、頭に乗っている鳥を、ぱつと投げた。いつのまにか夕日になった空へ向かって飛んでいく鳥を見送って、

「さ、帰ろう・・・？」

彼女がさびしげに言う。

「ああ・・・」

トボトボと帰る。この壁どーすんだよ・・・なあ、どーすんの・・・。

答える者は誰もいない。

「あー、ちなみにー。帰っても食べるもの、ないから
彼女が人差し指を立てて言った。

「何で？」

「全部食べちゃったから」

夕日が恐ろしく綺麗な日だった。

其の九の一

学校帰り。みんなは友達と歩きながら帰っているところ、その群れとは離れ、一人だけフラフラと、生気のない目で歩いている生徒がいた。何故か頭には包帯、左腕は布で首から吊り下げられている。律佳の被害者である。

今日学校で起こったことは、あまり誰にも知られてないが、毎日似たような事件で、律佳は傷害事件を起こしているのだ。

今日の律佳の事件理由、ズバリ、カード泥棒。

律佳が友達とババ抜きして遊んでいる時、この少年は通りかかった。そう、その瞬間、その場所にいたのが、彼の運の尽きだった。

「最後のお！一枚だー！」

律佳が叫ぶと、相手の最後の一枚　ババ抜きでのあり得ない光景、つまり、本当の意味で最後の一枚を抜くと、最後まであがるハズのない、ババになるはずであるう律佳が、あがってしまった。律佳はカードを捨てたあと、得意げな顔で二、三秒いたが、突然頭を捻った。何か違う。何かが。いつもなら、私が最後持っている何か足りない。

「・・・あれ？コレって、こーゆー遊びだったけ？」

律佳が友達に聞くと、何か、違うんじゃない？とか、こういうこともあるんだよ、とか、何だか放っておくと、ババ抜きと言う遊びのルール自体がおかしくなりそうな展開になりかけたそのとき、律佳は少年をみつけた。その律佳が見た少年は、床に落ちていたジョーカーを拾い上げたあと、だった。

律佳は素早く察した。誤った真実を。…その真実とは…

少年は察して、ジョーカーを返そうと思っていたのだが、次の瞬間、律佳が襲いかかってきた。

「お前かーっ！！ジョーカー盗ったヤツウ！！」

なにやらいつの間にか、律佳は、ジョーカーを盗られたと察知し

たらしく、犯人はこの少年だと勝手に確信していた。

もう律佳を止められない。

素早く蹴りが炸裂する。少年は当然避けること叶わず、腹にどかんと重い回し蹴りを直撃。どかどかどかと、机を三つなぎ倒し、少年はそこでストップし、だらんとなった。お構いなしに律佳が来て、健気にも、少年が持っていたジョーカーを乱暴に奪い取り、腕組みした。

「今度から私の勝利にジャマしないこと！！分かった？」

言うてから、律佳はフンと鼻で言うて、何事もなかったように元気に戻っていき、友達と談笑し始めた。

ハッキリ言うてあまりに理不尽であった。いや、言うまでもなく理不尽。

大体、ジョーカーを誰かが落としていなかったら、律佳は確実に負けていたのだ。感謝こそすれ、蹴ることはなかった。ま、彼女には、そんな解釈法がないのは確かだ。仕方ないとは、さすがに言えないけれど。

そんな不幸な少年に、二度目の不幸が訪れる。

ガシャリガシャリと、音がしたのが始まりだった。

「
？」

無機質な鉄の音がしたので、少年は不振に思っ振返った。しかしそこには、誰もいない。見渡す限り、隠れる場所もない。音からして、かなり近くだと思ったのだが。

少年ははてなを浮かべたまま前を向く。と、眼前にでつかいやつがいた。身長180程度あるだろうか。とりあえずデカイ。何故かこちらを睨むように見ている。結構な美男だったが、とりあえず怖い。無表情。顔近過ぎ。つて言うか、何で目の前にこんなのが。

幻だと思い、まぶたを閉じて、もう一度開いてみた。

さっきまでいたはずの大男が、眼前から消えていた。音も、風も、気配もなく。これは間違いない、幻だ。きつと律佳に蹴られて、おかしくなったんだ。

で、やっぱり幻と。

と思ったその瞬間に、横からの強い衝撃で、少年は壁に押さえつけられた。いや、違う。誰かに押さえつけられているのだ。頭には、何だか冷たいモノがあたっている。

「律佳を知っているか」

って！これは銃だ！うわ、なんでなんでなんなんだよ……！！少年はパニックになりながらも、悲鳴が出せなかった。助けを求めするための悲鳴でさえ、恐怖で声が出ない。さらにその銃がグイと強く食い込んでくる。

「律佳を知っているか」

今気がついた。この男、何か聞いてきている。何を……。

……りり、律佳だって!？

えらく声に感情がない。まるで機械だ。

「しし、知ってるよ！知ってる！」

「どこだ」

「ば、場所は……!!」

全て言われた通りに答えると、その男は、パツと一瞬で消えて、少年も、一気に力から開放され、壁にもたれかかり、ズルズルとくず折れた。

良かった……助かった……。ああ、もう今日は何なんだよ……!!

律佳に蹴られたときのことやら、さっきの頭の冷たい感覚やらをざーっと思い出して、彼は興奮状態、あるいは混乱から正常に戻った。

……けど、律佳のこと全部話した気がする。……だいじょうぶかな……。いや！だいじょうぶなはずない！あいつ銃持ってた！さすがに律佳でも銃は……!

と、ここで、何だかとても冷静になってきた。

そもそも、なに話したか全然おぼえてないな……。っつか、なに聞かれたっけ……?

頭が恐ろしく冷えてきて、頭脳がフル回転し始めた。

ああ、そういえば俺、律佳のこと聞かれたんだよな・・・？
とすると聞かれた内容は・・・個人情報だ。

個人情報聞いたヤツは一体何者か・・・“？”

“？”にあてはまる単語とは？いや、個人情報と来れば答えは一つしかない。

知らない人には何にも言っちゃダメって言うよな・・・

一筋の道理が見え始める。そう、あれは銃に良く似た改造銃だったんだ！ゴツゴツして、冷たくて、本物っぽかったけど。こんなご時勢だ！個人情報を聞くための、新手の

あー、そうかー営業マン！ったくなんてことを・・・

勝手に納得して、少年は立つと、わざわざこんなボロボロな俺を、と思ったが、何だか妙に、それも理に叶っているので、深く考えないことにした。

～続く～

其の九の二

まさか謎の大男が律佳を探しているとも思わず、本人、律佳は家で逆立ちをしていた。逆立ちするため、今は私服である。

「ねえ、どしたらそれくれる？」

さつきから“こうすけが”口の中にホイホイ無頓着に入れてくくツキーが気になっていた。残り十枚程度か。

「どうやったってやらねーよ。お前食いすぎだから」

律佳の方には向かず、相変わらずくツキーを頬張る耕輔。

「全然食べてないよ？」

「いや、食いすぎだ」

とは言うものの、何故か太らない律佳。毎日大食い選手並み食うと言つのに。やはり、ライドだからだろうか。

律佳は、食い過ぎ食い過ぎ言われたので、ムツとなった。

「じゃあ、言ってみなよ！」

「ああ。いいぜ。チョコクッキー二箱だろ、ポテチを三袋、ヨーグルトを二個、カレー三杯に、ラーメン二杯」

と言いつつ終えてから、耕輔は律佳を見た。彼女は器用に片手で逆立ちすると、空いた手で、ぴしっと人差し指を立て、

「ホラー!!!」

「なにが“ホラー!!!”なんだよ！」

ダンツと机を叩き、立った瞬間、入れ物に移し変えたクッキーが、入れ物ごと落ちた。

「あ!!!」

二人同時に言い、クッキー落下を防ごうと耕輔がまず動いた。が、律佳がそれを上回る速さで、器用にクッキーをこぼさないように入れ物を蹴り、然る後に、耕輔の顎を蹴り飛ばした。耕輔は強く上に吹っ飛ぶと、律佳が立って、入れ物を手にキャッチするのと同時に、フローリングの床に自由落下した。

「あ、ごめん……つい……」

「つい何だー！ー！！」

早くも復活した耕輔が、首を押さえながら、椅子に座った。いつも何かと家で攻撃されている耕輔は、いつの間にかタフになってしまったのだ。

「まーとりあえず、クッキーゲットオ」

リズムカルに言って、にこにこしながらクッキーを食う律佳を耕輔は悔しそうに眺めていたが、何だか本当に悔しいので、テレビをつけて見ることにした。どうやら戦争ものの番組のようだ。

二人は平凡に、今日という日常を過ごしていた。……そんな日常に、魔手が伸びていようとも知らずに。

耕輔の家の近く、さつき少年を襲った大男が、無線を人知れず開いた。

「こちら、ダーハン1からダーハン2へ。確認出来た」

大男がそう言くと、無線機の奥から、まだ年端いかいない少年の声が答えた。

「こちら、ダーハン2、了解。そのまま監視を続けてください」

およそ少年とは思えない冷たい声で応答がきたが、大男は驚きもせずそれを返す。

「ダーハン1、了解」

とは言ったものの、大男は気になることがあった。一応聞いてみることにする。

「……ダーハン2、他に動きはないか」

「いいえ、他に目立った動きはありませんが、何か」

やはりない。とするなら、先の“施設”内の騒ぎと言い、今起きた家の中の騒ぎと言い、納得出来ない箇所がある。

「俺の意見が正しければ、ヤツらは何らかの兵器を所有している」
さして驚く様子もなく、少年は答えた。

「兵器、ですか。どうしてそう思うんです」

「ターゲットが妙な動きをする。必要のない攻撃を加えてまで、何かを取り上げようとする動きがある」

「・・・どういことですか」

「例えば、少年に対する腹部への攻撃。キーワードは“ジョーカー”だ。ターゲットはそれを盗まれ、自然に取り返したように見せたが、“ジョーカー”を取り戻すために必要のない攻撃を加えたのは明らかだ」

「“ジョーカー”ですか。確かに、“戦争”に用いられますが、それはジョーカー以外」

話し最後まで聞かず、大男は、やはり、と頷いた。

「ターゲットはこちらの動きに関して、何らかの情報を得て、兵器を用意したのだ」

「いいえ、それは何かのまちが」

「では、キーワード“クッキー”は何だ」

やはり話しを聞こうとしない。少年はこれ以上は無駄だと思い、脳内知識の、“クッキー”を検索した。

「“クッキー”は、戦争時、携帯保存食として使われたことがあります」

「やはり・・・いつでも持ち出せるように、携帯食を充実させていたか」

「その可能性は低いかと」

「さすがは女性型ライドの傑作機、と言った所か」
「・・・・・・・・」

少年はこれまた無駄だと思い、再度指示を下した。

「監視を続けてください」

「了解」

その時大男の耳には、「まだいけるっ！っ！」と言うターゲットの声と、ガラスの割れる音、何故か銃撃の音ともに、兵士の声、「ここぞくたばるなっ！まだいける！俺たちはまだいける！」が聞こえると、次に「もういくな！どんだけ食う気だ！」と言う第二

ターゲットの音が聞こえた。それと同時に、“ヒュウウ〜ッ”と
いう爆撃弾独特の、落ちていく音がしていたのだった。

〜続く〜

其の九の三

「ほらほら！遅刻するぞーっ！！」

「うわーっ大変だーっ！」

律佳が玄関を走り出て、俺の後ろに続く。

とりあえず今日も、“遅れるかも知れない”と言う、意味はないが、律佳があらゆる行動を中断してでも急行する言葉でごまかし、学校に向かう。まだ限りなく、走り始めのことだ。

そこへお隣さんの智香が、何故か上空から降りてきて、格好良く着地し、ダツシユで耕輔と律佳に並んだ。

「おはようございます！律佳ちゃん、耕輔くん！」

彼女は息も切らずに笑顔で挨拶してきた。

「あ、ああ、うん、おはよう！智香さん！」

「おはよ、ちいちゃん！」

とりあえず二人とも、ダツシユしたまま挨拶する。この変な状況で誰も突っ込まないのは、唯一の突っ込み役である耕輔が、今日意図的にボケているからである。

とりあえず、智香の意味不明な行動を解説しよう。

智香は何故か、あらゆる行動を駆使してでも、律佳と耕輔に続き、登校しようとする、律佳の世話用ライドである。ただその行動、本当の意味で合点がいかないと言うわけでもない。行動を見るとただだんに律佳と登校しただけであろうということが、分かってしまう。嫌でも分かる。ただ例外があるようで、律佳が何らかの急用で学校へ赴けない場合のみ、智香は耕輔とともに登校する。

不完全な説明であるが、これで智香の朝の行動は理解出来たであろう。

「出来ないって！！」

そう叫んだのは耕輔である。

「いえ！やるんです！律佳ちゃんと私なら、不可能なことなんて・

「！！！」

目の前で踏み切りが閉まろうとしている。あとその踏切まで約10m程度。その場所から、今から閉まらんとしている踏み切りを突っ切ろうと言うのだ。別段意味はないのだが、律佳が急いでいる。智香も無理難題があるうとついでいく、と言うなんとも不毛な図式で、この会話は成立している。

「いや！お前たちが出来ても、俺が出来ないって言ってるんだ！！」
諦めてダッシュを止めようとした瞬間、後ろから強烈な衝撃が来た。背中の一部のみを強打されたようで、その勢いは、電車が走り抜けていくその上の電線をも、をひよいと飛び越えるほどであった。

本人にしてみれば、突然飛んだと言う恐ろしい体験でしかなかったが。

その本人、耕輔は、そのまま地面に、落ちた。倒れたときつつぶせの状態だったと言うのは言うまでもない。

「イデエエ・・・」

イデエエで済んだのは、耕輔だからである。通常の人間なら、体中の骨が折れていることだろう。皮膚もえらいことになったと思われる。

その両隣、痛む耕輔を挟んで、律佳と智香が手を叩き合わせ、喜び跳ねていた。

「やったね！律佳ちゃん！」

「うんうん！私ナイスショットだった！」

「・・・・・・」

耕輔はそのまま前進して、パンパンと制服を手ではたいて、歩き出した。

「こつすけ、すごかったよー！」

律佳が、四角いかばんを、両手でスカートの前で持って、耕輔の隣に並んだ。

「・・・何がすごかったんだ？」

むすりとして聞き返す。

「だってね、だって、こうすけ蹴ったら、みごとに“線”にひつかからず、飛び越えたんだよ!？」

ああ、やっぱりか。と耕輔は思った。ちなみに律佳の言う“線”とは、電車の電線のことだ。

この痛烈な背中への痛みは、律佳の蹴りのせいだったか。

そんな常人離れした考えを、この馬鹿なら思いつくだろうと、もう分かっていた。まさか蹴っていたとは思わなかったが。

耕輔の表情に出た明らかな怒りに構わず、律佳は語り続けた。

「でね、やっぱりこうすけの言う通り、あの“棒”は走って通れそうになかったから、跳んじゃった」

跳んじゃった、じゃねーっ！っ！！

と内心地団駄を踏みまくったが、言っても論争にすら発展しないので、言わない。

と、その後ろから、智香が駆け寄ってきて、耕輔の背を撫でた。

「大丈夫ですか・・・？」

ああ、やっぱり智香さんは普通の人だ・・・！目頭が少し熱くなつたところで、恐ろしい一言が。

「・・・穴は、開いてないみたいですね。良かった。新しいの買わなくて済みますね」

僕の顔を覗き込んで、にっこりと微笑んだ。

ああ。やっぱり？僕のことには心配しないんだ・・・？

何だか一人、一喜一憂しているようで、気持ちがどんよりした。

が、とりあえず学校に向かうことにする。ガツクリと肩を落としながら。

その近くのどこかの屋上、あの大男が無線を開いた。近くにライフルがセットしてあり、キツチリと固定されている。

「こちら、ダーハン1からダーハン2へ。やはり完全に露呈している」

無線機の奥から、昨日と同じ少年が、抑揚のない声で返してくる。

「ダーハン2。認められません。その事実を裏付ける物的証拠も、情報も確認出来ません」

しかし、大男は食い下がる。

「ダーハン2、事実検証は不可能だ。ターゲットは怪物殺しのプロなのだから。程度が低い証拠なら、隠蔽もしくは、消すことも容易いだろう」

「そのような能力も認められません。ターゲットは知識に欠ける部分があります。また、思考能力も低い」

「それも偽りだろう」

「証拠がありません」

「だが、動きは確かにある。この狙撃のことを知らないのであれば、あのように自然に見せた高速移動、ならびに、難解な選択ルートは通らない」

「・・・・・・・・」

「あの電車の飛び越えは見事だった。体力的難がある第二ターゲットを、角度と威力を十分に考慮して蹴りを放ち、完璧な狙撃の回避を謀りながらも乗じて、目標施設への急行を成功させた。その前にも四発もの弾が全て外れた。俺とて百発百中の実力がある。しかし、みすみす外してしまった。これは露呈していると考えるべきだ」

「・・・・・・・・」

少年もそれは考えた。しかしそれは不可能なことだし、大体知っ
ていても、ターゲットには思考力がないに等しい。と言うことは、
綿密な作戦など立てられるわけがない。だが偶然には度が過ぎる・

。。

「・・・・・・・・ダーハン1。考えがあります」

「何だ」

「ターゲット以外の人物がいましたね」

先ほどから気になっている人物。あの、謎の行動がひっかかる・

「ああ。“チカ”と呼ばれていた。身体能力はターゲットに劣るものの、人間のそれを遥かに上回っている」

「・・・最初は怪しいとは思いませんでした。ただの隣人とばかり。しかし、彼女はライドです。徹底的にマークして下さい。黒幕は彼女しかありません」

それはあまりに低い可能性だった。頼りがたい可能性。捨て置くべきかもしれない。でも、もうこれしかない。

大男は困惑した様子もなく、了解した。

其の九の四

二年四組の教室にフラフラと入ると、僕は疲れたように席についた。どっこいしょと言いたい。

続いて律佳も隣に座る。表情は、いつも以上ににこにこしている。例の電車飛び越えが爽快だった、のだろう。僕にはよくわからないが・・・はあ、ノンキなヤツ・・・。

そこへ雪也が、いつも通りにはにかんで、片手をあげながらやってきた。

「よお、おはよう耕輔」

とここまで笑顔だったが、雪也の表情が変わった。どうした？って感じの顔だ。

「・・・どうした、元気ねえぞ」

アタリだった。

とりあえず、一目見るだけで疲労が分かるところ、僕は相当ゲツソリしているようだ。僕は苦笑いを浮かべた。

「ああ、まあ、ちよつとあつて」

ちよつとあつて。それに反応したのか、雪也はチラと律佳を見た。彼女はずつとにこにこしている。目の前の耕輔はとてつもなく疲労しているのに。雪也は察した。

彼にはこのパターンに前例がいくつもあつた。律佳が特別入学して、五ヶ月と言うまだ短い期間だが、それでも事件は数多く起こっている。と言うか起こりすぎていて。無論律佳のせいだ。雪也は納得した表情で、口元に手のひらを持っていき、小声で耕輔に言った。「ああ・・・またか？律佳ちゃんのせいだ？」

最後は絶対律佳が聞こえないようにポソリと言う。

「そう、そうなんだよ・・・今日は智香さんも・・・」

と。雪也はここで異常な反応を見せる。明らかに表情が驚きに満ちたのだ。いつものことだが。ちなみに理由は考えなくても分かる。

雪也は智香と言う名前が出ると、すぐ顔に出るから。

「え！？・・・ち、智香さんがどうしたって・・・？」

一瞬大声を出してしまったのを抑えて、つつと汗を流しながら彼は聞いてきた。

気は進まないが、言わないわけにはいかないな。僕は朝のことを一部始終話した。

話し終えた頃、雪也が唾然としていた。智香さんが、まさか。そう思っているのだろう。けど雪也も慣れないものだ、毎回智香の異様な行動は話しているのに。そのたび感嘆するとは。関係ないが、何故かそのときには律佳も会話に参加していた。一体いつの間に。本当に分からないのが恐ろしい。

雪也は唾然としながらも、どこか言い訳を見つけようと、焦りながら、

「ええ・・・智香さんが・・・」

毎度同じく、雪也は、信じられない、と言う顔をした。

関係のないハズの律佳は、

「シビレたよぉ〜今日のちいちゃんは〜！！」

手を意味もなくブン回しながら、シビレたぁ〜ツと言う顔と声でそう言っていた。

僕はその律佳の動作と意味をそのまんま無視して、雪也に答える。

「ああ、そうなんだよ・・・」

いまだ表情が変わらない雪也。いい加減、本当に、慣れるてもいいと思う・・・。

「でもまあ、それはそれで認めなきゃなんないんだよなぁ・・・」
と全く認められていない様子の雪也。

「私も認めるよ〜ちいちゃんの跳躍力と根性！！」

言わずもこれは律佳。関係ない。

「まさか、律佳を認めて智香さんまで跳ぶとは思わなかったよ・・・」

「

と上の空、と言うかあの時の、律佳と智香の喜んでる姿を、僕は思い出していた。本当に智香さんは謎が多い……。

そこで、ふうとため息をつき、

「……後で智香さんに聞いてみるかぁ……」

力なく雪也は僕と律佳に背を向け、席に戻って行った。律佳はその背をにこにここと見送り、また的外れなことを言う。

「ゆきやもシビれたんだねえ、きつと！」

違うだろ！！と言いたいが、確かにある種シビれたかもしれない。間違っても、刺激的なものではないと思うが。ただ、一目会った時から雪也は智香にシビれていた。が、ここまで毎日シビれさせられるとは思ってもいかなかっただろう。

それにしても今日の律佳、本当に楽しそうに笑ってるな。何か言っといてやるうか。いつもなら、言わないけど。

「僕の背中もシビれたよ、律佳……」

律佳は表情を変えず、手を顔の手に持っていつて親指をたて、ウインクした。

「でしょでしょ、最高だよね！！」

……ダメだこりゃ。

やっぱり律佳には、人を思いやることと、相手の話を聞くこととはしない。悪い意味でもいい意味でもなく、それが律佳個人なんだろうな。

そこで一人失笑してまう。

律佳はすかさず、

「あ、やっぱりこうすけも楽しかった！？一緒に跳んだからねえ」

……楽しいとはお世辞にも言えない。痛かったし。けど、

「ああ、楽しいよ、お前って」

「そうでしょ」

律佳は僕の言ったことを理解出来てないけど、そう認識されてもいいだろう。律佳もこれ以上の解釈は出来ないだろうし。

それに……。

本当に・・・楽しいかもしれない。

笑えないこともあるけど。でも、楽しそうに笑っているこの律佳が、不思議の火付け役なんだ。今日も昨日も。

少なくとも、僕の中では。

其の九の五

ジリリリリリ!!!

突然緊急避難用のベルが校内に響き渡った。火災探知機とよく似た音であるが、微妙に音が違う。これは怪物が現れた音だ。

「今日のはえーなー・・・」

教室のみなが慣れた足取りでグラウンドに向かうのを見送りながら、僕はそう口走っていた。

そう、早い。早すぎる。

確かにいつも怪物たちが来るのは、早い時間だが、しかし2時限目から4時限目に現れる可能性が高く、また1時限目ともにその前に現れることはなかった。まー、こうゆうこともあるってことか・・・？

律佳は得意げに笑い、隣で手をパキパキと鳴らした。やる気満々だ。

「私気分いいもんで妬いてんだな・・・へっ馬鹿なヤツらだよ」
馬鹿はお前だ、と言いたいが、進展がないので言わないでおく。

「律佳ちゃん、それはどうかと思うんですが・・・」
さすがにそれは違うと思ったのか、智香がこちらに歩きながらそう言った。

だが律佳は表情そのまま、ガッツポーズすると、
「うううん、間違いないね!!ヤツら妬いてんだよ!」

何故そういつも自信満々なんだ・・・?ってか、間違ってるだろそれ。

「そうですか・・・そう、かもしれませぬね」

思わず智香も苦笑してしまったようだ。

・・・っておかしい、智香さんが律佳に対して苦笑するなんて。

阿吽の呼吸で笑ってそうなもんなんだけどな。

「そんなことより律佳、智香さん、早く怪物退治して、授業再開さ

せよう？」

「はい、そうですね」

やさしい表情に、根がグツと詰まる感じで智香が答える。

「ええー、授業ヤダよお・・・」

と一人渋っている律佳を、僕と智香さんは見合って、互い笑ってしまった。なによう！いつもの調子で彼女は怒ったが、智香がなだめて、何とか怪物探しに至ることとなった。

この学校は四階建てで、校舎が二つ、にらみ合うようにして建っている。そんなに広くはない学校だ。

なので智香さんは隣の第二校舎、僕らはこちらの第一校舎を探すことになった。・・・本当は、僕らが第二校舎を探す方が良かったんだけど・・・。

珍しいことは続くもので、智香は第二校舎を探したいと必死に頼み込んできた。怪物が出現する確立が高いのは第二校舎なのだ。もちろん第一校舎にいるとも限らないが、可能性はとても低くなる。それでも智香は必死に頼み込んできた。

なんでも、律佳を危険にさらしたくないとか・・・でもどっちにしたって、智香さんは怪物に勝てないわけで、律佳を呼ぶことに変わりはないハズだ。しかしどうしても頼まれ、断る理由もないので僕らは渋々納得した。あ、いや、律佳は渋々してなかったな。

あらかた探し終えたところ、僕らは1年3組の教室前で一旦休むことにした。走り続けで体が辛くなったのだ。

珍しいことに律佳も疲れたと言って、教室の傘をたてるために作られた鉄の棒に座り込んだ。

ちなみに座ったのは僕の隣。座ったのはいいが、ここは座るために作られたものではないので、ちよつと座りにくい。しかも鉄なので、とても冷たい。が、休むには最適だ。

しかも今日は晴れてるから、傘は一つもない。障害物なしと言う

わけ。

にしても珍しいことは本当に続く、律佳が疲れたなんて本当に珍しい。なにせ彼女は怪物並みの、いや、それ以上の体力の持ち主だから。

「いないなー・・・怪物」

僕は窓から、智香が探しに行つた第二校舎をぼけつと見つめた。今頃全速力で走つて、探してるんだろうな、なんて思う。

律佳は若干疲れのある声で、

「・・・まー、いない方がいいよ」

「そうだなー・・・」

「・・・つてあれ？待て？ん？

隣の律佳を見る。いつもの律佳だ。ただ、今は少々疲れている様子だが あり得ない。

「お前誰！！！」

跳び退き、耕輔は、律佳からあからさまに“退く”体勢をとつた。「なに言つてんのこうすけ。あ、私の名前忘れた？」

屈託なくにこりと笑ってくる律佳。

「・・・いや？」

いつもの律佳だ。僕は鉄の棒に、バツが悪く座り直しながら、

「ば、馬鹿。忘れてねーよ」

居心地悪さでそっぽを向いた。

「照れなくていいじゃーん」

虐めるぞと言つ言い方で、律佳が笑ってくる。

「違つて言つてるだろ」

そう、本当に違う。今日の律佳はおかしすぎるから、誰なんて言つたのだ。

分かつてる。律佳だ。そうじゃなくて、怪物が“いない方がいい”なんて、いつもの律佳らしくない。絶対におかしい。

・・・故障か？それならどこがおかしくなつて、疲れたつても理解出来なくもない。

何だか、僕も少し疲れ過ぎている気がするけど 関係ないだろう。

「お前、頭イタイ、とか、どっかイタイところ、ないか？」
故障ならばどこかに異常が起きているかもしれない。

「なに、突然。言い逃れ？」
「とにかく、どうなんだ？」

彼女は僕の顔を疑い深げに見たが、観念した様子で頭の後ろをポリポリと掻いた。

「・・・ううん、全然。頭は・・・ブーツとするけど」
「ああ、そう・・・」

ブーツとくらいじゃ故障じゃないな・・・。だって僕もブーツとする。って言うか・・・。

「眠い・・・？」

それに苦しい。なんだ？ どういう・・・。
「私も眠いかも」
反応して、律佳も眠そうな声で言った。

・・・？

これって、もしかして・・・！？
「律佳！！立て！行くぞ！！」

僕は彼女の腕を引つ張り、強引に立たせると、まだ調べていない1年1組の裏・・・予備倉庫へ向かった。とにかく急いで足を走らせる。

「ちよ、ちよ、待ってよこうすけ！！私まだ・・・」

彼女が、辛そうなのと眠そうなのが混じった疲れ声で言った
が、

「待てない！！待ったら僕たち、死んじゃまう！！！！」
ハアハアと整わない息のまま答え、朦朧としながら、走った。

其の九の六

1年1組の予備倉庫へは、その教室の手前の渡り廊下を介して行ける。実際には遠回りになってしまふ道であるが、一旦外に出る必要性があると思つたので、わざわざ遠回りすることにした。

けれども、その考えがまっすぐ通るほど、現実甘いものではなかつた。

渡り廊下へと続く道、1年1組の手前には、鉄のドアがある。

いつもなら、力で押せば重たげにでも開く扉だったのに、今日この時、最悪のタイミングで、その扉は開かなかつた。外からロップ、例えば手綱でもいい、あとカーテンを破つて使うとか、とにかく外のノブに“止め”がしてあるようだった。何度押しても、引いても、この音だけが無常に響く。

ガチャンガチャン ！！

「クソツ！開けよツ……！！」

ガチャン、ガチャン ！！

全く開く気配はない。

チクシヨ……こうゆう時、どうすればいんだよ……！！

まさか使える武器もない。こうゆう時、勇者なら剣で、スパイヤ軍人なら銃で壊せるのに……。言わずも僕は学生だ。

うーん……。と、一つ案が浮かんだ。

そつだ！律佳に蹴破つてもらえば！

このくらいの鉄の扉なら、彼女はおちやのこさいさいで大穴を作つてくれるはずだ。

「はあ……はあ……はあ……」

汗をダラダラとかき、息が整わないでいる律佳でも、この扉を壊すくらいはやすいだろう。それにこの扉さえ壊せば、外にさえ出られれば、この疲れは一瞬で消えるハズ……！だってこれは……。

「律佳、このドア、ぶちぬいてくれー！」

彼女は答えた。しかしその答えは予想を遥かに逸脱した答えだった。

「はあ・・・っはう・・・ごめん・・・ムリ・・・だよ・・・」
くたつとそこで正座が崩れた感じで律佳は足を折った。

「り・・・律佳・・・？」

「・・・っはあ・・・ごめん・・・はあ・・・力が入らないの・・・」

苦しそうに顔だけを持ち上げて言う彼女。その様子に、耕輔はただならぬ異常を感じた。まさか・・・本当に・・・！？

「・・・だいじょぶか・・・律佳・・・？」

見るからに異常な疲れ度合いだった。一応耕輔も少々息は切れているも、さきほど休んだばかりなのでそう疲れてはいない。だが律佳はこの様子・・・とすると・・・？

しまった・・・！くそっ・・・！！

遠回りするべきではなかった。だって“彼女”は、僕がこう考えることを知っていた！

彼には一人、めぼしい原因人物が見えていたのだ。つまり犯人がさつきからひっかかっていた・・・あるキーワードに・・・。それに合点がいく人物・・・！

智香だ。

智香は普段、世間話しかしてこなかったが、情報色彩風薫じょうほうしきさいふうかというものの話しをするときだけ、目を輝かせて話していたのである。智香いわく、

「情報色彩風薫というのは、その人の遺伝子と言いますか、人の“色彩”に影響を及ぼす薫りのことなんです。時にリラックスさせ、時に食欲をそそらせ、時に不快な気分させます」

大事なのは次だ。

「それを操作して、私、人の為になるようなものを作ります！・・・まあ・・・最強の毒も・・・造れるんですけど・・・」

彼女に毒のことを詳しく聞いたことがあった。

「出来れば怪物専用の毒が造りたいです。律佳ちゃんの役に立ちたいですから。ちなみに・・・本当に余談ですけど、律佳ちゃんの遺伝子はよく知ってますから・・・律佳ちゃん専用の猛毒は造れます。・・・それこそ、全てを奪えるような薫りを・・・」

そのときは笑っていられたが、今になって笑えなくなった。つまり、犯人は彼女。澤木 智香だ。そう、彼女はその、例の“律佳専用の毒”というのを解禁したのだ。この校舎で。

さらに状況証拠で言うなら、智香が“第二校舎”を搜索したいと言った理由にも合致する。何故なら、律佳専用の毒といえど、ライドの智香にもその毒は効くのだ。これを踏まえれば、智香は確実にこの件の犯人だということになる。

「とにかく、ここから動かないと・・・」
もたもたしていたら、律佳が危ない。

遠回りと言う失敗を犯してしまった以上、ここから、1年2組、3組とを通過し、事務室を迂回し、さらに1年1組の裏へ行かねばならなかった。

無理をしても律佳をそこまで連れて行かないと・・・!

耕輔は、座ったままの律佳の手を掴んで、くいと引いた。彼女の手に力はなく、また立とうともしない。

「・・・動けないよ・・・こうすけ・・・」

それほど律佳の体力は危うかった。全身汗でもはや耕輔を見上げる余力もなく俯いている。

呼吸は安定しているが、少し走るとまた息がズレてくるかもしれない。さすがにそこまでして動かすわけには行かない、助けるどころか、それは殺すことにも成り得る。しかし、だからといって、絶対置いていくわけにはいかなかった。

こうなったら・・・!

もう意地を張っているときじゃない。

「律佳・・・じゃあ、おんぶしてやるよ。乗れ」

「・・・え？」

突然のことに目を見開く律佳。耕輔は突然気恥ずかしくなったが、隠すように、物凄い剣幕で言い放った。

「いいから！死にたいのか！！？」

とは言うものの、耕輔が死ぬことはない。

智香の話によると、人間とライドでは、もともと“色彩”が違うらしいのだ。

しかし今回、耕輔も息苦しく、また眠いなどの症状が出ているところを見ると、少なからず人間にも被害を及ぼす因子が含まれているようだ。ただ完全ではないらしく、少々の被害である。

律佳は目を真ん丸くしたまま、冷め上がった汗の顔で、しかし次の瞬間、頬を赤くして、にっこり微笑んだ。

「頼むね・・・こうすけ」

「ああ」

律佳をおんぶしてやると、意外なことにとても軽かった。40キロ程度、あるかないか。あるいはそれ以下かくらうに感じる。

あんなに食べていてこんな易い体重だとは、と、耕輔は思ったが、この状況を考え、すぐに中断し、走った。

しばらく順調に走った後、

「私、重い？」

どことなく不安そうな律佳の声が聞こえた。

「いや、全然。米持つよりラクだ」

僕がそう答えてやると、律佳は、ふーん、鼻で答えた。顔は見えないが、笑った律佳の顔が見えた気がした。そして何を思ってたか、

「今度から、私が米持つね」

などと言ってきた。何だか楽しそうな声。これは冗談で返すのがいいかもしれない。

「ああ、よろしく。だから、寝るなよ！！？」

これはマジだ。だが律佳は思い切り抗議した。

「ええー眠いよー！！」

「ダメだ！！冗談抜き！！じゃないと明日からメシも抜き！！」

これは効いたろう。

案の定、律佳はこう叫んだ。

「なにー！ー！ー！分かった！寝ない！」

「よし！」

「帰ったらラーメン三杯作れよ！？」

「……………」

「……………」

「何でそこで黙るんだよー！ー！」

「やっといつもの調子が戻ったか……………」

「しかしどれもこれもが、元気なさげな声である。心と体がついてきていないようだ……………」

「こか非力な声なのである。」

「声には完全な疲れが聞こえるし、律佳の体からは、熱い汗と、すぐ冷え上がる汗とが混同した温度が感じられる。早くなんとかしないとイケない。だって。だって、こんなの。」

「こんなの、とてもじゃないが、律佳じゃない。」

其の九の七

2組、3組と、順調に駆け抜けるも、体は重くなってい出し、まぶたも重くなってくる。やはり人間にも十分な効果を出せるブレンドをしたらしい。

だが何故こんなことをするのだろうか？智香はいつも、毎日微笑んでいたし、不満もなさそうな様子だった。前に、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ寂しそうに微笑んでいたことがあったが、きっとは関係ないだろう。

とすると、やはり分からない。どうして、律佳を殺す必要性があるのか。特に智香は律佳を慕っている。まさかストレスなど感じているはずもない。

「どうしたの？こうすけ」

律佳は不安顔になって黙考しているこうすけが気にかかった。やはり重いのではないだろうか、とか。

「ん、ああ・・・なんでもないよ」

こちらに声を振るう時だけ、わざとらしく笑って、明るくしようとしている。明らかにこうすけは無理をしているのだ。

「なに？どうしたの？無理しないでいいよ」

こうすけはこうすけで、いつもの律佳とは程遠い律佳の対応が心配でならなかった。早く元気な律佳が見たかったのだ。

「無理なんかしてない。ただ・・・」

「ただ・・・？」

「いや、別に。ごめん」

律佳は気になったが、ここはあえて聞き逃した。そういえば智香はどうしたのだろうか。今頃怪物を発見しているのではないだろうか。

「ねえ、こうすけ。ちいちゃん、どうしてるかな。あ、実はもう怪物なんか倒しちゃってたり・・・」

「え？・・・ち、智香が、なに？」

「え・・・？いや、だからさ、ちいちゃんが・・・」

「・・・あ、いや、いい。なあ、今は智香さん・・・智香のことは言わないでくれよ」

こうすけにしては意外な対応だった。しかも何だか、とても嫌な顔だ。

「どうして？」

「・・・色々だよ」

少し言いよんどんで、こうすけが答えたのがとてもひっかった。

色々とは、どうゆうことだろう。

彼は走り続け、やっとこさ1年3組の裏前までやって来た。あともう少しいけば・・・。

・・・珍しいことは、本当に続くものである。

「なっ・・・!？」

奥の階段から、怪物がぞろりとやってきたのだ。幸か不幸か、それは一匹。しかし。

「ちっ・・・どうする・・・」

律佳は行動不能。使える武器も物もない。怪物は赤い目をまわりに振りまき、敵を探している様子だった。ということはまだこちらに気付いていない。良かった。すぐに死ぬことはない。

「律佳・・・。逃げるぞ？」

「どうして？」

「どうしてって・・・ほら、あそこだ」

耕輔は腰をかがめて、律佳が怪物を視認出来る角度にした。

「・・・ちいちゃん・・・？」

「・・・はあ！？何言ってるんだお前！！冗談言ってるじゃねえぞ！」

しかし、眼を細め、怪物を見る律佳の目は、明らかにそれを智香だと認識しており、まして冗談を言っている様子もない。

「・・・まさか!？」

ここで最悪の事態が耕輔の脳裏に浮かぶ。

「ダミーウィンドか……!?!」

智香のサポート・アビリティ、「ダミーウィンド」は、どこに、どうゆうふうで、何を見せるのかまで、細かく設定出来る、「視覚的幻覚」であり、誰に見せるかまでことこまかに設定することが出来るのである。

つまり、智香はこの展開をあらかじめ読み、怪物には人間のダミーウィンド見せつけ、ここまで誘導し、律佳には怪物が智香に見えるよう設定されている……ということだ。

「ちいちゃん!!」

謀らずも、律佳が手を振り、笑顔で叫ぶ。

ギロリと赤い眼がこちらに向けられた。

「……!!」

絶体絶命。もはや、ここまでの運命だろうか。

其の九の八

今こそ冷静になる時だった。けれど意に反し、頭は真っ白になっていく。何も考えられない。

そのときは一瞬だけだったが、耕輔は、少しずつ近づいてくる怪物が、もう目の前、すぐそこに来た錯覚を見た。

「……………ツ!!」

息が止まり、全身が凍りつく。

「こうすけ!!なにやってんの!!逃げなよ!」

はあはあと息を乱しながら、体を思い切り揺さぶって、律佳がそう叫び倒していることにやっと気付いた。

「ダミーウィンドだよ!こうすけ!!ち……ちいちゃ……ちいちゃんのダミーウィンドなんだよお!!アレ!!」

戸惑いながらもしっかり名指しし、怪物に指を指す。

まだ頭の中は真っ白だった。だが、耕輔はそれにすぐ反応し、怪物から逃げ出した。

律佳と言う、その大切な名前だけ、頭の片隅に記されていたのだ。とにかくがむしゃらに走る。

「……………律佳……………」

少しずつ頭が戻りつつ、突然耕輔は混乱し始めた。

「り、律佳!!無事か!?ち、智香さんはどうなった!？」

「こうすけ!なに言ってるの!!ちいちゃんは、だから……。わ、私をころそうと……。さあ……。!!」

途中律佳の声が震えていた。

「智香さんが……律佳を殺すだって……。何が?どうして智香さんがお前を?」

「し……。知らないよお!!……そんなこと、聞かないですよ……」

ぐすつと堪えて、律佳は目から“水”が出ないよう努めた。

「ここでやっと耕輔が全て思い出した。かわりに混乱時の記憶は吹き飛んでしまったが。」

「……！……そ、そうだった……！そうだ！智香がお前を殺そうと……！……いや……」

言おうとして止める。一旦口の中で暗証し、今律佳にとって酷いことを言おうとしてしまったことを悔いた。しかしほぼ内容は伝わってしまった。

「そ、……そうだよ……ちいちゃんは……わたしなんか……いらぬんだよ……」

ぶわあつと水があふれた。とても悲しかったのだ。智香が、自分を消そうとしていることが。

結局、私はカイクツと同じ存在なんだっ……。

間違っているのかそれで正しいのかも判断できず、律佳は、ギョウと耕輔を後ろから抱いた。いつものような力はなかった。いつもの律佳ではなかった。

「律佳……そんなことは……」

今しがたまでずっと犯人は智香だと思い続けた耕輔だったが、律佳のこんな弱々しい姿を見ると、“そうだ”とは決め付けられなかった。でも“違う”とも言えない。

大量の熱い水を背中に感じる。汗ではない。涙だった。

其の九の九

どかんと後ろの壁が崩壊した。奥から現れたのはさきほどの怪物だった。よく見ると、いつものヤツと違い、緑の殻ではなく、赤かった。それに角のような突起が赤い目と目の間の上についている。

「あれでやられたら・・・ひとたまりもないな・・・っ！」

耕輔はその後、ずっと走り続けていたが、怪物は直線に耕輔らを捉え、壁を崩して最短距離で襲ってくるため、逃げ切れないでいた。背中の律佳はダランとし、だが耕輔を抱きしめ、泣き続けていた。手に力はなく、本当に弱弱しく抱いてきているのがとても痛かった。

「律佳、シツカリしろよ？何とか成るから・・・」

「こうすけ・・・こうすけ・・・」

呼びかけないと死んでしまいそうな・・・いや、律佳は死なない。放っておけば、ただ機能停止するだけだ。再生は勿論出来るらしいが、過去の例において3回ほどしか成功していないらしい。0.5%の可能性だ。だが関係ない、耕輔にとってもう律佳は人間と同じだった。殺されたら、死ぬ。それに、

ここで律佳を殺されたらどうなる！？この学校は！みんなは！？それ以上に何か、執拗に律佳にこだわる何かがある。よく分からないが、これは恋心ではないことだけハッキリしている。では何なのか。考える余裕もなく、また考えても、決して分かるわけでもなかった。

階段を駆け抜け、二階へ行く。怪物はその後をすするとついてくる。

「早いな・・・ちょっと・・・」

意外な怪物の進行速度に、幾度目の冷や汗をかいた。

時間の問題とは分かっているけど、どうしても諦めることは出来ない。せめて智香に理由を聞きたい。

うわっ・・・！？

生徒のゴミだろう、耕輔はコンビニの袋に足をとられ、倒れた。反動で律佳が廊下に投げ出され、勢いよく壁に打ち付けられた。「うぐあっ……!!」

小さい悲鳴をあげて、律佳はさらに息を荒くさせる。

耕輔本人は、ひざを打ち付けただけでどうとどうという事はなく、すぐさま律佳に駆け寄って上半身を抱えあげた。

目からうつすらと涙を流し、頬をを赤く腫らして眠っているような顔だった。

「だいじょぶか!? 律佳!!」

律佳は答えず、ただ辛そうに荒く呼吸をしている。

程なく後ろから、ジュルジュルと音を立てて怪物が上がってきた。もうこちらが逃げないと判断したのか、ゆっくりと迫ってくる。

「く、くそっ……」

武器も使えるものもない……いや? 一つある!

耕輔は廊下に備え付けられている消火器を持ち、一応構えた。だが構えていると言うよりはただ持っているようにしか見えない。

少し経ち、意を決すると、耕輔は消火器を持って怪物に突撃していった。中身をぶちまけることも出来たが、無駄だろうと思ったのだ。先の逃げの道中では、怪物は壁を破壊して来たあたり、音に敏感だと判断したからである。

突撃したのはいいが、あっけなく彼は、鎌の逆手で弾き飛ばされた。

「うわあっ……!!」

とてつもない衝撃に弾き飛ばされ、ドン、と教室の壁に打ち据えられる。背中に痛烈な痛みが走った。

消火器は律佳の倒れている横を滑って、およそ届くことないところまで転がって行ってしまった。

「つつつ……」

知らずに耕輔は、背中を押さえながら目を開く。

目の前にはすでに怪物がいた。あまりの恐怖に、声が出ない。

赤い目がこちらをギツと睨みつけている。

・・・早く殺せよ……。律佳の最後は見たくないんだ……。心内でそう叫んだのが通じたのか、怪物は早々に鎌を振り上げた。

鎌が鋭く耕輔を貫かんと振り下ろされた。

ヒュン、ドゴオオン！！

廊下が砕ける音がして、その場は静寂に包まれる。

「・・・・・・・・？」

死んでいなかった。

悪運が強いとも思ったが、やはりおかしい。

恐る恐る目を開けると、怪物は外したのか、耕輔の顔の真横に鎌が突き刺さっていた。

「やつぱ・・・・・・・・偶然か・・・・・・・・？」

様子を見守る間もなく、怪物が突然、背中から血を吹いた。緑の血液がどろどろとしながらも、勢いよくぶちまけられる。

怪物はギャオオオとかすれた悲鳴をあげ、耕輔に背を向け、自分を攻撃したであろう人物を探した。が、怪物が見えぬ力にまた攻撃を加えられ、グラリと体を揺らされると、また勢いよく血を噴出した。叫

びをあげて、それでも怪物は敵を探し続けたが、そのうちぐったりと身を斜めに傾かせた。

「・・・・・・・・」

その様子が把握出来ない耕輔は、とりあえず立ち、怪物をジッと見た。背中がとても痛むが、興奮状態において、痛さを忘れていた。

怪物は動かず、緑の血をだらだらと噴出しているだけだった。傷口もよくわからない。大きすぎて。何かの反動で衝撃が起こり、大穴を作っているように見える。

カツン、と廊下に響く音がした。耕輔はまた恐怖感に襲われ、そ

の方を見たが……。

とても信じられない光景だった。

律佳が、ゆらゆらと、安定しない足取りだが、立っていたのだ。体に怪物の血を被っている。

「コウスケを……コロスな……」

誰の声だか分からないほど、律佳の声は低かった。いや、確かに声は律佳だろうが、元気がないとは言え、あまりに違いすぎるのだ。「コウスケをコロ、ス、な……コウスケをコロ、シ、ス、たら、ワタシは、オマエを、抹消ス、シ、る……」

瞬間、律佳は糸の切れた人形のように、どさと廊下にくず折れた。耕輔はそれをぼーっとみやっていたが、頭をぶんと振って、とにかく律佳に走った。

「律佳！」

前のめりに倒れた律佳の上半身を表に向け、抱き上げる。ガクと首が重力に引つ張られていた。

「お、おい律佳……！」

体をゆするが、律佳はその振動に身を任せるだけで、その眠りを破ることはなかった。

「嘘だ……！！嘘だぁ……！！」

静寂の場に大きな悲しみが貫かれた。

其の九の十

第二校舎三階の窓辺、第一校舎を悲しげに見る少女がいた。

「律佳ちゃん・・・」

智香である。彼女は青い瞳を涙で潤ませて、ずっと第一校舎を眺めていた。

その隣には、“ダーハン”と呼ばれた男が立っている。

智香はそのダーハンと言う大男に向き直り、泣きを抑えながらも、しっかりと睨み付けた。

「どうしてあなたは・・・ッ！！こんなことをさせるんですか・・・ッ！！」

大男は智香を一瞥し、微笑も浮かべずに、

「何を言う。お前もこれを望んでいたのだろう」

ひどく機械的で、感情の力ケラさえない声だった。

「違う！！私はこんなことを望んでなんかいません！！」

「嘘をつけ。では何故俺に協力をした」

「ッ・・・それは・・・！」

「それは。何だというのだ」

智香は必死に涙を抑えるが、目から大粒がぼろぼろとおちていく。口からも、ひっ、ひっ、と嗚咽が漏れてしまっていた。

「私はあ・・・ッ！！」

ぐつと拳を握り締めて、大男の目をギリと睨みつける。最大の怒りをもって。

「私は、律佳ちゃんが死ぬ以上に、律佳ちゃんが壊れてしまうのを見たくなかった！！！」

大男はその怒気を少しも感じられず、変わらぬ真顔でいた。

「どうゆうことかわからないな」

「大体、あなただって・・・！！みんなを人質にとりながら、そんなことがよく言えますね！！？」

「保険だ」

智香はそう、この大男と手を組んで、律佳を殺そうとしていたのだ。耕輔と律佳の予想とは違うが、おおよそ外れではなかった。しかしだ。

智香とて律佳を意味なく殺す器ではない。律佳を慕い、律佳の為に何でもして、いつも微笑んでいた彼女が、まさか理由なしに律佳を殺そうとしない。

智香はこの大男に脅されていたのだ。協力しなければこの職員以下生徒全員を殺す、と。それに付けて、封をしていた、試作の律佳殺人用、“情報色彩風薫”じょうほうしきさいふうかんまで、いつの間にやら奪われてしまっていたのだ。

もはや協力しなければ、律佳だけではない、耕輔、先生、友達、同級生、その他大勢の人が死んでいた。

なのにこの男きたら、それでも“お前が望んでいたことだろう”などとあられもないことを言うってくる。人間じゃない。ただの機械だ。

「そっいえば、俺の目的を言っていなかったな」

智香は押し黙って、口を開こうとしない。語り合うのもおぞましい。男は構わず語り続けた。

「俺は復讐をしに来た。律佳。あの悪魔に」

智香は一向に口を開けないが、脳裏では、何故かおぼろげながらそれに覚えがあった。だが男の口からは、智香などと言う言葉は発せられていない。

「あれは五ヶ月前のことだ」

五ヶ月前。丁度律佳と智香が耕輔に託された月だ。

「彼女がここに配属される二日前。あいつは内にある機械的理解を示した人間を暴走させた。もちろん故意でないことは分かっている。しかしあいつは」

ここで初めて感情が見え隠れする淀みをもたらずと、しかしすぐ感情は消えうせた。

「あいつはあろうことが生みの親を数人殺し、俺と“雄谷”まで殺した。それに」

また一旦止めて、大きく息を吸い込み、ごく息を呑んだ。頭に過去が回想される。

「私が親愛した女性ライド……。 “律佳”までも、殺した」

聞き終えたころには、智香は別の理由で涙が止まり、背筋を凍らせて、目を大きく開いてうつむいていた。

「やつが暴走した“機械仕掛け”の人間は、記憶とともにその精神までも破壊し、彼女の性格までもを捻じ曲げてしまったのだ」

つまり、律佳と言うライドは、その後この男のことを完全に記憶から抹消してしまい、彼女のその性格自体でさえも維持出来なかったわけだ。それは他人というにふさわしい。

こおと風が吹きぬけ、廊下がびりびりとした空気に包まれる。

「過去、例として助かった三人のライドがいる」

それは智香も知っていた。だが頭が正常に働かない。だって……。

男は智香を一瞥もせず語り続ける。

「俺と“雄谷”と、そして彼女。律佳だ。そして俺は、彼女の仇を討つために、彼女を殺す」

其の九の十一

しんと静まり返った廊下。その中で、智香の心臓だけどくどくと異常に動いていた。

実は。律佳を暴走に導いたのは、智香なのだ。

ある日。智香はライド製造施設はライド貯蔵庫で、カプセルの中とある事故で機能を再生、内からガラスを割って、逃走を始めた。しかし警備は厳重で、智香はそのライド製造施設の中で逃げるしか術がなかった。外に出ることは不可能。

逃走から二日。薄い布を羽織っただけの智香は、体力的に限界だった。そこにでくわしたのが、律佳である。

彼女、律佳は、当時今の性格からは考えられないほど優しく、人を気遣う大人っぽい女性だった。

そんな律佳に一瞬で惹かれ、智香は追われているのだと正直に話すと、律佳はそんな智香をかまってくれろという。

逃走から五日。いつものように家事に専念していた智香は、突然不幸に見舞われる。

その日の正午だ。律佳が智香だけに教えてくれた、愛しい人が突然来た、が。その人は同時に施設警備隊でもあり……。捕まることを恐れた智香は、見つからないように律佳を呼び出すと、智香は律佳に刃物を掲げ、ライドの思考中枢とも言うべき後頭部の一部を思い切り突いた。

反動で暴走。律佳は二日間まるまる暴走し、施設のありとあらゆるものを破壊して行った。その中に、自分の愛した男と、他ライドの“雄谷”、律佳を造り出した科学者たちが混ざっていたなど、彼女は知る由もないだろう。そして最後、彼女はやむなく射殺された。再生した後も律佳は精神崩壊状態となり、矯正に簡易プログラムを打ち込まれ、今の状態に至る。

執拗に律佳を慕う智香は、それらを償うためだった。

そして今。そんな優しい、大切な律佳を、もう一度殺そうとしている。しかもその愛しい人、律佳が愛したこの男とともに。

お互い知らないのだろう、両思いだったことを。

「ダ、ダメですよ・・・」

ばくばくと動く心臓を押さえ、その男に歩み寄る。男は眉一つ動かさず、智香を見つめた。

「いまさらなにを言う。ここの者が皆殺しされてもいいというのか」

「それは、いけません・・・けど!!」

ばつと男にしがみつく。

「あなたは律佳ちゃんを殺した律佳ちゃんに復讐しようとしているんですよね!？」

一瞬嫌な表情に顔を歪めた男だが、

「・・・ああ。そうだ。あいつを・・・」

「聞いてください・・・。実は・・・」

私が、律佳ちゃんを殺したんです。

「・・・そのっ・・・」

私が・・・。

「早く言え」

・・・。

「り、律佳ちゃんは・・・死ぬ前、あなたのことを好きだったんです・・・!両思いだったんですよ!」

智香は話を脳裏ですり替えた。とても言えなかった。

だが男はそれでも反応を示し、黙考した後聞いてきた。

「・・・。そうだとしても、何故お前がそれを知っている」

「今の律佳ちゃんになる前にも、仲が良かったもので・・・」

今、とんでもない間違いを犯してしまった気がする。

五ヶ月前も。

ずっと。

また、またやってしまった。

間違った。

「ふむ・・・第三者とは、よく言ったものだ」

納得したように頷くと、男は智香の目を覗き込んだ。

「ならば、共に律佳の弔いが出来るな」

「・・・ええ・・・」

返す言葉もなく、うつろに顔を背くと、智香はまた第一校舎を眺めた。

私は、律佳をまた殺してしまうのか

其の九の十二

「律佳！律佳！！」

重力に身を任せている律佳には、耕輔の声は届かない。

それくらい本人も分かっていた。それでも、どうしても、諦められない。死ぬなんて・・・あり得ない。あつてはならない。

「律佳！！起きろよ！！起きろつてば！！」

揺らすたび、伴つて、ぐらりぐらりと首が動く。やはり起きない。本当に死んでしまったのだろうか。温度からしても、冷たくなつていつているのが分かる。

「・・・そんな・・・」

初めて耕輔は、それを“遺体”だと思った。今さっきまで生を持つていた、必死に生きていた遺体を、自分は抱いている。

「くそつ・・・なんで・・・！！」

これが智香のせいでもないとしても、何故か智香がとても憎らしくなつた。

律佳は死んだんだぞ！！今！！どうしてそのときに！！

智香、何故キミがいない・・・！！

心の中で言葉が転がる。何度もそれを呼応する。

び、ぴー。自動再生起動。緊急措置、取ります。

力なく律佳を抱いたままの耕輔の耳に、機械的な声が響いた。だが、どうでもいい。律佳は。

律佳、復帰します。

「ああ・・・？うん・・・」

「・・・え？」

律佳が上半身を起こし、目を擦り始めた。どうでもいいように全然良くない。耕輔は目を疑うと同時に、じーっと律佳を凝視した。

「？ ころすけ、なにやってんの？」

「ええええ・・・」

今しがたまで遺体だと思っていたのに、生きていた律佳を見て、耕輔はうなだれ、喜ぶどころか後悔した。

「？」

意味が分からないと言った具合で耕輔を眺める律佳は、やはりいつもの律佳だった。

耕輔も意味が分からなかった。色々問い詰めたい。一番聞きたいのは、何故生きているかだ。

しかしややこしいことは聞いても分からない律佳だ。なにを聞いても無駄だろう。と悟っている耕輔は、

「ああ、もういい・・・とりあえず・・・」

「うん？」

「この壁壊せ」

「はい」

にこつと笑って、律佳は立つと、拳で思い切り壁をぶち壊した。さらに呆れた耕輔は、頭を抱えて言う。

「俺をおぶって第二校舎まで行ってくれ・・・」

「うんっ」

ここは第一校舎の二階、このまま降りたらグシャと潰れ死ぬ。だから律佳に頼むしかなかった。と言うか、本当に脱力させられてしまったので、跳ぶ事はおろか、歩くことも出来ない。体の力は全部抜けてしまったようだ。

耕輔は律佳の背に乗り、そのまま第二校舎へ向かうよう言った。

律佳の上は上下が激しく、ちょっと気持ち悪かったが、仕方がないだろう。

「チュンツ！！」

「わあッ!?!」

「うわっ・・・!!!」

何かの軽い音がすると、突然律佳が後ろに跳び下がり、耕輔は第二校舎へ向かう途中の中庭に放り出された。

耕輔はそのまま背中から地面に直撃した。

イテテと眩きながら、背中をさすって律佳を見上げる。

「いきなり、どうしたんだよ・・・律佳・・・」

「さあ、私もよくわかんないけど・・・」

「いやいやいや、それ困る・・・」

「あはつ。えつとね、多分、銃だね」

銃・・・？いきなりなにをいつとるんだコイツは。

擬似死亡のせいかわ、頭がおかしくなっているらしい。銃など絶対にあり得ない。智香が犯人だとしても、銃なんて扱えるわけ。

チユン！！

一瞬素早く動いた律佳の近くで、またも軽い音がした。

つてこれはマジで銃・・・？

「ホラホラ！！銃だよ！！」

「銃、だな・・・」

それよかばけーつとここに倒れこんでいるわけにはいかない！！弾に当たったら死んでしまう！！

だが、何気に律佳は楽しそうだった。

「お、おい律佳！！逃げるぞ！！」

「は〜い」

微笑みながら耕輔の後をついてくる律佳の後ろで、軽い音が幾度も鳴り、そのたび律佳はそれを一瞬前に避ける行動をとり続けたのだった。

目指すは第一校舎と第二校舎を繋ぐ渡り廊下。確か第二校舎側の渡り廊下の扉は、壊れていて開きっぱなしな上、閉じれないハズなのだ。そこから第二校舎へ侵入する、予定。

其の九の十三

「着いたな…」

「うん」

さも当然と平然に返してくる律佳が相手では、今の状況を呑むことは出来ないなと耕輔は思っていた。二人は銃撃をかわし呆気なく第二校舎に侵入出来たのだった。それが何だか腑に落ちない。銃撃までしてきて、これ以上何も無いとは、気が抜けてしまおうと言つものだ。

それにさっきまでは怪物に殺されかけていたと言つのに、緊張感ゼロで。

それもこれも律佳のおかげでここまで来れたのだろうが、コイツときたら…。

「ねー、お腹すいたー」

「我慢しろよ…」

「えー。やーだーよー、何か食べなきゃ死んじゃう」

冗談とは言えそれすら絶対ないと今日確認出来た耕輔は、改めて、律佳の恐ろしさと呆れを感じていた。

「帰ったらラーメン三杯作ってやるから…」

「マジ!? ヤッター!!! さっさと終わらせよーぜ!!!」

途端に耕輔の前を、腕を回して歩き始める彼女。

ホント調子いいヤツ…。早くいつもの律佳に戻ってくれーって思ってたけど、戻ったら、コレだもんな…。

安堵したのか呆れただけなのか、耕輔はふかあいたため息をついた。

搜索を始め、すぐのことだった。第二校舎三階の窓辺に、見覚えある姿があった。

「智香…」

こちらに向き直り、どこか憂鬱な眼差しを、こちらに向けてくる。

いつの間にもやら窓の外は真っ赤になっていて、その赤が、彼女を一層鬱気に見せていた。

律佳はそんな智香を直視出来ないでいる。

「律佳ちゃん…耕輔くん…」

「智香…やつぱり…？」

「…すみません…」

やはり、全てを仕組んだのは智香だったようだ。あっさり謝ってしまうという事は、そうゆうことだ。

「全て、私が…」

しかし、やはりどこかに疑問が残る。

「…どうしてキミが…あんなにも律佳を慕っていたのに…」

「実は…」

智香は理由を語り始めた。勿論、律佳の殺人未遂、について。その時律佳は、わずかにブルルと震えた気がしたが、勘違いだろうか。

「…実は、律佳ちゃんは…引退なんです」

「引退だって…？」

引退…。その言葉に引つ掛かるような言葉はない。

「ええ。よく、分からないとは思いますが…律佳ちゃんは…。もう、ここには必要ないんです」

「何だって…？それは…どうゆう…」

すぐにピンと来た。つまり律佳は、この学校にもう必要がなく、他へ回されると言うことだろう。

「分かるんじゃないですか…？耕輔くんなら…もう、五ヶ月なんですよ…？」

彼女は頭がいい。だから、律佳の殺人計画は、完成に近かった。

ともすれば、耕輔の考えなど、軽く見透かしてしまうだろう。耕輔はかすかに呻き声を上げ、

「…わ、分かっている。分かっているけど、どうしてももういらないんだ？まだ怪物は出るんだろう？国に言や、それくらい取り消してもらえろぞ…？」

そんなことくらい智香にも分かっているだろうに。

「無駄ですよ。私の開発していた“対怪物情報色彩風薫”が完成したんですから。これからライドは用なしになるはずですよ…そして、平和に…」

耕輔は言い返せない。確かにそれは平和の一步だ。もうライドと言う人工生命体が必要ないと言っているのは…。

待てよ…？

「智香」

「はい」

「答えになってないぞ」

「え…？」

僅かに智香が困惑する。

「俺は、“どうしてキミが律佳を殺そうとしたか”を聞いている」
「……」

彼女は顔を伏せ、目を細めた。

「その…」

言いにくそうに、チラと律佳を見る彼女。

「…律佳ちゃんが壊れるのを、見たくなかったから…」

「壊れる…だって？」

「はい…」

隣の律佳を見る。ぶるぶると、寒くもないのに震えている。妙な汗もかいているようだ。

「律佳…？」

律佳はぎこちなく笑った。

「ん、ん？なあに、こうすけ…」

何かに怯えている…そんな律佳を見るのは初めてだが、見るからにそう感じた。

と言うことは、さっき震えたように見えたのは勘違いではなく、この話しを知っていたから…つまり律佳がお役御免だということを、律佳自身が知っていた…？

これについて、つじつまが合う律佳の不可解な行動が二点、耕輔の頭に浮かんだ。

一つは、他の学校に救助へ行きたくない、かたくなに拒んだこと。

二つは、やきそばをおごってくれたこと。

律佳はそんなに気の回る人間ではないし、それに嫌なものは嫌だとハッキリ言う。けれど、この二点は、なんとなく不自然に思えてならなかった。

しかし、今それを律佳に問い詰めてもただ可哀想なだけ・・・隠してまで、一緒にいてくれて、慕ってくれていると言うことなのだから。

「…で、智香、どうゆうことだ？それは」

「……。それは…耕輔クンと離れることを…律佳ちゃんが拒絶しているんです…」

「拒絶…？」

人間で言う、別れが惜しい、とかそういう次元か？なら…

「そういう体験も必要だと思うが…」

「違います。律佳ちゃんは、“別れ”と言う認識プログラムを組まれていないんです」

「……？」

プログラム…。ここで耕輔は、律佳を初めてライドだと感じた。いや、感じざるを得なかった。

「今の律佳ちゃんのプログラムには、確かに“別れ”と言う認識はあるんですが、その…五ヶ月もいたこの土地、学校、生活、そして…あなたとの別れと言うのは、膨大すぎて予測外だったんですよ」
よくわからないが、とにかくこういうことは初めてで、そして考えてなかったのだろうと理解した。

「…だからなのか？律佳を殺そうとしたのは…それが理由？」

「はい…」

その智香の理由に、耕輔は怒りを覚えた。なにせそれは、

「お前がそんなに、律佳のこと信じてなかったなんて…な」

彼女はハツとして、頭をブンブンと振った。彼女も意味するところが分かったようだ。つまり律佳の精神力は、それまでだ、と、彼女は考えていたと言うことになる。

「ち、違います！！律佳ちゃんが壊れると言うことは…！“死”よりも辛いんですよ！？」

それは確かにそうだ。人間でも、慣れ親しんだ人との別れは、時に死よりも辛い。だが、

「それは違う。コイツがどこまで頑張れるかで」

「違います！！律佳ちゃんはライドなんです！！人間じゃないんですよ！！！」

泣きにも近い智香の声で、びりびりと廊下が揺れた気がした。

そう、そうだった。この隣で震える少女は、所詮怪物を殺戮するための兵器　ライドだ。

其の九の十四

「ヤ…ヤだよ、こうすけ…私…」

自分をただの兵器として見られたくないのだろう、律佳は目を潤ませ、耕輔の目を覗き込んだ。

「律佳…」

耕輔もその意味を分かっていた。ここで彼が、彼女をライドとして…つまり兵器だと受け取ってしまうえば、智香の言うように、きつと“壊れ”てしまうのだろう。

今すぐ。ここで。智香、耕輔の目の前で。

「耕輔くん…どうか…律佳ちゃんを…」

認めてください、智香がそう言いたいのは分かる。嘘をついてでも、ここは彼女を兵器以外のものとして認めてあげるべきだ。それが人間の優しさでもある。

「律佳…お前は…」

お前は…そう、

「……ライドなんだよ」

およそ期待はずれだった。そんなことを言うはずがないと、智香は思っていた。

「こ、耕輔くん…？そんな…」

彼女は目を見開き、律佳はまるで心臓を一突きされたような表情になっている。

耕輔は律佳を見下し、冷たい表情のまま言った。

「お前は…怪物を殺すとき、無常の快感を覚えていたはずだ…」

そう知ったのは彼女と最初に会った五ヶ月前だ。

彼は彼女を、背の低い普通の少女だと思っていた。しかし彼女は、対怪物人型兵器、ライドだと言う。

そのときはとてもそう思えなかった。

が、それを思い知らされたのは、その当時恐れていた怪物を、その少女がニヤつきながら潰している様を見たときだ。

その顔は無邪気で、生命を奪っていることを感じず、子供がモノを壊しているのと変わらなかつた。

今もそうだ。怪物を殺すとき、無邪気に笑いながら…。

いつの間にか、律佳は腕にすがりついて頭を振っていた。

「こうすけ、こうすけ、私、カイツツ殺すとき、そんなこと思っていないよ…」

悲しい、と言うより、“助けて欲しい”。そんな顔だつた。

溺れているところを耕輔が通りかかり、必死に助けを求めているような。

「違う…。お前は、怪物を殺して、とてつもなく快感だつただろう…?」

彼女はそれでも頭を振り続ける。

それら見て智香が悲壮な顔をし、堪えきれずに叫んだ。

「こ、耕輔くん!! 律佳ちゃんを壊すつもりですか!? や、やめてください! 今律佳ちゃんを助けることが出来るのは…!!」

「壊れるんなら、一層早く壊れてくれよ…」

「なっ…!!」

まさかそんなに冷たい人間だなんて思わなかつた…。

智香は“耕輔”と言う人間を見誤っていたらしい。そう、自己中心的で、大事なモノが自分の思っているモノと違うと思えば、ポイと捨てるヤツだつたのだ。

「あああ…ああ…!! そんな…!!」

やはり律佳を眠らせてあげるべきだつた。もう少し作戦を完璧にしていれば…。

目の前で律佳がガクガクと震えている。耕輔に言われる暴言を必死に抵抗し、耐えている。

見てもらえない。

「やめてください!!」

律佳を耕輔から引き離し、彼女をぐっと抱く。

「あなたは悪魔ですか!!? いらぬモノなら、さっさと捨てるんですか!？」

耕輔は怪訝顔をして、

「何言ってるんだ?」

そう言った。

よくもそんな…!!

「こんなにも律佳ちゃんをあなたを慕っているのに…どうしてそれを…!!」

耕輔の表情は変わらない。意味が分からないといったふうに。

「無駄だ…」

「えっ…」

そう言ったのは耕輔ではなく、無線で“ダーハン”と呼ばれていた大男だった。

智香はとてつもなく焦った。これは計算外だったのだ。勿論、耕輔がそんな人間だったと言うことも

「…キヨウさん!? な、なにしてるんですか!! 隠れてないと…」

彼 キヨウと呼ばれた男はフツと笑って、視線を耕輔に向けた。

「伊井森 耕輔。気持ちは分からなくもないが、諦めろ」

耕輔は突然現れた大男にフルネームで呼ばれ、焦ったが、その的確で根拠のない言葉に驚き、冷静になった。

「諦めろって…どうして」

「お前が言った通り、律佳はライドだ。それで全て説明がつく」

「あ、あなたたちは何を言って…!!」

智香は律佳を抱いたまま、二人の顔を交互に見て、より悲壮な顔をした。どれもこれも計算外で、しかも言っている意味が分からない。

「まだまだ…まだ、分かんないだろ…!!」

突然張り上げた耕輔の声に、智香はビクリと肩を震わせた。そこまで声は大きかったし、怒りが表面に現れていたのだ。

ダーハン キョウと呼ばれた大男は、表情を変えずに、「分かる。彼女はもうすぐ“壊れる”からな」

智香はハツとして、抱きかかえている律佳を見た。すでに律佳の目は見開かれて、分析エラーの字を羅列させていた。体も痙攣して、ガクガクと定期的に震えているだけだった。

「律佳ちゃん…ん…？」

返事はない。

其の九の十五

「律佳ちゃん！律佳ちゃん！！」

どんなに呼んでも、どんなに揺らしても、律佳は全く反応しない。
「……………」

何故だか耕輔も、真剣な眼差しで律佳を見ている。

律佳ちゃんを、壊したくせに…………。

その智香の奥、三階の昇降口の近くで、キヨウが言う。

「伊井森 耕輔。お前は律佳を壊した。お陰で手間が省けた」

「ああ……………」

耕輔がうつむき、小さく呟いた。

智香の予想はより一層確実となった。やはり耕輔は、普通の人間以下、いや、最悪の人間だということだ。

「やっぱり…………あなたは…………！！」

耕輔は答えない。

ダンツ。

突然大きな音が廊下に響いた。とても大きな、乾いた音…………。見ると、キヨウが拳銃を律佳に向けていた。ということは。

「り…………つかちゃん…………」

あまりにも唐突で、さらにキヨウが壊れた律佳を撃つとはさすがに思わなかった。

確かに律佳の背からは、多量の血が噴出していた。夕陽の光と相成って、赤かった。とても。

「いや…………こんなの…………いやっ…………！！」

冷静な智香でさえ気が狂いそうになった。いや、狂ってしまった。何も考えられない。頭が真っ白だ。律佳の笑顔でさえ、思い出せなかった。

キヨウがその唐突且つ異常な行動の理由を答える。

「保険だ。また暴走されては・・・」

言い淀んだが、

「困るからな」

と何とか言葉を押し出したようだった。

「律佳・・・。・・・律佳!!」

思い出したように、耕輔が智香に走った。正確には律佳のところへ。しかしそれを彼女が許容するはずがない。

「来ないでっ！人殺し!!悪魔!!最低人間ッ!!」

律佳を前に抱きかかえながら、後ずさりする智香。さすがに耕輔の足も止まる。かつてここまで感情的になった智香を見たことがなかったのだ。

「あ・・・アンタが・・・律佳ちゃんを殺したのよっ!!律佳ちゃんに触れてもらいたくもない・・・!!」

およそいつもの智香とは違った。人間で言う、怒りだろう。が、実は智香にはそんなプログラムは存在しない。智香自身もそれを知っている。なのに、何故だか体が熱くて、頭が真っ白で、耕輔と言う人間を頭の中で八つ裂きにしている。何度も何度も。

「智香さん、違うんだ!!キミは誤解を」

「馬鹿言わないで!?!そうやってまた騙そうとしてるんでしょ!?!そうやってまた律佳ちゃんを傷つける気なんでしょ!?!」

「違う!違うんだ・・・」

激しくうなだれる耕輔を見限ると、次に彼女は、キョウウを見た。

「どうして撃つたんですか!?!もう律佳ちゃんは・・・!!」

「言っただろう?保険だ」

ギリリと智香が歯切りしする。

「保険って・・・!そんな・・・!!」

「でなければ、お前も、その耕輔とか言う人間も死んでいただろうな」

「構いません!!!私は・・・!!」

言っただと同時に、チャツと拳銃の構えられる音。銃口は智香の頭

へ向いている。

「一緒に死にたいのなら殺してもいい」

「……!!」

それでも構わない。彼女はそう思ったが、

「待ってくれ!! 死人をこれ以上増やさないでくれ!」

耕輔が智香の前に立ち、大の字になり、壁になったのだ。

智香はそれを理解出来ず、呆けたが、すぐに思考を取り戻した。

「なにやってるんですか……! また正義ヅラですか!？」

「違うんだ……智香ちゃん……」

「なにが!!」

声が響き、一瞬の沈黙。

確かにそれは一瞬だったが、十秒程度、経った気がした。

「智香さん……今怒ってるだろ?」

なにを今更聞いているのだ。

「当たり前です!!」

「なら、もう分かるだろ?」

今の智香に思考力はない。

「なにがですか!!」

耕輔は今だ大の字のまま、キョウの銃口を向けられている。だが

淡々と智香に答えた。

「智香さん……キミには、怒りのプログラム、ないんだって?」

「え……」

「律佳に聞いたことあるんだ。どうして智香ちゃんは怒らないんだ

? ってね。そしたら言ってたよ、ちいちゃんには、そんなプログラ

ムないんだよって」

少し耕輔の顔が笑った。多分律佳の愉快的な言い方に、ぎこちない

違和感を感じたせいだろう。

智香の頭にもその愉快的な、律佳の笑顔が見えた気がした。そのおかげで冷静にもなれた。そして、思考が戻ってくる、冷静な思考力が。

怒りが消えた智香には、なんとなく耕輔の言い分が理解出来たよ
うな気がした。だが何かが足りない。実体が見えてこない。

「賭けようと思ったんだ。律佳に」

「賭ける・・・？」

一体、なにを。

「ああ・・・そのプログラムとやらを乗り越えられるかどうか・・・
な」

「あ・・・!!」

智香に閃きが遮った。

そういうことだったのか。何故、気付かなかったのだろう。耕輔
は、律佳を壊そうとしてたんじゃない。壁となって、律佳を試して
いたのだ。それこそ律佳には辛かっただろうが、耕輔も同じだけ辛
かったはずだ。

プログラムと言うライドの壁を越えて、律佳には人間になってほ
しかった。きつと耕輔はそう思っていたのだ。その壁を越えられな
いのなら、そう、確かに律佳は兵器なのだ、ライドなのだ。

「結果は見ての通りだがな」

見透かしたようにキヨウが言ってくる。それでも耕輔は頭を振り、
「まだ、終わってない・・・！律佳はそんなに弱くない！！」

そう言う耕輔に対し、キヨウは微笑も怒りも浮かべず、

「馬鹿も休み休み言え。律佳は死んだ」

「死なないさ。律佳は・・・」

本当はどうか分からない。キヨウの言うとおり、律佳は壊れて、
拳句死んでいるかもしれない。けど、それでも、意地・・・いや、
意思だけは曲げられない。

耕輔は振り向かず、智香に聞いた。

「智香さん、律佳は・・・!?」

律佳の体はとても冷たくなっていた。生きている証だったあの痙
攣でさえ止まっている。目もうつろに開いたまま。

智香は熱いものがこみ上げてくるのを抑えながら、

「律佳ちゃんは、生きてますよ……」

か細い声だったが、しっかりと言い切った。そういえばライドには、涙と言うプログラムは、ない。

耕輔は得意げに、だが冷や汗をかきながら、微笑を浮かべた。

「キョウ、殺し損ねたな」

「ちっ……」

そこで、ピリリリ、と、携帯の呼び出し音らしきものが鳴った。

キョウは慌てもせず、やはり銃口をそのままにし、手のひら程度の無線機を取り出した。通信をONにして、耳に当てる。

「こちらダーハン1。どうした」

言つと、少年の声がした。だが何だか子供の声やら奥さんの声やらが、無線越しに聞こえる。

「待って、ちよつと電話……こちらダーハン2、作戦は終了しましたか」

言っている少年の横で、と無線越しに、誰かが、さくせんてなあーに、と言う女の子の声がした。だが気にせず、キョウは淡々と答えた。

「まだだ。が、すぐ終了する」

「そうですか。では……」

「待て」

「なんでしよう」

「この作戦とは関係なさそうなのだが。隣に誰かいるのか」

「あ……いえ」

少年が言葉に詰まっていると、やはり先ほどの少女の声がした。

「んー？私？私は、あげさと りんって言って」

ザザザツとノイズが入り、いつも非常に冷淡な少年とは思えない、感情タップリに入った、少年の声がした。

「あ、ちよ、だめだよ、りんさん。人の電話中は邪魔しちゃダメなんだ」

「あ、ごめんなさい……。今度から注意するねっ。“雄谷”くん」

しょんぼりしたような、それでいて何だか楽しそうに少女は答えた。雄谷と呼ばれたダーハン2、つまり少年は、うんうんと頷いたようで、それが無線越しに聞こえる。

「わかったみたいだね。りんさんは通常の間より賢いみたい。・
・あ、シツレイしました。この子は、別に関係ありませんから」

その折、違うもん、友達だもん、とか言う少女の声が聞こえる。呆れもせず、黙々とキヨウは推察し、答えた。

「・・・忙しいので、では」

ピツと通信をOFFにする。そして耕輔に向き直り、

「・・・作戦時間を大幅にオーバーしてしまったようだ。・・・伊井森 耕輔。お前はまだデータ不足だ。殺すに惜しい。今日の所は生かしておく」

彼は拳銃を下ろし、ホルスターに戻した。

「ふう・・・」

途端力が抜ける耕輔。思い切りため息を吐いてしまった。

「律佳ちゃん・・・」

智香は囁くように、うつろに窓の夕陽を見つめている律佳を呼んだ。すると。

「システム停止。過去のログを検索中・・・」

「え・・・」

口を開閉せずに、機械的な声を出す律佳に、彼女は目を見開いた。「該当アリ。記憶を再生します」

律佳は目を“自分”で閉じ、そして開いた。しかしその眼は、律佳ではなかった。

それでも智香には、その眼に覚えがあった。

今でも思い出せる、とても懐かしく優しい思い出共に・・・・・・最大のあやまちの記憶を。

其の九の十六

「智香……さん……？」

「は、はい……」

その柔らかくて暖かい、そして懐かしいこの声音……。およそ律佳ではなかったが、これが本当の“律佳”だった。そう、生前の……智香が壊してしまった律佳である。

彼女は智香に抱かれながらも、天井やら廊下やら教室を見回して、不思議そうに尋ねた。

「……私……どうしてこんなところに……？」

「それは……色々あったんです……」

申し訳なさそうに、智香は律佳に言った。答えになってもいないのだが、今はそう言うしかなかった。

「そう……ですか……」

それでも律佳はにっこり微笑むと、智香の手から離れた。

しかし彼女は負傷の身。途端咳き込み、しゃがみこんでしまった。

「り、律佳さん……！」

智香はそこへ走り寄って、だが律佳はそれを手で制止した。

「で、でも……」

智香は困惑しながらも、律佳の様子をうかがった。どうやら吐血したらしい。口元に当てた手が赤く濡れている。

「だいじょうぶ……ですから……一人で……」

律佳はぐぐつと膝を持って、健気にも立った。足元はフラフラだったが、倒れはしないだろう。耕輔はそれらに気付き、律佳に振り返った。

「り、律佳……！！！」

見るなり彼は、彼女に走り寄って、

「良かった……！！生きてたんだな……！」

と言いながら彼女に抱きついた。普通相手が律佳とは言え、彼は

抱きつくなんて非常識なことはいらない。よほど嬉しかったと言つて
とだ。

だが律佳はキョトンとした顔で、耕輔を見るばかりであった。そ
れはそうだ、今の律佳の記憶に、“耕輔”はないのだから。

「あ、あの・・・あなたは・・・」

「おいおい！！律佳らしくねーな！もつとシャキツとしろよ！！」

「いや、あの・・・」

困惑する律佳を見て、智香は心を落ち着かせていた。逆に心臓が
どくどくと動いているようでもあったが、律佳が死んだ事実を受け
止めるよりは、幾倍もマシであったのだ。

その様子に、キョウも気付いたらしく、背を向けていた体を翻し
た。

瞬間、律佳とキョウの眼があつた。

「き、きみは・・・！！」

キョウは感情むき出しに律佳を見た。あの悲しそうな眼 間違
えようがなかったのだ。

「“鏡”さん・・・」

律佳も、耕輔に抱かれながらだが、キョウ 鏡の眼を見つめた。
その昔愛した いや、今の律佳は、現在進行形で鏡を愛している。
全てを知らない律佳だから。

「律佳、なのか・・・？」

言いながら、律佳に近づいていく鏡。

「・・・？律佳？」

とても先ほどまでの鏡とは思えぬ声と態度に、耕輔は疑問を感じ
ていた。

「すみません・・・あの・・・離して頂けますか・・・？」

そつと手を耕輔の胸に這わせ、律佳は小首を傾げて微笑んだ。耕
輔は動揺し、

「あ、ああ・・・」

と、お願いされなくても、律佳の体を離してしまっていた。

「鏡……さん……」

うつとりとした眼で、彼女は鏡に、そろりそろりと近付いて行った。

「律佳……」

惹かれたように鏡も律佳へと歩み寄っていく。やがて抱き合い、律佳は大粒の涙を流していた。鏡も泣きたかったであろうが、彼はそんなに貧弱な男ではない。彼女を抱擁出来る大きな器をもっているのだ。

「ああ、鏡さん……何だか、とても懐かしい……」

「俺もだ、律佳……」

「けど……何だかとても苦しい……あなたを思い出そうとすると、胸がぎゅうと締まるんです……私は何か……とんでもないことを……したような……」

瞳が揺れ始め、歓喜の涙はやがて悲しみの涙となる。鏡も何も言えないらしい。それはそうだろう、最愛の恋人に嘘をつくわけにもいかないし、まして真実を伝えることさえ出来ない。

「思い出さなくていいんだ……。今を生きれば……」

そんな二人を眺めながら、智香が眼を潤ませていた。

やつと、やつと会えたんですね……。良かった……。

だがさきほどの律佳の言葉がよみがえる。関係はないと思うのだが……。

確か、記憶を再生などと言っていた。

「まさか……でも……?」

ライドの構造上、記憶は絶対消えないよう、ブラックボックスと言うものがあり、それは何をどうしても消えないようになっていて、もしそれが再生しているだけだったら。

もし、そろそろ記憶が消え、智香が壊した律佳が再生されたら。

まずい。学校のみんなだけではない。街一つ、いや、二つはなくなる。

「鏡さん!!! 離れて!!!」

「え？」

その時には、律佳の両目は赤く、キラリと光を放っていた。

其の九の十七

肉が裂ける音と、液体が滴る音がした。

「イヤーツ!!!」

智香は膝を曲げてガクと前に折れ、頭を押さえ込みガクガクと震えた。

彼女の考えは、不幸ながら正当だったのだ。律佳は記憶を再生しているだけに過ぎなかった。つまり今、律佳の第三人格が目覚めってしまったことになり・・・それは、鏡を殺し、他ライドの“雄谷”を殺し、産みの親を殺し、施設を破壊した、律佳だった。

「ぐ・・・」

律佳に素手で腹を貫かれた鏡。まさか警戒などしていなかった。

その暴走した律佳は、腕を彼の腹から引き抜き、ニヤリ笑っていた。彼はそのまま重力に任せ、膝からくず折れ、横倒れになる。

「よお・・・久しいじゃねえか・・・鏡に、智香・・・」

ギラギラと光る目は、やはりどの律佳にもあてはまらず、凶悪な赤だった。性格もさながら凶悪である。

「お、お前は・・・」

ことを眺めていた耕輔が呟く。律佳は振り返り、彼を睨みつけた。

「ハッ・・・。アンタが俺のご主人様かい・・・。また貧弱そうな人間だな・・・」

「な、なんだと・・・!!」

聞いていた智香が頭を振る。

「ダメです耕輔くん!!!挑発に乗ってはいけません!!!」

「分かってるよ・・・」

言うものの、耕輔は汗だくだった。考える脳はない。力もないのだ、どうしようもない。

「さあ、どうしようか・・・この街ふつとばすか・・・?」

ニヤニヤ笑いながら、血だらけの手をコキコキ言わせる律佳。

これもまた智香の予想範囲内であったが、抑制する手立てはない。
「い、いけません……！！あ、あなたは……私が止めます……
！！！」

智香の五ヶ月前の、最初で最後の大きな過ち。間違い。今それが
目の前にいる。

鏡が横倒れたまま言う。

「どうゆうことだ……これは……！！！」

「すいません……鏡さん……実は……」

さきほど言い換えてしまったことだが、今度こそ言わねばなるま
い。真実を。

……よし……。

「実は……律佳ちゃんを壊したのは……
のは……！」

「私……なんです……！」

「なん……だと……。ならお前は……お前が……！！！」

「そうです……私が……黒幕です……！！！」

言えた。何もかもが手遅れだけれど。やっと真実を話せた。

ずっと詰まっていた何かが、どどつと音を立てて流れていく気分
だ。もう、後悔も未練もない。

「よお、お話しはすんだかよ……？……プッ、クッ……クク
ク……ハッハッハッハッハ……！！！」

どうしようもない、律佳はそう思っているのだろう。確かにどう
しようもない。だが、どうにかする方法くらい、ある。

「ねえ、耕輔くん……」

いつになく真剣に話しかけてくる智香。それもそうかもしれないな
い、これから死ぬかもしれないのだから。

「何だ……？智香」

「……時間がありません、説明はナシです」

「え……あ、ああ……」

智香のことだ、何か作戦があるのだろうか。

「私の頭を、重いきり殴ってください」

……。

「な、なに言ってたんだ!？」

「いいから!!説明はナシって言いませんでしたか!？」

眼前には血走った律佳。そして腹に穴を開けられ倒れている鏡。

真剣に叫んでくる智香。

俺は……

どうやら、選択肢は一つしかないらしい。

其の九の十八

今だ人を馬鹿にしたような赤い眼はこちらを睨みつけていたが、どうやら襲ってくる気は無いようで、その気配すらない。

猶予を与えるだけ与えて、とことん俺たちをいたぶる気なのだろう。

「智香さん・・・わかった、けど・・・」

頭を殴ってくれなどと言われ、分かりましたと一つ返事が出来るハズない。けれど、それに賭けることしか出来ないのも事実。

一応確認だけとっておこう。それに見込みはあるのか。そう思った。

どうやら律佳、いや、律佳じゃない、あの赤い眼のやつは、死ぬまでの時間は与えてくれそうだから、確認の時間くらい費やしていだろう・・・。もしダメでも、死ぬくらいなら、この程度のがあきは・・・。

「それに見込みはあるんですか・・・？勝算は？」

智香は耕輔の視線から青い眼を横にずらして、悲しそうに言う。

「残念ですが・・・確実性もなければ、意味も成さないかもしれませんが・・・」

ダメもと、と言うのは、彼にも分かっていたが、やはりそれはシヨックだった。賭ける気なのだから落胆は当然だろう。大体こうゆうとき、奇跡は必然に変わるハズだし。

だが殴っても、内容がわからないと来た。それに頭を殴ってどうなるというのだ。

いやそれは、最初から分かりきっていたこと。

「ですが」

耕輔の思考は遮られても続いていたが、智香の答えも続きがあった。

「うまくすれば・・・今の律佳ちゃんは止められます・・・」

「冗談で言っているとは思えないその表情に、耕輔は望みを託すことにした。否、最初からそうするしかなかったのだ。

彼は近くにあった、廊下の壁に沿って置かれた消火器を持ち出すと、崩れて座っている智香の後ろに立った。

「いきますよ・・・？智香さん！」

これにどのような意味があるかと、どうせ死ぬのだ。やるしかない。

「・・・はいっ！」

耕輔は、ぐおと消火器を頭上までめいっぱい持ち上げると、思い切り智香の後頭部へとそれを落とした。

「つうああああっ！！！」

ガランガランと落ちる消火器の横で、智香が痛みで頭をおさえた。青い髪に少し赤が滲んでいる。彼は当然智香を心配して、

「ち、智香さん!？」

「あっ・・・ああっ・・・コウスケク・・・もういつかい・・・」
しゃがみこんで様子を聞く前に、智香が制止し、そう指示した。

「で、でも・・・」

「いいからあ・・・」

ガクガクと震える智香は心配であつたが、ここは、やはり賭けてみるしかないと思い・・・耕輔はまたその重苦しい消火器を持った。

その様子を、律佳がニヤと口の端をもちあげ、嘲笑した。

「バカじゃねーっ!?!なに死のうとしてんの!仲間割れ?ダッセー

!ああつたくつまんね、とつとと壊れちまいなあー・・・プクツ・・・

・!!!ハハハハハッ!!!」

どうやら彼女には、仲間割れと誤解されたいらしい。そう理解されてもおかしいところがないのだが、そう思うと、即刻この行動を中止した方がいいんじゃないかと思えてくる。

「はやくう・・・うう・・・っ!」

頭をおさえていた手をどかし、智香がまたそう指示してくる。耕輔は、もう自分がどうしていいか、実質分からなくなっていた。し

其の九の十九

この無虚空なときと叫びたら、どんなに長かったろう。

「そんな・・・」

大笑いする律佳の声が無意味な音となって聞こえるほど、耕輔は動揺していた。

殺す気なんてなかったなんて、月並みの言葉だ。恐ろしくこの行動には意味がなかったのだと理解した。智香はライドだし、冷静だし、頭も切れる。

だからなんなのだろう、信じたと言っても内容は不明、生きるために殺したのだ。しかし・・・結果はこれだ。

耕輔は、寒い寒い海上で一つの氷に乗っているように感じていた。寒いし、怖い。・・・これが悪寒か。

まさに気が荒れ、律佳に無駄な突撃をかけようとした、直前だった。

「や・・・やっぱり・・・こういうこと・・・だったみたいですね・・・」

グイグイと音をたてながら、彼女、智香は機械的に立ち上がった。頭から流れる血は止まっているようだ。

「智香さん!!」

死んでいなくても、耕輔が狂うには十分な要素が揃い過ぎていた。智香はそれを涼しい顔で見、あっさりと律佳に向き直った。

「耕輔くん、心配しなくてもいいですよ。ただあんまり壊れないで彼女を仕留めますから」

律佳はそれをあざ笑うかのように、

「おー、おはようっ！ヒヒッ・・・！やっぱりアレだなあー、そうカントンには壊れねえわなー、アハハ!!」

挑発的な目で智香を睨みつけて、わざとらしく手をなあなああとプラプラさせている。

「そうですね……。そう簡単には壊れないみたい。あなたは別だけど」

頭の中は今だゴチャゴチャの耕輔でも、その瞬間突然笑い声が消え、静かな廊下の冷たさを感じ取ったときには、その感情は静けさを通り越して、いぐるしさと寒さを感じていた。

律佳は初めて真剣な表情で、智香を睨みつけていた。オーラがあるなら、黒い炎が背に立ち昇っていることだろう。

「俺はべつう……。？ハツ、揺さぶろうたって」

「違います。あなた、撃たれてるじゃない。背中」

そうだった。律佳は鏡に、一発見舞われている。

「コレくらいいたいたこたあなんだよ……。それより」

「なんですか？」

「殺せる気かよ？お前だつて頭やられてイかれてんじゃねーか」

無駄に笑いもせず彼女は言った。それも、そうである、智香は耕輔によつて後頭部を二回ほど殴られた。それも物凄い力で。だが智香の様子を見ていると、立ち上がったときはまるで違い、どこにも異常をきたしていない。

「言ったハズです。あなたは別と。私もまた別」

何も分からない耕輔には、その言葉の意味を辿ることさえ出来なかった。つまり意味不明、何の話なのかさっぱり見当がつかないのだ。

「智香さん……。えつと……。？」

何だか情けないが、ともかく意味が分からないのでは話しにならない。それに、殴ったことに意味はあったのか、知りたい。

「ええ、実は……。私たちがライドは、どうやら死ぬと強くなるみたいですね……」

耕輔は驚きを表情にそのまま表した。彼女は理解したようので、

「はい、一度死にました。いえ、ちゃんと意味はあるですよ」

「んああ」

意外なところに赤い目の律佳が面倒くさそうに会話に割り込んで

きた。

「そいつの言うことは本当だよ。死んだら俺たちや強くなれんだ・
・そうな、ヤベーときを思っつて、そういう意味分からんコトにしと
いたんだろーよ」

「・・・ええ、つまり」

智香によると、緊急蘇生というものが律佳と智香にだけ特別採用
され、そのおかげで死なずに済んだらしい。しかもだ、死ぬと同時
に、一時的にそのライドは、つまり律佳と智香は、驚異的戦闘能力
を有すると言う。この機能の意味は言わずも、死んだのだから、既
存の力では太刀打ち出来ない敵と戦っていることになり、復活して
再度死なぬよう、そのように一時的強化をもたらされたのだという。
聞いて、頭に閃くものが彼にあった。

そうだ、律佳は第一校舎で一回死んで・・・！！

あの時の謎の復活に、これで合点がいった。あの時の、怪物に追
われていたときのことだ。

「どうかなさいましたか・・・？」

「いや・・・つて智香・・・さん？」

声が冷静にも関わらず、智香のその額は、ビッシリと汗をかいて
いた。

「・・・なんでもありません。ただ・・・」

「ただ・・・？」

「決着・・・つけるんだろ？」

キュツと上靴の裏のゴムを唸らせこれから始まるであろう戦闘に、
律佳はニヤリ笑って構えた。

それを見た耕輔は、智香の心が放つ体の異常が理解出来た。智香
が汗をいまだ滝のようにかき眩く。

「彼女は戦闘型ライド・・・負傷の身とは言え・・・勝てるかどうか・・・」

其の九の二十

眉の端をあげて、律佳が言った。

「おやあ？お前死ぬ気？構えないでどうやって闘うってんだ？」

確かに智香は構えていない。このまま殴られてもしたら必中だ。

しかし律佳と智香のとの距離は5mあり、だとすると、通常殴りかかるには、どんなに早くても1秒は要する、が、律佳は遙か、その上を行くスピードを出せる。つまり、律佳は智香を侮っている。

「あなたは私の戦闘スタイルを知らないでしょ？」

言った後智香は首を少し耕輔の方に傾けた。小さい声で何か言ってくる。

「耕輔クン。ここは戦場と化します。どうか、お逃げ下さい」

耕輔は無言で頷くと、一步、二歩と後ろに下がった後、背を向け走り出した。

「ハンツ！なるほどね！！決着つけるにや人間はジャマだっって言いたかったのかよ！！！」

背のほうで激しい爆発音、いや、壁が何かの衝撃を受けて崩壊した。

「くっ……」

何も出来ない自分が憎かったが、邪魔になるよりマシだった。大体、無駄な命を散らすことを、智香は望んじやないだろう。

緊急避難のため校内からグラウンドに避難した全生徒は、校舎にデカデカと設置されているその赤い光が消える瞬間を眺めながら、疲労のため、座り込んでいた。まだ立っている生徒がぼつぼつといるが、緊急避難から約五時間が経過しているのだ、疲れてくるのも無理はない。

「おせーな……耕輔のヤツ……」

今まで緊急避難が長引いたことはあったが、ここまでの時間を費

やすことはなかった。それに爆発音が耐えない。いや、正確に言うなら、壁が破壊されていく音だろうか。銃声も聞こえたあたり、かなりマズい事になっているという事は明らかだった。

「問題ないですよ。もうすぐ終わりますから」

「ねえゆやくん、ここどこお？お兄ちゃんの学校・・・？」

隣に小学四年生くらいの少年と、少女がいた。雪也はそれを呆けて見た後、

「っってお前らダレ!!??」

雪也は雪也らしからぬ動きで退いた。突然、小学四年生くらいの、機械的な声を出した白髪で真面目そうな少年と、それに相対した、少年と同じくらいの少女がいることに。

「そんなことはどうでもいいのです。とにかく答えは明らか、もう、終わります」

「は、はあ・・・」

いくら察しが良くても頭が良くても顔がいいからといっても、雪也はその表情のない少年が変に思えて仕方なかった。と言うか、突然現れて謎の助言、これは明らかに変だ。

そこに先ほどの相対的な少女が、雪也の前に立ち、彼の顔を見上げる。

「あ、この人がおにいちゃん？あ、あの、私はあげさと りんって
言いま」

「あ、いや、違うよりんさん、おにいちゃんはね、こんな変な人じゃないよ」

「いや、お前が変だ。と言うのは雪也の心の声である。」

「あ、そうなんだ、ごめんなさい、人違いです」

逆に何故か、雪也が人を間違えたような会話である。

「さ、もうここには用はない、行こう？りんさん」

「うんっ」

彼女、りんと呼ばれた子の手を引いて、白髪の少年は校門へと向かって歩いて行った。小学生が小学生に“さん”づけとは妙だなと

思いながら、先ほど言ったことは子供のイタズラか何かだろうと思
い、二人を見送ることにしたのだった。

と、周りが急にザワザワとざわめいた。自然と雪也が振り返ると、
そこには、

「雪也ーっ！」

と言いながら、制服が埃まみれのボロボロで、息を切らして走っ
てくる耕輔がいた。

「こ、耕輔！！どうした！？お前、何でここに　！！」

耕輔は雪也の前で止まると、せえせえと肩で息をして、手を膝で
支えた。

「実は・・・大変なんだよ！ヤベーんだ！」

雪也は突然の耕輔登場に混乱していたが、このままでは時間だけ
が無駄に過ぎていくだけだと悟り、何とか気を落ち着かせた。耕輔
ともに雪也までが混乱すると、話は迷宮入りする可能性があるから
だ。

「・・・まずは落ち着け。何があった？シツカリ言いたいことだけ
伝えてくれ」

耕輔も最初目が泳いでいたが、深呼吸するよう言われ、それを二、
三回繰り返したあと、気持ち落ち着いたようだった。

「あ、ああ・・・実は・・・律佳と智香さんが・・・だな・・・」
智香、と言う言葉を出しただけで、雪也の顔色と目の色が変わっ
ていく。酷だろうが、事実なのだから仕方がない。

「・・・ハッキリ言おう、どっちか死ぬぜ・・・ほっといたら・・・」

耕輔の一言は雪也を貫くには十分だった。聞いていた周りの生徒
も啞然としている。

「そ・・・それ・・・」

「まさか。そんなハズ・・・」

発狂しかけた雪也の隣に、先ほどの白髪の少年が立っていた。と
なりには、まだりんもいる。だが少年の顔と言えば、表面上冷静に

見えるが、その眼は激しく動揺していた。

「ゆうやくん・・・？」

「ごめんねりんさん。僕のおにちゃん壊れちゃったみたいだ。行かなきゃ。待ってて」

「あ・・・」

握っていた少女の手を自ら振り払って、冷静を装いながらも焦った顔つきで、白髪の少年は校舎へと走って行った。取り残された少女は、何だか今にも泣きそうだったが、グツと堪えているようで、涙が一筋、頬をつたっただけだった。

「りんちゃんって言ったっけ・・・大丈夫だよ」

相手が小学生とは言え、こんなにも急なことをする雪也は珍しかった。

きつと雪也は、分かるのだろう、彼女の何か思いつめた気持ちが。雪也が優しくりんを抱いてやると、その少女は突然わんわん泣き始めた。安心したのか、それとも逆に不安なのか、それは本人にしか分からないが。

これは耕輔の推測だが、きつとこの少女は、あの白髪の少年だけが友達なのだろう。初めての友達だったに違いない。

そういえば雪也、俺たちもそうだったけ？

其の九の二十一

雪也が少女を抱く様子を見届け、先ほど彼が発狂しそうになったことを耕輔は思い出し、口に出した。

「雪也、その子のおかげでお前、冷静になれたみたいだな」

雪也はしゃがみこんだまま、少女を抱いたままで、耕輔を見上げた。耳からは、まだ壁が落ち行く衝撃の音が聞こえている。

「・・・ああ、申し訳ながら、人間は自分より劣った人間がいると、冷静になれるんだ・・・」

それは雪也も例外じゃなかったってことか。そう、確かにそうだと耕輔は思った。逆に目上の者がいる場では、人は冷静さを欠く。

「情けないな・・・目下には鼻が高くていられるのに・・・」

雪也は少女の頭を撫でながら、空を眺めた。今日はいいいお天気なのに、心は一向に晴れてくれない。

そんな・・・そんな、あり得ない・・・あり得ない。

猛然と校舎を駆け、第一校舎の様子を外から一瞬眺めただけで情報分析を完了した少年はまた駆け出した。

雄谷。通信名称、“ダーハン2”。彼は人間ではない。

そう、ライドである。

彼は情報分析を主とし、攻撃性のない小型ライド、小型、つまり年端いかなない少年型である。それが彼、観道みどう 雄谷ゆつやだ。

今彼は、あり得ない異常を脳裏に抱えて走っていた。そのあり得ない異常と言うのは、“ダーハン1”の作戦失敗、だ。彼の情報分析は完璧で、いや、完璧なはずだった。ダーハン1は智香の戦闘能力には遥か勝っているし、律佳がもし第一校舎から生命維持し、第二校舎へ移ったとしても、“ダーハン1”は律佳に対し抜きかかったはず。なのに何故通信が遮断され、律佳と智香が争っているのだ。

それは彼の眼にも、至極確実な情報だった。あの第二ターゲット、コウスケの情報は正しい。遠目に第二校舎を分析した事態がこの結果だったのだ。

どうしてそんなことが起きた。どうしてこんなことが起きた。

第二校舎に入り、階段を駆け上る。衝撃の音、破壊の音が絶え間ない。

第二校舎三階到着。

「・・・あり得ない・・・」

その場での感想一言。

その場所は、ダーハン1の生命反応が示された位置だった。確かにダーハン1はいた。虫の息でもいい。死んでいなければそれで。

しかしあの二人は何だ。

「くぁ・・・う・・・まだ・・・私はぁ・・・ッ！」

赤く血走ったような目つきの第一ターゲット、律佳が、黒幕であろうと推測していた智香の首根を片手で掴み上げ、壁に沿わせているではないか。しかもその壁には大穴。智香は真横からの角度で見ても、ぎりぎり見えるか見えないかの壁に押し込まれていた。

「よおく抵抗したよ、おめーは。俺の左肩ぁ、もう使いもんにならねー」

よく見てみると、律佳の左腕は、なかった。遠くの方に棒のようなものが見えるが、あれが片腕だろう。律佳の左腕の付け根からは配線やらチップやら接続されていたであろう鉄が飛び出し、青い火花を散らせていた。

「あなたを止めるまではまだ」

智香が何かを言いかけた、しかし瞬間、轟音とともに壁がバラバラと崩れ落ち、また大穴が広がった。普通の人間ならば何が起きたのか分からないだろうが、情報収集ライドの雄谷は別だ。

今のは、律佳が智香を一瞬手前に引いたかと思うと、とてつもない力でまた奥に押し付け、大穴を広くした。その時の轟音こそ、何度も何度も、先ほどから聞こえていた衝撃音だったことも雄谷は理

解した。

「そろそろ限界だろーがよ・・・壊れるぜえ・・・ククク・・・」
しかし未だに状況が理解できない雄谷は、律佳が変化した起因を探るべく、壁際に隠れ分析を開始。

「が、出来なかった。エラーだ。理由は不明だが、とにかくエラーだ。」

「何故」

独り言のように呟いた口の動きがおかしい。何故だか手も震えている。

「どうして。怖いのか。何が怖いんだ・・・なにが」

自分でも分からない情報がダラダラと脳裏に入ってくる。

血の音、叫び声、破壊音。そして赤い眼。そこで情報はプツンと消える。

「なんだこれは」

理解できなかった。だがなんとなく、心臓のどこかがぼやあと暖かくなり、共に凍りつくような悪寒が走る。

干渉に浸っている場合ではない。しかし考えてみると、何故自分がここに来たのか分からなかった。ここに来て自分には力がないし、武器もろくに扱えない。戦闘能力も人間以下。一体、何のためにいるのだろう。

「やっぱり、ダメみたいですよ・・・耕輔くん・・・。」

頭が暑くてどくどくして、ぼやあつとしてきた頃、智香は小さく呟いた。

「何度となくコンクリートの壁に打ち付けられ、もう体力も精神力もない。闘える気がしない。逆転のチャンスもないだろう。」

「どうしたあ？降参かあ？」

「・・・。」

「ああもう喋れねえか。ハハハ。ザマあねえなあ。人間助けるためにおめーも馬鹿なことしたもんだよなあ」

「・・・耕輔クンを悪く言わないで」

「ああん？」

最後のあがきに等しい台詞だった。

「耕輔クンは・・・ただの人間じゃないですよ・・・」

律佳の片眉が斜めになっっていく。

「確かに彼は、身体能力も、頭脳も優秀ではない。けれど、心には広さがあつた」

「テメー、何が言いたい」

律佳の声音に怒気が宿り始めていた。

「心ですよ・・・あなたの心は小さい、だって・・・怒ってるのでしょう？憎いのでしょうか？私が・・・」

急に律佳の右手が首に食い込んできた。

「うるせえな・・・勝手に言っただけやがれ！俺は心なんか持っちゃいねえんだよ！憎しみとか怒りとかナァ！！」

ぎゅうと指が智香の首に食い込む。

「もういい。お前は死ぬ。そこでこうすけも殺して、ここの学校も壊して、人間もみんなぶっ壊してやんだ！！」

それは一見子供の怒りとよく似た印象だった。だがまさにその通りだった。

彼女は怒っていた。ただたんにそれだけ。壊したい衝動、つまりライドの性質が表に表れたという、ただそれだけだったのだ。人間で言う、ストレス発散に近いものがある。いつも抑えている感情が爆発、それは生前の律佳の、愛してほしい心であったり、暴走する前の律佳の、こうすけに認めて欲しい心であったり。色々だ。特に大きいのが、智香に裏切られた記憶で。

核心をつかれると、子供はすねるか怒るか暴れるかだが、まさに律佳はそれだった。

「死ぬ・・・死んじまえっ！！」

食い込む指に、智香は本格的に最後を感じ取った。結局片腕落とすのが精一杯だった。これで、二日間暴れられようと、街が一つな

くなることもないだろうが、それでもこの学校だけは無事に済まない……。

息が出来ない。苦しい。最後に何を想おうか。

耕輔くん……律佳ちゃん、よろしくね……。

「待った」

律佳のスカートの裾を引っ張る白髪の少年がいた。

「ああん？」

あまりに突然のことに、律佳はそちらに注意を向かせる。一瞬の隙。力が緩まった。

諦めていた智香に生気が戻り、渾身の蹴りを律佳に浴びせた。

「あめえんだよっ!!！」

と、思ったのだが。

律佳がニヤつき放った拳は、鏡と同じく智香の腹にも大穴を開けた。鮮血が飛び散り、その血は律佳を覆わんばかりにビシヤリと被さった。智香はヴィヴィ、と機械的に手を律佳に伸ばしたが、やがてガクガクと痙攣し、眼を大きく開き、絶命したのだった。

「ハハハ……ハハハハ……!!！」

律佳の笑い声が、乾いた廊下に響き渡った。

其の九の二十二

智香が死んだ。律佳はそれだけでお腹一杯になったが、これによつて殺害の好奇心が膨れ上がり、今度は耕輔を殺したくなってきていた。

彼はこの律佳に殺されるとき、どんな顔をするのだろうか。どんな悲鳴で何を叫ぶのだろうか。考えただけでわくわくしてくる。

ついでだ。この白髪の少年も殺そうか。

その時だった。律佳の後頭部にフライパンが一閃されたのは。

「甘いのはあなたです!!」

ゴーンと乾いた音が律佳を殴りつけたフライパンからして、律佳は信じられないと言う眼差しを智香によこし、そのまま横にぐらり倒れた。智香はカランカランとフライパンを廊下に落とし、

「ごめんね、律佳ちゃん・・・にしても、危なかったです・・・」
力なく言うと、ペタと座り込んだ。

その隣で、驚いた様子もなく、白髪の少年、雄谷は言った。

「見事です。あの一瞬で可視分身を作り出して、調理室からフライパンを取り出してくるとは」

見事と言う割には興奮した様子もなく、無表情、無感動で語る彼は、どこを見ているかも分からない目で智香を見つめていた。

「いえ・・・。あなたのおかげです・・・あのままだと私・・・首を絞められて死んでいました」

「ええ、そうでしょうね」

相変わらず無愛想だが、少年は先ほどから、智香の顔をじいっと見ている。なにぶん何を観察しているか分からない眼だが。

「あの・・・なんですか？」

「あ、いえ。お綺麗だなと」

彼女はそれをぼーっと聞いていて、もしかすると聞き間違えだったんじゃないかと言う苦笑を一瞬見せるが、照れる様子もなくすぐ

に笑顔になり、にこりと笑った。

その奥、ダーハン1こと二武良 鏡が、腹からおびただしい血を吐き出しながら、呟いた。

「・・・死ぬ」

かくして一件はまああるく収まり（とは言っても、学校の校舎崩壊の被害は甚大なものだったが）、日常の平和を、耕輔たちは取り戻しつつあった・・・。

「な、ワケねえだろ！！」

「どうしたの？耕輔おにいちゃん」

眼を真ん丸くして、驚きに満ちた顔を耕輔に向けた、白髪の少年とともに現れた謎の少女、安芸里 鈴に、彼は説明できず、額をポリポリと搔いた。

「あ、いや・・・」

ソファに共に座っている隣の雪也が激しく耕輔を睨み付ける。

「そうだぞ！迷い子つてのは心配性なんだからな！」

「・・・・・・・・」

何がそうなんだ雪也。それにいつお前はこのコの親になったんだ。つて言うか問題なのは、

「お前らなあー・・・なんで俺の家に住み着いてんだ・・・？」

普段“僕”と自分を形容する耕輔のこういった態度は珍しくない。しかしこう怒るのも無理はない。何せ、ダーハン1こと二武良 鏡と、ダーハン2こと観道 雄谷、そしてその雄谷が連れて来た謎の少女鈴までもが、勝手にこの家に三日間も住み着いてしまっていたのだ。何度も拒否したのだが・・・。帰ってくれない。

それに加えて、周りがいつも問題なことを問題とも思わず普通に生活しているから問題なのだ。耕輔の言葉に、ダーハン1こと二武良 鏡が答えた。

「仕方がないだろう、我々には家がない」

「そうですね。僕らには帰る場所も家も施設も魂も」

「ええい！もういい！！」

ダーハン2こと雄谷が延々と語りだしそうなので制止する。

「ふふ、にぎやかになりましたね」

可愛く微笑む智香にもほとほと頭が痛い。それに雪也が満面の笑みで智香に返した。

「ええ！そうですよね！！」

智香の言うことなら何でも鵜呑みにするのは、いい加減やめて欲しい。ここで一つ大きな心の穴があることに気付き、耕輔は智香に尋ねた。

「……で？律佳は？」

唯一ここにいない律佳がイチバンうるさくて、いて欲しくない存在なのだが、いつも一緒にいると、こうゆうとき彼女がいないと寂しい。

「……ちよつと、時間がかかるみたいですね」

暗い顔で答える智香。どこか焦りを感じるが、気にしないで置こう。彼女は強く見えるが、かなりナイーブなのだ。

「そっか……ふーん……」

「それよりボードゲームとかしねえか？」

「何ですかそれは」

雪也の言葉にいち早く雄谷が噛み付いた。二番手には、

「ボードゲーム……戦闘シミュレーションか？」

鏡が神妙な顔でボケて、

「わーい、やるやるうー！！ジュースも飲みたいなあー」

知っている様子で喜び、さらに追加注文する鈴に、

「ええ、そうしましょう、私が入れますね。あ、あと簡単なおやつも用意します」

と優しく微笑み、雑用を買って出る智香。耕輔は頭を抱えて、

「いいんだけどさ……」

「だけど？」

雪也が横から顔を覗き込んでくる。

「何で俺の許可なくことを進めようとするんだよっ！…！…？」

其の十

窓を開くと、そよそよとカーテンが青空に揺れた。外からは小鳥のさえずり。心地のいい風が頬をかすめていく。

隣には、まだベッドで横になっている一人の男子　耕輔がいた。

「こつすけー、起きなよー」

聞き慣れた愛嬌のある憎むべき声が、眠りのなかに深く深くいた耕輔を起こした。頭が重い。勿論まだ起きようという気はなく、彼はそれを無視して眠ろうと思っている。

「ねえつてばー、起きようよー」

今度は肩を掴んでぐいぐいと肩を上下させられた。ちと痛い。が、だからといって起きる気は毛頭ない。

「もおゝ・・・起きてっ!!」

声の発生源が顔に近付いたのか、声が大きくなった。もとより大きい声だったが、倍加したように感じる。

「起きてつてば!!この・・・!!」

ドボンと顔の横に腕が突き刺さった。共にベッドの白い羽毛がふわっと宙に舞う。耕輔は眼を開けてしまっていて、顔が固くなった。言葉も失い、勿論眠気も失って、次にその腕の主を見た。

「・・・・・・・・」

「起きた？」

にこつと屈託なく笑うその少女は、まさしく律佳であった。って言うかなんているんだ。さして律佳が帰ってきているということに驚く様子もなく、耕輔は時計を見ると、

「まだ五時じゃねえかあ・・・」

眠そうに眼をこすりながら、彼は脳をフル回転させた。とりあえず律佳がここにいることよりも、彼女が朝五時と言う常人並みの早起きにまず驚ける。彼女は朝に滅法弱いのだ。学校には絶対遅れな

かったが（例外アリ）。

「あはは！驚いてる驚いてる！！」

律佳自身も、ここにいて、と言う意義をたてないところを見ると、際立って、律佳がここにいてという事実は異常なことではないと判断できる。どちらかと言うと、耕輔の思惑通り、朝五時に起きたぞと言うことを主張しているような態度でもあるし。

「決まってるんだろ……。でもなあ……。お前ならよ、昼頃から帰ってきて、まずいきなり昼飯食いそうなものなんだが……」

聞いて彼女は眼を真ん丸くした。何か変なこと、言っただろうか。しかしどうやら、推測は大幅に外れていたようだ。

「……。そーすればよかった……。学校も面倒くさそうだしなあ……」

自身のことながら気付かなかつたらしい。アホだ。

それより意外だ、彼女が学校を面倒くさいと言うとは。彼女は無類の学校好きなハズなのに（推測）。また何か学校に厄介ごとでも抱えているのだろうか。……。いや、それならとうに抱えすぎている。

「……。それより……」

「ん？学校の準備？」

律佳の発言を無視して、面倒臭く頭を搔くと、耕輔は言った。

「今日さあ、日曜なんだよね」

「おかえりなさい！！律佳ちゃん！！」

「うおおおおっ!？」

水を一杯飲んでから、耕輔は朝もはやからこんちゃ状態で、パジヤマ姿のまま智香の家へと行き、すでに起きていた智香に耕輔が、律佳が今帰ったと伝えると、と、同時に隣から、ジャーン、という風に出てきた律佳に、智香は抱きつき、微笑みながら泣いたのが、今この現場である。智香は特に律佳の左手を触り、

「律佳ちゃん……。良かった……。！！良かったです……。！！」

律佳の両手をぎゅっと握った。

律佳は放心したように智香を見ていたが、やがて笑顔になり、照れくさそうに呟いた。

「う、うん・・・私も良かった・・・またみんなといられるから・・・」

耕輔には聞こえないように、智香の耳もとで。

「律佳ちゃん・・・」

もし耕輔が聞けば疑うこと間違いなし、頭がおかしくなったんじゃないか、とか。それとも冷やかされるか。それほどまでに律佳が他人のことを良いと言つのは珍しいことで。

「さあーって！！んじゃ何かつくってもらおっかなあー」

智香から離れた途端、手をすりすりしてにこり笑う律佳。いわゆる本調子、全開。律佳の後ろで、耕輔は額に親指と人差し指をつけて、はあ、とため息をついた。やはりいつもの律佳だったからである。そう、一応耕輔も律佳のことを心配していたのだ。が、あんまりにもいつもと同じなので、拍子抜けしたというか。あるいは安心したのかもしれない。

「ええ、何でもよろしいですよ。お腹一杯にして差し上げます」
赤くなつた頬をぬぐって、智香は満面の笑みを浮かべた。

料理が出来上がると、律佳はこれでもかと言わんばかりの食いつぶりを発揮した。何だか大食い選手権を見ているようで、快い気分はしない。

「んつたく、よく食うよなー・・・」

椅子をきしらせて、対向している律佳を見ながら、耕輔は両手を頭の後ろに持っていった。

「ええ・・・。でも、いいんじゃないですか？」

静かに言つと、智香は彼の顔を横から覗き込むようにして、微笑んだ。

「まあ・・・なー・・・ああでなくちゃ律佳じゃないって言うか・・・」

そんな気はしていても、やはり食いすぎだと思っことは、さほど
おかしいことではない。

「律佳ちゃんらしくない、ですよね？」

「そうだな……。律佳はこうでなくちゃ」

「なにがー？」

口の周りを食べ跡でべたり汚している律佳が素っ頓狂な顔で顔を
上げた。まるで二、三歳の子供のようだ。耕輔は顔を背いて、

「いんや。べつに」

智香は顔を少し傾斜させて微笑んだ。

「気にせず、お食べ下さい」

「まあ言われなくても食うけどさー」

また大食い選手権並みの食いつぶりが展開される。智香はそれを
うっとりとして眺めるのだった。

其の十一

翌日からの生活は何故だか非常にラクラクだった。それは危惧していた二人が意外と律儀だったからだったからであろう、それが一番当てはまる。

「うあーっ！！遅刻するーっ！！」

それは翌日の朝。言いながら、制服を着ながらにして部屋を飛び出した律佳は、ダイニングへとバタバタ走っていった。それを洗面所で歯磨きしていた耕輔が聞きつけていた。いや、聞きつけたわけではない、聞こえてしまったのだ。

「まだぜんっぜんはえーっの・・・」

ダイニングでは、すでに鏡と雄谷がいて、雄谷はしっかりと、律佳や耕輔、鏡の分のトーストを用意していた。

「ゴハンまだー！？」

律佳がわめくと、キッチンに立っている大男、鏡が涼やかに答えた。

「焦らなくてもいい。まだ時間はある。それにゴハンなら雄谷が準備しているだろう。俺は野菜を茹でている」

次に雄谷が、オープントースターの中身を真剣に見つめながら言った。

「焼き上がりは完璧ですが、気候に触れるとどんな影響を及ぼすかは予測出来ません。冷めると美食概念を省かれますので、焼き立てを「ご賞味下さい」

「？」

着席した“はてな”が出まくる律佳の隣で、なおもオープントースターを眺める雄谷は、人差し指で机の真ん中を指差した。そこには一枚の皿があり、食パンと目玉焼き、ベーコン、隣には温野菜が飾られて乗っていた。どれも完璧である。どうやらそれが律佳の分らしい。

「すっげーうまそー！！いただきまーす！！」

だがそれを、律佳が食べ終わるのは約三分程度しかかからなかった。それを見た雄谷は眼を光らせる。

「情報解析は出来ています。再度食事をとるのなら、キッチンにある食べ物をご賞味下さい。くれぐれも劣化させないように、全て平らげて頂けると幸いです」

「？ とりあえずキョウウンとこ？」

「はい。鏡のところですよ」

律佳がキッチンへ向かうと、彼女は眼をキラキラ輝かせ、素敵とばかりに両手を組み、頬の隣へ持つていった。

「すげー！。これ全部食っていいの！？」

黙々と調理する鏡の代わりに雄谷が答える。

「お願いします」

律佳は元気良く手を上げた。

「はいー！！」

そのキッチンには、なんとハンバーグやらオムライス、カレー、ラーメン シチュー等があったのだ。律佳がそれを物凄い勢いで食い始めた頃、鈴が部屋から眠そうに起きてきていた。ちなみに鈴は、律佳の部屋で一緒に寝ている。一応女同士ってことで。あくまで、一応。

廊下に面した洗面所に、顔を洗っている耕輔を発見し、鈴は挨拶した。

「おはよー・・・耕輔おにいちゃん・・・」

「ん？あ。おはよう鈴。よく眠れたか？」

「・・・・・・・・・・」

顔を背け、不機嫌な顔をする鈴を、彼は察した。

あー、鈴ってば律佳に抱き枕にされてたな・・・。

「鈴、昼寝るといいよ。律佳学校行くから」

「うん、そうするー」

本当に抱き枕にされていたらしい鈴は、不機嫌な顔のままダイニ

ングへ向かっていった。同時に呼び鈴が鳴り、ほぼ同時に、雄谷が
呟く。

「智香さんですね」

呼び鈴を聞いた耕輔は、洗面所から出て、玄関に向かった。

「あ、はいはい」

扉を開けると、青い髪を揺らし、智香が軽くおじぎをした。思わず耕輔も頭を少し下げる。

「おはようございます耕輔くん」

「あ、ああ、おはよう」

顔を見れば分かるが、何だか今日は智香の顔が優れていない。

「……………」

「……………どうした？昨日眠れなかったか？」

「あ、ああいえ……………そうゆうことではないんですけれども……………」

上目遣いに耕輔をみやると、急に智香は、耕輔の腕を強引に掴んだ。

「えっ!？」

「スイマセン、話がありますっ!外へ」

そのまま強引に耕輔を外に連れ出すと、彼女は耕輔に向き直り、眉を怒らせたように上げた。

「分かってますよね？」

と聞かれるからには、耕輔以外の人物がここにいいないことを考えると、それは彼に聞いていることになる。

「……………ゴメン。何のこと？」

正直思い当たらなかった。智香はふかあいたため息をはいて、ぱしつと額に手を当てる。

「……………言いませんでしたか……………?律佳ちゃんは、引退だって……………」

引退……………か。うーん……………あれ?律佳ってテニス部だったっけ?

何故テニス部なのかよく分からないが、つまり律佳がレギュラーだったとして、智香はそれをもつたいたいないと律佳に言えずに戸惑っ

ていて、よく分からないが、それを俺に言ってくれと頼んだと。なるほど。

「スマン。テニス部の話ならまだ言ってるない・・・」

「は？・・・あ、いえ。スイマセン。一体何を言ってるっしやるのですか？耕輔くん」

「え？違う？」

「違います」

断言された。そう言えば律佳は部活などしていなかった。智香は観念したようにもう一度ため息を吐き、

「じゃあ聞きますけど、私が律佳ちゃんを殺そうとした理由はなんですか」

「・・・智香が、律佳を殺す・・・！？・・・あ！

申し訳なさそうに耕輔は智香を見た。明らかに憤怒している。

「そういえば・・・派遣が替わるとかどうとか・・・」

「そうですよっ！！もう私たちはここにいらねえ」

「しっ・・・」

向かい側のおばさんに気付き、耕輔は自分の口に人差し指を当てた。智香も気付いたのか、振り向き、おばさんに、スイマセンと苦笑しながら言った。おばさんは、最近の子はまったくなくてないねえなどと言いながら、首を出していた窓を閉めた。どうやら恋愛関係の話に間違えられたらしい。智香は真っ赤になって、小声で続けた。

「私たちの学校には・・・もうライドは必要ないんです・・・」

“情報色彩風薫”。それが対怪物に使われることになれば、確かにライドは、不要になる。

「・・・けど」

「けどはありません」

智香が耕輔の言葉を強く遮った。

「学校の転入がどうか、そこで律佳ちゃんが学校などで友情関係を築いたからどうか、耕輔くんはそうゆう理由をお考えなんですし

ようけど。無駄です。政府にはそんなもの関係ありませんから」
区切つて、彼女は続けた。

「便宜上、私たちライドがここに存在すると言うことは、この町の学校は平和でないことを示していることになる。そうです。私たちライドは、対怪物の為にいるんですもの、安全なわけも平和なわけありませんよね。つまり、私たちはいないほうが“良い”というわけです」

完璧な理由だった。崩せる自信がない。

「……だとして、何故僕にそんなことを言うんだ？ 智香さん」
智香は意味深にうつむいた。

「……」

「僕に、僕らに、残り少ない時間は大切にしろってこと？」

「……いえ。実は……」

「？ 実は？」

相当言いにくそうだが、待つほかない。

それから三十秒はそのままいただろうか。智香がやっこの思いで場を破った。

「ここにいる理由を……作ります……。……試験に出れば……
・回収免除になるでしょう……」

耕輔には、その意味するところが見当もつかなかったが、背中に寒気を感じる言葉ではあった。嫌な予感がする。

其の十一の二

試験・・・聞こえも悪ければ嫌な思い出もぶり返してくる単語だ。まあそれは私情であるが、確かに他の悪寒も感じる。

ライドの試験、か・・・。

智香はその様子を窺いながら、

「お察しの通り、あまり聞こえの良いものではありませんし、まして筆記ではありません。私たちはライドです。それに律佳ちゃんは根からの戦闘型・・・その試験と言ったら・・・」

ここら辺は、昼になっても静かだが、朝は少々の喧騒すらない。静か過ぎる。大気の音が聞こえるほどだ。それ故か、耕輔は落ち着かなかった。

「ライドの試験・・・。つまり、データ収集か？」

「ええ・・・」

冷たい風が智香の髪を揺らした。彼女の顔は曇っているように見える。自分も同じ様な顔をしているのだろうか。

「でも、耕輔くん・・・これは律佳ちゃんとっても、あなたにとっても、いいことかもしれません・・・別れより、こちらのほうがツライかもしれませんか？お気に留めて置いて下さい」

「それはどうゆう意味だ？」

「・・・お話しする勇気がありません・・・」

直後、何もなかったように、“さっ、律佳ちゃんを呼びに行きましよう”、

「もう時間です」

と、彼女はにこやかに自宅へと入って行った。

場所は替わって学校に。

「ツライ・・・ね・・・」

そう言えば、楽しい辛さしか味わってなかったな。

耕輔は最後部の一番左の席で、外の青ざめた雲の塊を見ていた。

鼻の下には、シャープペンを上唇で支えている。

経済的には辛かった。だってアイツ・・・横にいるけどさ、食いすぎなんだもんな。ああ、そうそう、そういえば模造品のレモン食おうとしてカテエとか言ってたな。

本人も気付かない微笑を耕輔は浮かべた。

其の十一の三

「なに笑ってんのさ？」

不意に隣から声をかけられ、耕輔は顔をかたくした。話しかけてきたのは、言わずも律佳。

「べ、別に」

「ふーん」

耕輔の顔から黒板に視線をかえ、彼女は数字が書かれた黒板の内容をノートに書き写す作業を再開する。

「・・・・・・・・」

黙ってその様子を眺める耕輔。

・・・・意外だ。

というのも、律佳は元来から授業を聞きもせずいつも寝ているか、ノートにラクガキしているからだ。

しかし、それをどうしてだ、とか変だ、とか言うのは、今日は何だか酷だと思った。

律佳も頑張ってるんだよ・・・・。

時は進み、昼の時間。律佳にしては珍しく、彼女は耕輔と机を合わせた。

「今日はまたなんで一緒に食べるんだ？」

「うーん・・・・まあ、色々あるよ」

彼女は笑顔でそう答えた。

「その色々が聞きたいんだが・・・・」

「そうだねー・・・・なんにしよう」

「なんにしようって、お前な・・・・」

「私はさ・・・・こうすけが大事なんだよ」

そこでにつこり笑って彼女が言った言葉に、彼は突っ込めなかった。崩すことも追求することも、なんとなしに避けなくなってきたからだ。

と言うのは嘘で。

本当は、何とも言えない感情が喉まで昇り詰めてきたからだだった。だが、俺も律佳が大事だ、なんてすっぱり言えるわけもなく……。

……これは、近い感情かもしれない。彼女が好きだってことにけど、それは違う。

一緒にいたい。それだけだ。

帰り間際のホームルームも終了し、暗い雲がのしかかる空の下を歩いている途中だった。

「分かつてるよね？」

「え……？」

どこかで聞いたフレーズを、隣で歩く律佳が、唇を噛みしめながら、笑ってきた。意地らしい姿である。

「私がいなくなるってことだよ。引退なんだ。聞いてるでしょ？」

「……」

答えていいものか戸惑う内容だった。律佳はその様子を窺い、思いついたように鞆を探ると一枚の紙を取り出した。

一瞬その紙を見た耕輔の目にもわかるくらい、良質の紙に“辞令”と大きく紙に振ってあった。

「ちゃんとあるんだよ。ほら、辞令も……あ」

耕輔は無言でそれを律佳からひったくり、真剣な目つきで黙読した。そこには確かに、律佳異動の文字。

「ね。だから……うーん……」

日付は明日午前10時。

「今日と明日は私の言うこと聞いてよ」

「そうだな……」

「え！？ホント!？」

律佳は顔をほころばせたが、彼が思ったことは、律佳への応答ではなかった。

「……律佳は聞いたか？試験の話し」

「……え……しけん……？」

彼女は立ち止まり、ほころんだ顔を一瞬で青ざめさせた。彼も立ち止まり、その尋常でない表情をすぐに読み取る。

「悪いこと、言っただろうか。」

其の十一の四

「試験で・・・アレでしょ・・・？」

ゆつくり耕輔の横を通り過ぎていく律佳。

「あれって・・・？」

どうやら律佳も知っているようだ。試験のことを。律佳が意味深に言う。

「・・・。うーん・・・確かに一緒にいたいけど」

耕輔もゆつくりと歩き出して、律佳の隣に並ぶ。

「・・・だろ？いきなりサヨナラって嫌じゃないか」

「けどさ・・・」

彼女は言いかけたが、それを中断した。

「・・・分かった。試験やるつか！！」

カラ元気でガッツポーズを取る。だがその風は無理をしているようにしか見えない。

「無理すんなよ」

「無理じゃないよ！・・・私もこうすけも一緒にいたいんだもん。」

いいじゃん、それで」

確かに理由は、それでいいんだと思う。いいが、律佳は今嘘をついていそうだ。コイツは嘘をつけるヤツじゃない、そのせいかさきほどからはころびだらけだ。

「嫌なら嫌って言えよ。理由だけでもいい。このことは俺とお前の問題だか」

「違うよ！これは私の問題！だってそうでしょ？私が選ぶんだから！だったら試験やるよ」

とてもヤケに見える。全く、律佳らしくない。

「落ち着け・・・とりあえず」

「落ち着いてるもん・・・」

ガクリ肩を落とした律佳と共に、とりあえず家に帰ることにした。

話しは今日中にまとめればいいと、耕輔は簡単に考えていた。

しかし“今の”律佳には荷が重すぎたのだ。

耕輔宅の夕飯、それも鏡と雄谷がやってしまっていた。ハンバーグというのはいかがなものかと思っただが、おいしかったので文句は言わないことにした。

「私・・・ちよつと疲れたから。先お風呂入るね」

席を立った律佳に雄谷が止めに入る。

「待って下さい。僕のデータエラーが検出されています。あなたはこれをいとも簡単に平らげるはず。なのにまだ半分も」

「うるさいな・・・。お風呂に入るの。それ誰か食べていいから」

律佳は頭を掻きながら、大きなリボンを床に放った。ばさつと大きな髪が揺れ、そのまま彼女は廊下に消えた。

「・・・・・・・・」

今日の律佳はホントにおかしい、耕輔は思っていた。うるさい、なんて律佳から聞いたこともないし、疲れたつても聞いたことがなかった。そして食事拒否。ありえないこと尽くめだ。まるで恋に悩む平凡な少女のようである。

「俺には分かるぞ」

と鏡がハンバーグをナイフで切り裂きながら言った。

「恋に悩むとは、一概には言えない。人それぞれで違う悩み方をするからだ。だが思いつめると苦しくなる。あらゆる重病より重いものかもしれない。なにせ“治癒の方法”は十人十色で、しかもタイミングときっかけを誤ると、さらに苦しむ可能性がある」

鏡はハンバーグを口に放り込んだ。

「絶対などない。あやふやで、曖昧で、また不確かな炎。それが恋だ。いいか。余計なことはするな」

彼は耕輔に向かって言った。

「って僕に言ってるんだそれ・・・」

恋・・・か・・・。何故こうも冷静に考えられるか分からないけど・・・きつと彼女、律佳の片思いの相手は・・・僕だろうな・・・

o

其の十一の五

「思い上がるなよ」

「え」

心を読まれたかと思うほど適切な言葉に、耕輔は思わず背筋を伸ばした。

「お前の責任ではないが、お前が解決すべき問題だ」

とそれだけ言い終えると、鏡は何事もなかったように食事に戻った。

それはそうだろうが・・・一体、どうしろって言うんだ。

温度は適温。これでいい。

「はああ・・・」

が、それには関係なく、律佳は深く湯船につき、何度か目のため息をついた。

どうして素直になれないんだろ・・・。

彼女は思い悩んでいた。そのことに関して。今まではそんなこと、考えもしなかったから。自分がやりたいように、自分が思っているように、自由にやってきた。それが今どうだろう。何かに縛り付けられ、必死にもがいているようではないか。何がそうさせている？何が私を縛り付けてる？分からない・・・。

けれど、そこにこうすけが見えるのは確かだった。彼のことを考えると、とてもふわふわして暖かい気分になるが、逆に終わりのない穴に落ちていくような錯覚も覚える。

だからどうだということはない、ただそれだけ、それだけなのに。どうして八つ当たり気味になるんだろう。自棄ヤケになるんだろう。それも分からない・・・。

「はあ・・・」

またため息をつく。それよりそうだ、試験のこと考えておかなき

や。自分にはまだやるべきことがある。忘れよう。今の気持ちは合格するまでは……。

その日律佳と耕輔は、一度も顔を合わせず、就寝時刻となった。寢床に入ると、律佳は鈴におやすみと言って、電気を消した。

……あれ？

鈴は眠れないことと同時に、律佳のいびきではない、何かの音に気付いた。これは……。

ぐすつ……ぐすつ……何で……。

泣き声だった。

翌日の朝。耕輔はいつもと変わらぬ調子で歯を磨いていた。彼はいつも人より早く起き、自分の朝食を平らげ、こうやって準備万端にしておく癖があるのだ。言わずも律佳との五ヶ月が影響している。そこへ、トントントンと軽い音でフローリングの廊下を歩いてくる足音が聞こえた。

それは丁度洗面所の前に止まり、こちらに向いた。ので。ああ、これは鈴だな、と思い歯磨きを中断し、

「おはよう、鈴」

挨拶した。が挨拶が返ってこない。代わりに怒りのこもった瞳がこちらを睨んでいる。

「……どうしたんだ？鈴。昨日も律佳のせいで眠れなかったのか？」

「そっだよ」

返してきた声も、その大きな瞳と同じくらいの怒気が宿っているように感じた。理由はきつとまた眠れなかったせいだろう。

「はーん、やっぱり。全く律佳は……大人気ないな。」

「は……律佳もしょうがないやつだな……」

彼は頭を掻いて、明後日の方を向いた。

「バカ!!!何も分かってないじゃない!!!」

突然予想もしなかった怒声が洗面所に響いた。

「は、はあ？わ、分かってないって・・・」

急な出来事に動揺しまくりの耕輔だが、構わず鈴は、フンとでも言いたそうに視線を外すと、ダイニングの方へ行ってしまった。

「な、なんだあ・・・？」

その意味は分からなかった。別に変なことは言っていない。それに何が「分かってない」のだろうか。

その時呼び鈴が鳴った。まだ早い、この時間なら智香が来たと推測していい。

耕輔は玄関に向かいながら、試験出場させる意を伝える言葉を練る。

ガチャリと玄関の扉を開くと、やはりそこには、青い髪を揺らした智香が立っていた。

「おはようございます。耕輔くん。決まりましたか？」

応答待たず、聞いてくる。智香にとってこれもかなり重要なことだからだろう。律佳は智香にとって大事な大事な人だから。

「ああ、勿論」

勿論、試験は出場させる。

其の十一の六

「そう言おうとした時だった。」

「待って」

智香が言葉を遮るようにして、てのひらを突き出した。

「・・・それは・・・。あなた個人の考えですね？」

まだ言ってもいないのに、智香は耕輔の答えを読んでいた。そこに一つの風が抜ける。さらに異様な空気・・・。

「それが・・・どうしたんだよ・・・？」

それは智香の言葉を肯定すること等しかった。彼女は力を込めた眼を閉じ、抜けたようにため息をついた。

「あなたは本当に分かってない・・・。」

額に手をあて、ふるふると頭を振っている。何が分かってないって言うんだ。

「何が・・・何が分かってないんだよ・・・僕が律佳のことを、分かってないって言いたいのか？」

分かってない、と言われたのは、今日二度目だった。さっきも不意にこの台詞が突き刺さった為、印象が強く残っている。

「ふう・・・では律佳ちゃんには、試験に出場してもらいましょうか」

諦めたように彼女は言うのと、黙って耕輔の隣をすり抜けて、「おじやまします」とこともなげに入って行った。

・・・何が分かってないんだよ・・・。

結果的には試験に出ることになったし、律佳も耕輔の意見には賛同してくれている。いいじゃないか、これで。僕が何を分かってないって言うんだ？もし分かってなくても・・・結果は同じだろ。

彼は自分に暗示をかけて、ぎこちない気持ちを抑えつつ家に入った。

「ええ、ええ……。はい。今日は別件がありまして……。はい。ありがとうございます。お話はそれだけです。また後日に詳しく……。」

智香は学校に特別休暇をとりつけていた。あまりに突然な要請だったが、律佳の怪物からの優秀な生徒護衛結果と、智香の交渉術によつて、どうやらうちの校長は折れたようだった。

カチャンと受話器が置かれ、彼女がこちらに向き直った。

「ということですので、午前11時から試験開始です。今は7時34分ですので……。あと3時間26分はありますね」

椅子に座っている鏡が智香に尋ねた。

「移動時間はいいのか？」

「問題ありません。含んでますから」

「ふむ……。」

つまり11時と言うのは出発時間ということになる。

僕はなんとなくしに律佳を見てみた。試験の取り付けも、学校の特別休暇もうまく取れたのに、律佳の表情はとても暗かった。

励ましてやるう……。きつと不安なんだ。

「律佳、今日頑張ろうな？」

「……。」

依然腕を組んだまま机に伏している彼女。机から視線も移らないし、リアクションもない。どうやら聞こえてないらしい。

「りっ・か？」

「んあ……。？」

ゆっくり呼んでやると、寝起きのような顔をして返事してきた。

「元気ないぞ……。？」

「ん、んん、だいじよだよ、だいじよぶ」

どこか上の空で答えてくる。彼女の隣では、鈴が腹立たしげに玄関の方を睨み、腕組していた。

今更聞くのもなんだが、聞いてみるか。僕が何を分かってないのかを。それが律佳の暗さの原因なのかもしれない。

「なあ、鈴？」

「……………」

「聞きたいことあるんだけど……………」

「……………なに」

ものすごく怒っている「声」。今聞いたら逆切れされそうだ……………。

「……………いや……………別に……………」

「……………そう」

鏡が「やれやれ、失敗したな」と言ったのを最後に、会話はそれより後なかった。

11時頃になると、どこぞの高級車を思わせる黒い車が家の前に止まった。耕輔一同は、その数分前から智香に玄関に出て置くように言われ、それを待っていた。

車に乗り込むと、やはりそこでも会話なし。居苦しさだけが募った。

数十分走ると、どこかの駐車場に車を止め、出るように言われた。言われるままに出ると、言っては悪いが、ここはただの駐車場に見える。止めてある周りの車はすべて普通の乗用車に見えるし、駐車スペースもそんなに広くはない。と観察をしていると、運転手と共に耕輔以外の一同がそれについて行っていたので、耕輔も慌ててそれに並んだ。

その駐車場を出て、右側の筋をまっすぐ歩いていく。これもまぎれもない普通の道路だ。周りを眺めても、ただただ住宅があるだけ。いたって一般的風景である。そう思って数秒もしないうちに、初老の運転手が初めて喋った。

「あちらです」

一言だけだったが、それはとてつもない驚きに変わる。運転手がのひらをかざした先に、なんと、

「え……………あれ……………!？」

とてつもなく大きな・・・。

「ライド試験場、です」

耕輔の言葉に、智香がそう継ぎ足した。

「あれが・・・」

それは、大きな大きなドーム状の建物だった。

其の十一の七

「いつからこんな・・・？」

こんなものを作っていたんだ？

「五ヶ月前からでございますよ」

初老の運転手が答えると、律佳、智香ともに、心臓がバクンと鳴った。

耕輔もまた反応していた。

「五ヶ月前って・・・律佳と智香が派遣された日じゃ・・・」

「さようございます。しかし偶然でしょうなあ、それは」

耕輔は今自分がどんな顔をしたか想像して、慌てて取り繕った。

「あ、あはは・・・まあ、そうですね普通」

「ええ、普通」

この初老の男は、結構話せる相手だなと耕輔は思った。割と理解もありそうだ。

全く忘れられている存在だが、ちゃんと、鏡も雄谷も鈴もついて来ている。ちなみに鈴は膨れたまんまだ。

ドームに入ると、受付らしき女性が丁寧に頭を下げてきたので、耕輔も釣られて頭を下げた。

「ああ、いいんですよ、礼など」

耕輔が慌ててお辞儀するのを見て初老が笑った。

「え？でも」

意外に冷たい人だな。と思ったが、それは違った。

「あれはライドです。人間の女性型を“完璧”に模した」

あれもライドらしい。ここ最近、ライド需要は広まっていくばかりだ。TVでも特報でやっている。

「あの、完璧、ってどうゆうことですか？」

「ええ、人間に近い、ということですよ。特に心の方にね」

「こころ・・・?」

「乙女心と言いますでしょうか?」

含みのある笑顔で顔だけ振り返ってきた。耕輔は心のなかを読み取られたようで、咄嗟下を向く。

「もつそろそろつきますよ」

一階の受付から三階ほどエレベーターで上がって少し行ったところで、運転手、いや、案内役の男は止まった。

「・・・すこい」

綺麗、といった方がいいのだろうか。何だか不思議な感覚だ。右側には透き通るほどに磨かれた2、3mはあるであろうガラスの窓前には低いテーブルとそれに合わせた黒い高級そうなソファ。赤いカーペットも綺麗で、靴を履いていてもいいのか問いたくなるほどだ。

いや。実際、もつと目に付く場所があった。

「ここが・・・試験場・・・?」

ガラスの奥、四方500mはある円形の部屋がそこにあった。緑の淡い照明に照らされ、不気味に静けさのあるそれは、まさに“戦闘試験場”を彷彿とさせた。ここから見下ろすために今立っている部屋は存在するのだろうか。

「そつでございますよ。そこで、この2203・RCSYA様に試験を行います」

「・・・?え?」

2203・・・ナニ?なんつた?初老は微笑んで、

「RCSYA様ですよ」

と言った。この人は僕の心が読めるのだろうか。しかし情けないことに何を言っているか分からない。

耕輔は額に汗を浮かべながら聞いた。

「え・・・と・・・それって・・・?」

「勿論、律佳様のことです」

「あ・・・そつですよね・・・」

そういえば、そうだった。律佳が試験を受けるんじゃないか。なに忘れてんだ、僕。

律佳を見てやると、彼女は家を出るときと殆んど同じような表情で立っていた。そういえばここに向かう途中もずっとこんな表情だった。何か声をかけるべきであったと今更後悔する。

「りっ」

「ダメですよ。耕輔くん」

腕で律佳を遮って、耕輔の言葉を拒む智香。彼にはその理由が分からない。

「え？」

「さよう、励ましなどしてもらっては困りますな」

初老の男性はほがらかな顔つきのままそう言っている。

「どうゆうことですか？」

意味も分からず問う耕輔。

「我々は正当なデータを欲しています。人の励ましによる活性化など図られては、データが狂うでしょう？」

「まあ……」

分からなくもない。

「それに、耕輔くんには律佳ちゃんに話しかけてもらいたくありませんから」

「……」

それには同意出来なかったが、とにかく律佳に話しかけてはならないことに変わりがないので、渋々納得する。

「……でも、律佳があんな調子じゃ、試験もなにもないでしょう？ 戦闘試験なんでしょう？ だったら、このままじゃ……」

壊れる。とは言えなかった。そんな馬鹿なこと、あり得ないと思っただからである。試験で壊れては本人もたまらないだろう。

「ええ、壊れますね。律佳様は」

「え……？」

今、なんて？

言葉を疑った。壊れるだって？

その初老の男性は、顔色一つ変えず、表情も変えず、平気でそう
言い放ったのだ。

其の十一の八

「そうでしょうね、残念ですけど……」

智香までそう言い始めた。耕輔は焦って言葉を出す。

「ま、待ってくださいよ！壊れる？何で試験で壊れる必要があるんですか！？」

言葉が少し荒げても、気にすることなく叫んだ。初老の表情は変わらない。

「然るべきことなのでしょうな。ここで壊れるならば」

「そんな……！！」

そんなこと、あつてたまるか！“死ぬ”ことが、然るべきことなんて……！！

「やめます！そんな試験、律佳に受けさせられません！！」

「駄目ですよ……耕輔くん」

睨むような視線が耕輔に突き刺さる。智香である。

「あなたがそう決めたんです。律佳ちゃんと一緒に……」

「僕は知らなかった！」

「私も知りませんでした。あなたがそんなに軽薄だったなんて」

もうなにがなんだか分からない。何でそんなこと言うんだ。耕輔は頭に血が上っていた。咄嗟智香の襟首を掴み上げたのだ。

「お前は律佳が壊れてもいいのか……！！？」

「……」

智香の表情は鋭いまま。ぐらぐらと襟を揺らしてやって、グイグイ掴みかかる。

「なんとかいったらどうなんだ！？お前にとって、律佳はそんなもんだったのかって聞いてるんだ！」

彼女は数秒その表情のままだったが、気抜けたように吐息した。

「自分のことを人に押し付けてどうにかしてもらおうって言ってるんですか？ありえませんか……どうしようもない、馬鹿ですね」

間違つてもこの台詞は智香が吐いたのだ。しかし耕輔の耳には、もはや怒りを増幅させるようにしか聞こえない。

そして殺気にもかられた。智香を激しく憎み、今にも首をもぎ取つてやりたい……！そうでなくても、一発くらい殴り飛ばしたい。

「……！」

「……。殴るなら殴つていいんですよ……？」

挑発的に彼女は言う。今の状態なら、一発くらい殴つたつて、罰は当たらないだろう。だからといって何が変わるわけでもない。

どうする……！！

彼は……。

「……くそっ……！」

智香を投げ捨てるように襟を離れた。彼女は襟首を整えて、また険しい目つきになり、

「あなたは本当に弱いですね……」

と言い残して、フラフラした足取りの律佳の両肩を持って、奥の扉に消えて行った。

「さて、準備にとりかかりますのでこれで」

初老は何もなかったかのようなにこやかな表情で一礼し、来た扉を帰って行った。

数秒耕輔は突っ立って、放心していたが、やがて、

「ふう……」

ソファにドスンと座り込み、一息ついた。そこへ鏡が対向に、その隣へ鈴、耕輔の隣には雄谷が座った。みんな見守っていたらしい。ただ鈴は、まだ頬をプクと膨らませていた。

「あなたは どうして そう素直になれないのですか？理解できません」
淡々と表情のない声の雄谷が耕輔に言う。

「別に……。頭に來てたから……。でもだからって、何してもいいってわけじゃないだろ」

思い出すだけでも腹が立つ。が、ここはグツ堪えよう。雄谷が言つてきているのは、何故殴らなかつたか？ということだ。

「それが素直じゃないと言っんです。もっと自分に正直になるべきだ」

「殴れば良かった、そう言いたいのか？」

これはちよつとした皮肉が混じっている。しかし、

「肯定です。殴るべきだった」

「……」

まるで怒りを必死に落ち着けた自分が、ダメ人間だと言われている気分だった。

「お前なら殴るのか？」

「いいえ」

「？」

「あなたと同じコトをするでしょうね」

「だったら」

「いいえ」

間を置き、雄谷は今までにない顔で、遠い眼をした。

「僕はライドです。あなたは人間。人間なら、自分に正直に、素直になるべきですよ」

…。なんとなく、その表情は“悲しそう”だった。いや、無表情なのだが、どうしてか…。

そこで思う。

人間なら、正直に、素直…。

…今の律佳は…？

何を考えているんだろう…律佳は…。

初めて律佳の気持ちを考えた時であった。

其の十一の九

暗いコンクリート造りの一室。そこで律佳は長椅子に座らせられ、試験開始を待っていたのだった。智香もいるが、どうやら彼女は座る気がないらしく、ソワソワしながら律佳の前を右へ左へと歩き回っていた。だが突然思いついたように立ち止まり、律佳の生気のない顔を静かに眺めた。

「ごめんなさい・・・律佳ちゃん・・・」

言いながら彼女は律佳の小さな両肩に冷たい両手を乗せる。

「本当はこんなことするつもりじゃなかったんです・・・。ただ・・・あまりにも耕輔くんが・・・」

自身に違うと思ひ聞かせるかのように智香は頭を振り、

「ううん、いいんです、気にしないで・・・彼はどうやら、” やつと気付いたみたい” ですから・・・土壇場にならないと分からない人みたいですね・・・」

智香が細く微笑んだ頃、ブザー音が鳴り響いた。同時に機械的な女性の声で、「入場して下さい」と警告じみた声が入ったのだった。

「いよいよだな」

壁に張り付いて見ている耕輔の隣で、ガラスに背を向けて立っている鏡が言った。

「ああ・・・」

「辛いかな？」

鏡が探るように聞いてきた。

「いや・・・」

今はもう、智香と鈴が言っていた、“何が分かっているのか”、がやっと分かったんだ・・・だから辛くなって気持ちはない・・・。ハズだけど。つまり“分かってなかった”ことは・・・。

「あ……いや。やっぱり、辛いよ」

それを聞いて雄谷が少し顔を上げた。

分かってなかったこと。それは、正直になれ、と言う意味だったんだ。

耕輔は、律佳を見下していたのかもしれない。だから背伸びをして、正直に、素直になれなかった。

そのせいで、律佳は酷く悩んで……そう、きつと悩んで……。僕は決めたんだ。正直な気持ちを持つて。特に律佳には」

そうか、とだけ返し、そのままの状態でも鏡も試験場を横顔で見つめた。

丁度そのとき、左の自動扉から律佳が生気のないまま入ってきた。状態は変わってない……マズイ。あれじゃ壊される……。

「律佳!!」

今はあの初老もいないんだ。励ましくらい出来る。例えそれが許されてなくても、律佳が……潰されるのは見たくない。

彼女はゆっくりこちらを見上げた。虚ろな眼……。

「律佳!!聞いてくれ!!」

すつと息を吸い込む。プンスカと怒っている鈴も、このときばかりはソファの上から耕輔の方を見守った。

「俺は……!勝手かもしれないけど……」

勝手かも……いや……勝手だろ……。それでもいい。

「お前と……」

一緒に……。

「お前と一緒にいたいんだ!!これからも一緒に学校行ったり、暴れたりしたいんだつ!!!」

……。

急に律佳の口元が緩んだ。にこつと笑って。

「……待つてたよ!!こつすけ!!」

そこで雄谷が独り言のように呟いた。

「彼女は何かから解放された……泥水が一気に流されていった、

そんな様子ですね」

耕輔が答える。

「・・・そう・・・律佳は・・・苦しんでいたんだ・・・“自分だけの闘い”にして・・・でも違う。それは俺が律佳のこと、何にも思っただけじゃなかったから・・・そうなっちゃまったんだ」

ポカンとした様子で雄谷はどこを見ているか分からない顔になる。

「僕よりあなたのほうが解析は上らしい」

「それは違う」

どうゆうことだろう、と雄谷の顔は求めている。

「？」

「アイツとは長いんだよ」

長い、とはよく分からなかったが、

「・・・そうですか」

雄谷は聞いてから鈴を見つめる。

「？・・・なに？雄谷くん」

「いえ。僕達も早く長くなりたくなって」

「？」

そこで先ほどの女性の声でまた音が入った。

「アンノーン、出現させます」

とても律佳とは思えない口調でその律佳が言つと、もう一方の律佳は両のてのひらをふるふると振って、

「うううん！全然いいよ！！それよりキミは？」

「私のことなどどうでもいい。ただのコピー。あなたの模造品」

「モゾウヒンてなに・・・？」

それをガラス越しに見下ろす形で耕輔と鏡は見守っていた。

「模造品・・・つまり・・・」

耕輔が口にするのと、鏡が答えた。

「データコピー、だな。動物で言うクローンかもしれん」

「そんな・・・じゃあ、彼女の笑顔はどこへいつてしまったんだ！

？律佳の模造品なら・・・」

なら、というとり、だからこそ、の方が正しいかもしれない。律佳、つまりもう一人の“彼女”が本当にこの律佳を模造したなら、同じようにへらへらしているはずだ。そ

れが一番の特徴と言ってもいい。

「そんなもの決まってるだろう」

「え？」

あまりに簡単に言う鏡。

「調教されたんだ」

言われてもう一人の律佳の表情を見る。あの冷たい、律佳とは思えない表情・・・。

「調教つて・・・！！あんなに表情がなくなるまで！？」

「そうとしか考えようがないだろう・・・耕輔、冷静になればお前にも分かるはず。興奮しているぞ。少し冷めろ」

確かに彼の言う通りだった。冷静に、かつ普通に考えると、そう考えるしかなくなるのだ。

其の十一の十一

「でも・・・そうだとしたら・・・」

想像し得ない調教をされたに違いない。一瞬イメージしてしまい、耕輔は頭を二度三度大きく振った。鏡がそれに気付いたのか、こちらに視線を向けずに話しかけてきた。

「お前が気にすることでもなからう。ヤツは“偽者なのだから”」
確かに関係ないし、これから関わることもないだろう、しかし、
「そうゆう問題じゃないんだ・・・」

そんな悲しい過去を抱えてここに登場した“あの律佳”を、誰が望んで討つというのか。

「？ 何を言いたいのかわからん」

「推測の域は出ないけど、もし本当に“あの律佳”厳しい調教を受けていたとして・・・彼女をうちの律佳が討てると思うか？」

「・・・。さあな」

「さあ」とは随分他人行儀であるが、鏡にとっては何でもないことなのだろう。その無表情な顔のまま彼は考え言った。

「・・・お前が言えば何とかなるんじゃないのか。闘えと」

「・・・そりゃまあ・・・そうだろうけど・・・」

確かにそうすれば彼女は闘ってくれるだろうが、まさかそんな事、律佳に命令出来ない。彼女も一応拒否するだろうし。

「ともかくここで律佳を失うわけにはいかんだろう。さっきプロポーズを終えたばかりじゃないか」

ボンツと耕輔の顔から煙が吹き上がった。ついでに赤くもなる。タコみたい。

「ち、違う！！！」

「なんだ、違うのか。残念だったな、耕輔」

何が残念なんだか・・・。

彼は耕輔の肩を握ってくれ、哀れみの眼をくれた。

いらん、そんな眼。

流れ出てきた熱い汗を拭いて、もう一度視線を“うちの律佳”に合わせた。

なんかへらへらしながら手をひらひらさせている。お前はどこそ
の“お隣お母さん”か。

「そんな怖い顔してても、いいことないよ？スマイルスマイル」
しかし全く彼女は動じず、眉一つ動かさない。ずっと律佳を見つ
めている。透き通った、悲しい眼で。

「・・・あなたとは闘いたくなかった」

ポツリと漏らしたのを、“誰も聞き逃してしまった”。

「え・・・？な、なに！？何て言ったの！？」

べらべらと、「ほら笑ってよー」と大声を出していた律佳だけが
耳にひっかけたらしい。

「いえ。何でもありません。・・・そろそろなのでしょう？五郎様」
間を置き、突然天井を見上げ、誰かの名前を呼んだ。

二秒、三秒後に、あの初老の声がスピーカーから響いてきた。

「そうでございますね。そろそろ戦闘準備を始めましょうか」

あの初老、ただもんじゃなと思っただけど・・・。かなりの重
役らしいな。

「では技術班、お願いします」

「了解しました。ロックします」

今度は女性の声が答えると、突然赤い光が試験場全体の床から這
い出した、と思うと、何かを探すように、光の線はあちこち散らば
り、やがて一人の人物を真っ赤に照らした。

・・・射出って、なに撃つんだろ。まさか銃弾！？ってなわけな
いよな・・・試験なんだし。

「え！え！？なにになに！？なにこれ！？」

ジタバタと体を振っているうちの律佳に、光線が集中し、どんな
に動いてもその線は一点のズレなく同じ場所を照らし続けていた。
それは人工的な神秘的な映像にも見える。

「あまり動かんで下さい」

ちよつと苦笑しているかと言う声で、五郎と呼ばれた初老はスピーカー越しに言ってきた。ともあればこちらからの声は聞こえないだろうな。技術班の“声”も笑いながら答える。

「ロツクは出来てますので、心配御無用ですよ」

「ああ、そうですか。ではよろしくお願いします」

「はい。では行きますよ、律佳さん」

「え！あ、うん！きやがれ！！」

何か全くの見間違い＋何も分かってないうちの律佳が答える。

「プロテクト！！！！」

技術班の声が叫ぶと、一部の天井がスライドして開き、高速で律佳に五発打ち出した。

「わあっ！！！！」

ガシャガシャガシャと鉄の当たりつばなしの音がして、律佳に何かが張り付いて行く。それから音がしているようだ。

「うわわわ！！？・・・ってあれ？痛くない・・・なにコレ・・・」

変な踊りを踊り終えた頃には、律佳はキョトンとして自分の体を見つめていた。

「防護スーツでございます」

五郎が答えた。

「防護・・・スーツ・・・」

律佳の姿を見ると、確かにそれは防護スーツで、肩や胸、腹、下半身が赤い鉄で囲われ、関節部分は黒いゴムのようなもので守られていた。ただ本当の材質は一見では見当がつかない。

しかしどうしてこんなものを着ける必要があるんだ。これじゃ卑怯じゃないか。

「ふうむ」

と鏡も考えたような声を出した。やはり鏡もそう思っている、と思っただが、違うようだ。

「かなりヤツは出来るらしい」

彼はあつちの律佳に視線を留めている。

「この防護スーツがないと、律佳様のお体は粉々に吹っ飛んでしまいますからね」

「なにせ五倍の力量です」

五郎と技術班が言う。

「ご、五倍・・・!？」

あ、あの馬鹿力が、五倍だって・・・っ!?

耕輔の頭の中で、この試験場を軽く破壊している“律佳”が見えた。

其の十一の十二

「なるほど・・・遺伝子もイジられているというわけか」

やはり無表情で言う鏡。調教される以前に彼女は改造されていたらしいことに、耕輔は同情していた。

「そんな・・・」

「生きる屍・・・まさに、ああいうのを言うのかも知れんな」

“あの律佳”は静かに律佳を見るだけだった。今日の試験、ハツキリ言ってしまうばただの殺し合いなのだろう、しかし殺気など、微塵も感じられない。

「あれが彼女の仕事、使命、ゆえに冷静でいられるのだろう」

「ヒドイ・・・」

いつのまにやら耕輔の隣に立っていた鈴が、眼に涙をためて嗚咽していた。

「生きる意味、ないんですね・・・今日この為に、彼女は死んできた」

耕輔には意味不明なことを言う雄谷も、いつのまにやら彼の隣に。そして誰もが感じていることを鏡が言った。

「この勝負・・・絶对的に不利だ」

「ね、ね・・・そんな怖い顔似合わないよ・・・」

試験場の律佳は未だにそんな話しをしていた。と言っても殆んど返答なし。

「・・・」

「あ、えー・・・と、さ、どうして何も答えてくれないの・・・？」

「・・・答える必要がないから」

彼女はようやく、小さく呟いた。と思ったら、

「どうしてよっ！！人が喋ってたんだよ！！？」

突然叫ぶ律佳。もとより対戦相手と喋る律佳の気も知れないが、彼女は小さく頭を振って、力なく言う。

「あなたは分かってない・・・」

「何が!？」

「私はあなたであって、私じゃないの・・・」
律佳はまた小首を傾げる。

「私は、あなた・・・けど私は私じゃない・・・」

「あの・・・えーと・・・よくわかんないんだけどなあ・・・」
だから、と言って彼女は続ける。

「・・・笑うのはあなたでしょう?」
初めて彼女の表情が緩んだ。少し戸惑う律佳。

「・・・え?」

「じゃあ、私は最低でも笑わない・・・。あなたと違うのは・・・」
そこ

「う、ううん・・・」

「そこに私がある・・・だから・・・」

「だ、だから・・・?」

「あなたをここで痛めつけるのも・・・私なの」

「・・・!」

ググツと敵意が強まったことを鈍い律佳でさえ感じ取った。彼女は構えると、また一瞬もの悲しい顔になって、

「・・・本当は、闘いたくなかった・・・でも」

私は律佳を討つ。

「いきますっ!!」

戦闘は開始された。

「互角・・・?」

少なくとも耕輔にはそう見えた。無表情の律佳は確かに攻勢だが、こちらの律佳もそれをいとも簡単にかわし、見計らって迎撃している。共に見ている鏡が唇をかみ締めた。

「まずいな・・・」

「え?」

「分からないのか?律佳・・・コホン、お前の律佳だ、迷っている」

言われて、その戦闘を迷っているかどうかの条件付けでよく見てみたが、やはりそんな風には見えない。

「鏡……僕にはそう見えない」

「……まあ、お前は戦闘に関してはド素人だからな……」

冷静な鏡にド素人と言われるのは腹がたつが、事実だ。

「明らかに加減してますね」

雄谷も言う。

「これといった一撃を出さない……こう言ってもあなたは迷っていないように見えますか？」

「え……？……あ！！確かにそうだ！！いつもなら……もう勝負は決まってるハズ……！！」

鏡が継ぎ足す。

「いくらヤツの攻撃力や防御力が高かろうが、生身。一、三発程度で落ちていくハズだ」

右から、左からと次々に攻撃が来るが、彼女は避け続けていた。右からの攻撃、素早く左、回転が加わったアッパー、乗じて回し蹴り……避ける、避ける。いかに攻撃力が高かろうが、当たらなければ意味を成さない。そうして一瞬の隙が空く。

今！！

よく伸びた蹴りが相手の脇腹にクリーンヒットした。

決まった……？

が、しかしひるむことなく攻撃を再開してくる。

「う、嘘……！！」

どうして倒れないの！！？

彼女は自分自身が自然に手加減していることに気がついていなかった。侮っている、と言う表現に近い気持ちを知らないでいたのだ。

「……無用ですよ、手加減なんて」

とんでもなく連続性のある攻撃を繰り返しながらも、律佳がそう言うてくる。

「わ、私手加減なんてしてない！！」

それらの攻撃を全てかわしながらも、彼女は答えた。

其の十一の十三

圧倒的な連撃をヒラヒラと避け続ける律佳に、もう一人の律佳は怒りに表情を歪めた。思えば初めて剥き出た感情である。

「・・・・・・・・頭に来ますね・・・・・・・・!!」

「ッ!？」

途端、ゾクツと殺気を感じ、寒気が律佳の背に走った。

避けるだけで大した攻撃もしてこない律佳に彼女は殺気を覚えたのだ。なぜなら彼女は、

今まで何のために辛い調教を乗り越えて、何度地を這って、どんなに『死んできた』か。自分を殺してきたか。自分が生きている理由、試験相手を務めるために、どれだけ自分を捨ててきたか・・・。

なのにコイツは人間と悠々と暮らして、好き放題やって、勝手に悩んで勝手に立ち治って。今もだ。私の攻撃をかわすだけで、全く真剣味が感じられない。完全になめてる。侮っている。

まさか・・・それで私が喜ぶとでも？許されるとでも？

あり得ない。一回、本当に壊れるべきだ。

「・・・・・・・・本当に壊さなくてはならないようで・・・・・・・・本気でいきます・・・・・・・・!!」

左からの気配を感じ、咄嗟律佳は二、三步素早く退いた。ブオンと律佳の眼前を拳が風を切り裂き通り過ぎた。もう少しでも遅かったら、首から上はなかっただろう。とすぐさまストレートが目の前に見えた。

「っ!!」

そのストレートは、ブシツと音をたて、左の腕を防護スーツもろとも切り裂き、勢いよく血を噴き出していた。急いで左に体をずらしたが間に合わなかったらしい。

「う、うそ・・・・・・・・!!なんで・・・・見えないよ!!」

今回もそうだったが、律佳は今までの闘いを相手の攻撃を見切り

ながら避けて来た。だが今の攻撃は、全く見えなかったのだ。

「律佳!!!」

明らかに押されてきた律佳の姿に、ようやく耕輔は“押されている”と気付いた。反応するように、鏡が無感動で「だから言っただけ」と釘を打った。

「言っただけ、最初から律佳は迷っていた、と」

「いえ・・・それだけじゃないですよ」

隣にいる雄谷がズイと進み出てきて反論した。

「怒らせていますね。彼女を」

今の彼女とは、あつちの律佳のことだ。

それを聞いて鏡の顔が怪訝に変わった。

無感動な鏡でさえ怪訝な顔をするくらいのことなのだから、それはとても重要なことなのだろう。

「怒らせている・・・?」

「ええ、どちらも誤認を重ねた結果です」

一方の律佳は慈悲のためか臆病風に吹かれたかで攻撃をしようとならない。一方はそれを侮っているのだと勘違いし怒りを覚えた・・・ざつとこんなところだろう。

「まあ、最初から律佳さんには勝ち目なんてないんですけどね」

五倍の威力に加え今までこのときの為だけに死んできた“彼女”と、今まで苦を知らずに生きてきた“彼女”とでは、もはや結果は明らかだった。

しかし、それはちょっと頭に来る言い方である。

「.....」

特に耕輔にはカチンと来ただろう。

「悪意があるわけじゃないですよ。分析結果です」

耕輔に睨まれても、雄谷は特に反応する様子もなく、冷静に返した。耕輔は一つため息をつき、祈るように手を組んで、ガラスの奥を見守った。

「・・・律佳・・・壊れるなよ・・・こんなところで・・・」

試験開始から三分経った結果が“さつき”で、またそれから三分が経ったときのことだ。

「・・・律佳・・・」

避け続けでさすがに疲れてきているのか、彼女、“うちの律佳”は、足元がフラフラになって、しかしなお避け続けていた。あれから一度も反撃していなかった事実は正直嬉しかったのだが、それゆえに壊れてくれることはとても悲しい。

ハッキリしないが、どうにか両方叶わないだろうか。

「律佳・・・頼む・・・何とか・・・!!」

いつだってあの能天気ぶりでなんとかしてきた律佳だ。

今だって、なんとか出来んだろ・・・？お前なら・・・お前はだって、他のヤツとは違う！！

そう過信したときだった。

バキリと大きく響く音がして。

それをハッキリ目にしてしまった耕輔は、一瞬何が起こったのかわからなかったが。

なんだこれ・・・。

耕輔が見たその映像は、もう一人の律佳が、プロテクトした律佳の胸の防具を右手で突き破っていた、そんな映像だった。同時だったかハッキリしないが、律佳の声も聞こえた気がする。

「ごめん、こうすけ・・・死んじゃ・・・うね・・・」

それきりうなだれて、動かない。

暗転。

「な・・・」

夢の世界から戻ってきた感覚だったが、現実にその映像は目に焼きついていて、さらには今捉えている映像であって、それは明らかに現実だった。

律佳は入場してきた自動扉の下にうなだれていたのだ。恐らく衝

撃で吹っ飛ばされたのだろう、自動扉は少しへこんでいて、おびただしい血がベタリ張り付いている。

「終わり・・・だな・・・」

鏡が耕輔の顔の隣に顔を並べ、肩を握った。もとい励ましの言葉を鏡は持たない。

「・・・落胆するな。また造ればいい」

そう簡単に造れないことは知っていたが、これが精一杯の励ましの言葉だった。さらに隣で棒立ちの雄谷が言う。

「・・・『律佳』の生命反応なし。・・・今は復元機能もないでしょうから、もう復活はあり得ませんね」

「・・・そんな・・・」

耕輔は自然と涙が溢れてきた。

正直、信じられなかったが、目の前のガラスの奥に倒れて動かない律佳を見ると・・・。

ああ、もうあいつ何も食わねえんだな・・・。
とか思うのだ。

何食べさせたくても、これからしてやりたかったことも、もう全部出来ないのか・・・。

でもやつぱり、信じられない。

あいつは・・・不死身じゃなかったのか・・・？

「律佳・・・？」

ガラスの奥にてのひらくらいの律佳が倒れているだけで、よびかけてもやはり笑顔は返ってこなかった。ただうつろに下を向いている律佳が見えるだけで・・・。

突然スピーカーが鳴った。五郎の声だ、どうやら試験終了と認識されたらしい。それはそうだ、彼女は壊されたのだから。

「終わったようですね。では、戻ってきなさい“律佳”」

それに衝動的な違和感を感じ、わけがわからないまま耕輔は思い切りそれを否定した。さすがに口には出さないが・・・。

違う・・・。と。

「はい。五郎様」

「違う……。」

「今日からはお前が耕輔様の下で働くのだぞ」

「違う……!! 違う……!!」

「はい」

「では律佳」

「お前なんか律佳じゃないッ!!」

「バシン!!」

いつのまにかガラスを叩いていた。割れんばかりに叩いたつもりだったが、“割れた”のはこつちの手だった。いや、折れたようだ。

これには鏡も雄谷も驚き、目を丸くする。

「お前は……お前はアアッ!!!!」

狂ったように叫ぶ耕輔の声を、智香も扉一枚の奥で泣きながら聞いていた。

「お前は……! 律佳を、“殺した”んだ　　!!!!」

決して壊されたんじゃない。殺されたんだ。

一つの命が消されたんだ。

もう、何も見えない。

静かな……本当に静かな静寂……。どこから機械の動く音がする。施設内の音だろう。ほんの小さな音である。こんなにもそれが響くなんて。

「ククク……」

笑い声が聞こえる。

「クククク……!!!!」

其の十一の十四

「テメエも久しいよなあ？鏡」

ギリリとその眼は光り、鏡を視界に映し出す。

「な、何故・・・何故お前が出てきた！！？」

「ハハ、鏡さんがここまで感情的になるたあ、驚きだなあ・・・そんなに珍しいか？」

言つて、「クハハ」と笑い始める。

「り、理由を・・・ワケを言え！！」

「焦んなつて・・・」

彼女はつまらなそうに耕輔を見つめると、

「“こうすけくん愛しの律佳ちゃん”が俺を呼んだんだ」

と言つた。それにビクと耕輔が反応する。恐怖のものではない、嬉しさからだ。同時に悲しさも味わっていたが・・・。

「『私は殺しても構わないけど、こうすけを悲しませないで』ってさ。泣けるよなあ」

からかっているように言うのだが、なぜかそうは聞こえない。前とは狂気が段違いで薄くなっていると感じられるのだ。理由はすぐ明らかになつた。

「・・・まー。俺も愛しちまつてるからよ。こうすけを」

・・・長い沈黙。

「・・・は」

やつこのことで押し出した耕輔の第一声がこれだった。勿論“暴走律佳”はこれに怒る。

「『は』じゃねえよ！！』『は』じゃー！！」

顔を赤くして叫んだあと、彼女はリボンがとれた長い髪の毛の頭を掻いた。

「俺たち、一つになつたんだ」

つてことは・・・耕輔が思った。

「お前と、うちの律佳とが？」

「それだけじゃないぜ。鏡。 teme の愛した律佳ちゃんも、生きてるぜ」

言わずも鏡が興奮してガラスに張り付く。

「なに！！！」

「まあ、今は今の律佳と繋がって生きてるっつーわけで、感情も今の律佳と同じなんだ」

「何言ってるかわかりませんね」

「そうだな・・・」

雄谷が割と無感動に突っ込み、耕輔もそれに同意した。

「ウツセー！！！」

「なので僕が説明しましょう」

「よろしく」

「あの律佳、まあ俗称は『裏律佳』とでもしておきましょう。裏律佳は、実は彼女の中に潜伏していたんです」

「ああ、『表律佳』にか」

「・・・ええ。それで裏律佳の意思是、現在の律佳と疎通し、同じ行動をし、同じ言動を放ち、同じ感情を感じたんです。かいつまんで言うと、彼女の中に三人が、“相容れて”

存在したわけです」

「・・・そんなことって・・・あるのか!？」

「ないです」

「・・・」

「不思議なこと・・・超常現象など、そういった分類と考えるならば、自然なことでしょう。解析は不可能ですが」

とにかく摩訶不思議なことらしい。と待てよ。つまり・・・。

「おい！裏律佳！」

「フツーに呼べバーロー」

怒られた。

「・・・律佳！！もしかして・・・律佳は・・・律佳は生きてるのか！？」

聞かれて裏律佳は戸惑ったような、言っては悪いが割に合わない顔をすると、

「・・・生きてるぜ？」

ためらいながらもそう言った。耕輔は胸を撫で下ろし、

「・・・そっか・・・」

心の中の雲が勢い良く風に流され、太陽がさんさんと青い空を照らした気分だった。

「・・・テメーよお」

「・・・ん？」

そう言えばこうやって裏律佳と異常なく会話が成立するのも不思議な気分だ。と思ってもいなかった衝撃発言が裏律佳から飛び出す。

「お前は俺のモンだからな」

え。

「え」

「覚えとけ！！バツキヤロ・・・」

・・・正直忘れたい。

この間五郎たちの音声はスピーカーカーより聞こえてこなかったが、なにやら会議がなされていたようで、ようやくスピーカーカーが鳴った。その間“あっちの律佳”は、裏律佳を

みつめ、呆然と立ち尽くしているだけだった。ただの機械に成り果てたのか、その顔からは怒り以外の感情は感じられない。

「・・・みな意見を仰いだところ、続行することですので
。では」

それだけ言ってプツンとスピーカーカーは止まった。彼らもきつこの異常にてんてこまいなのだろう。その時雄谷が思い出したように呟いた。その顔は子供らしさを帯び、笑

っているように見える。言っても微笑程度だが、もともと無表情なので、少々の表情の起伏でも目立つ。

「・・・情報分析の端末が数値異常現象で煙を上げていますよ・・・ふふふ・・・」

意味不明である。

「誰でもいい」

突然“あつちの律佳”が言った。

「・・・みんな・・・壊す」

反応して、裏律佳が拳をパキパキと言わせ、挑発的に笑う。

「上等だ！！ぶっ殺してやる！！」

にしても、もう少し語源を緩めてもらいたいものだ・・・。

其の十一の十五

互いに相手の腹を探ろうとするかと思うや否や、二人は一瞬消えた。

と思うと試験場の真ん中で殴り合っていた。

「へ、おもしろー！！やるじゃねえか！？テムエー！！」

「…殺す」

バババババツ！！

と轟音が試験場からガラス越しに聞こえるだけで、眼を凝らしていても、腕は、足は、体は、どう動いているのかも分からない。

「彼女は戦闘用ライド…」

隣にスツと立ち、雄谷は試験場を眺めながら言った。

「こちらもそうですが、彼女もコピーです。さらに五倍の力と、調教が成されています」

今更それを言っただけになるのだろうか？耕輔はそう思った。

「しかしそれが“仇”となったんですよ」

「…どうゆうことだ？」

「ふふ。分かってませんね」

んなもん分かるかと言っただけや。やりた。

「表律佳は一度死んでいる。それは理解出来ますね？」

耕輔は頷いてみせる。

「その後どうなったのかも知ってますね？再確認の為口頭でお願いします」

「過去を復唱しろってことか？」

「肯定です」

「…。律佳は、智香さんによって暴走し、その施設で射殺された。

でも再生手術で奇跡的に生き返った。けど律佳は思い人を殺してしまった記憶と、再生手術の後遺症で、精神も記憶も吹き飛んだ」

「その後どうなりましたか？」

「その後、彼女は回復することがなかった。仕方なくプログラミン
グを簡易化して、仕事を割り当て派遣した」

「見事です」

と言う割には感情の欠片もない。

「ではもう分かっていますね？」

「何が？」

「理由ですよ。僕が言った、コピー律佳の“仇”」

そういえばその為に復唱したんだっけ。

「いや、分からない・・・」

ため息をつく様子もなく雄谷は淡々と言った。

「…彼女のプログラムは簡易でした」

「…ああ」

「彼女は一度殺されています」

「…あ、ああ」

「さて。それをコピーしたならば、それは？」

「あー!!」

何故気付かなかった!? 答えは・・・簡単じゃないか!!

「さらに彼女は調教され、そのライド的に“特化”した感情を押さ
えつけています。しかしあなたの律佳は違う。あの9事件(変な学
校 9の意)によって、“恋”の感情を取り戻した彼女は、真正正
銘の傑作機なんですよ。いわば完

全体。“恋をしていた生前の律佳”も“暴走をした律佳”も“あな
たと一緒にいた律佳”も、彼女の中にあるんですから」

バグアンツ!!

その時試験場に大きな衝撃が響いた。

其の十一の十六

「…ッ…！！アリかよ！！」

突然裏律佳の左肩が爆発したのだ。

僕はそれを見て、雄谷がこう言ったのを聞き逃さなかった。

「…時限爆弾？」

「時限爆弾…だって!?!」

雄谷も少々動揺しているようだ。親指の爪を噛み始めた。

「おかしいですね…。何の時限装置だったのか分からない…。」

雄谷はじいっと裏律佳の焼け爛れた左腕を観察していた。

「…大体、爆弾が仕込んであるなんて…。気付きませんでした」

「…それはそうだが、まさか公の試験に、そんな卑怯な真似をするはずがないと思っていたから。しかし雄谷でもそれが暴けなかったとなると…。」

その時、この部屋から律佳と共に出て行った智香が扉を乱暴に開け、入ってきた。

「耕輔くん!!」

「智香さん!?!」

彼女の慌てた様子と、突然の登場に、少なからず驚いたが、今は混乱している場合ではない。

「今すぐにこの試験をやめさせましょう!!」

「なんだって!?!」

まさか智香がそんなことを言い始めるとは。

「…先のこと、まだ怒っているなら…。すいません!!私を引退にしても構いません…。で、でも律佳ちゃんが壊れるのは嫌なんです!!身勝手かもしれないけど…。」

悲しそうにぼつぼつと言う彼女は、確かに身勝手だった。耕輔に全てを十分に明らかにせず、果てに律佳のことが分かってないと耕

輔を突き放したのだ。だがしかし、耕輔もそんなに融通が利かない相手ではなかった。

「智香さんが謝ることないし、まして引退することなんてないよ・・・でも・・・」

智香が怪訝そうに耕輔の顔を窺う。

「は、はい・・・？」

「止められるのか？」

智香の顔はパアツと明るくなった。

「は、はい！きつと止められます！！」

突然俺の右腕が焼けた。

「ツ・・・！アリかよ！！」

何が起こったのかも分からなかった。

「あなたは死ぬ」

目の前にいる、クソ野郎・・・俺と同じ顔をしたやつが何もなかった顔で言いやがった。

「何をしやがったんだ！てめえ！！」

「私がおかをしたんじゃない。あなたの着ているその鎧がしたんです」

「鎧だと？」

体を見ると、前みたいなのヒラヒラの腰巻とか、青色の上着とかじゃなくて、カテエ赤い鎧に俺は包まれていた。

「俺が着たのか！？」

「違う、私たちが着せた」

俺が着たんじゃない。まーいい。んでコレの何が問題だったんだ。

「・・・で、これがどうだって言うんだ！！」
ヤツア答えた。

「あなたは本来存在しない。だから万が一、“あの人”からあなたにプログラムが切り替わったとき、その鎧が爆発するようにセットされている」

「・・・？」

正直なにいってんのかサツパリだった。えー、だから俺が表律佳と交代しちまった後は、アイツらが着せたこの鎧がこっぴみじんにぶっ壊れるってことかぁ。

「……ってテメエなんてことしゃがんだ！！外せ！！！」

「出来ない。あなたは、死ぬ」

クソツ……わからねえヤツだ。

トウルルル。

俺の中に電話みたいなイメージで呼びかけると、こうすけと今までもずっと一緒にいたあいつが受話器みたいなもんを取った。

ガチャ。

ん……？なに？

いきなりでフリーンだけど、出られるか？

え、変わったばっかじゃん？まー……出られるけど……。

わーってるって。ツレエのは。けどよー、厄介なことになっちま

ったんだよー。

なに？

お前と交代しなきゃ死ぬ。

んー……何言ってるのかわかんないんだけど。

あー、メンドくせえんだなあ。セツメーよお。んっとな。

うん。

今着てる服、実はヤベエんだ。

え？

さつき俺の右腕焼けたろ？

……ってか爆発したよね……。

……まー、俺がこのまま表へ出たまんまだと、そのうち頭も吹っ飛ぶみてえなんだわ。

えー！！やだよー！！またこうすけと遊びたいのに！！
……ってことでじゃあヨロシクな。

カチャン。

えー！ちよー！待って……！！

ツーツーツー…。

「はあ…。」

受話器を置いた頃には、先ほどまで見ていた青い試験場の中だった。

「…？」

コピー律佳が表律佳を異様な顔で見る。

「ねえ、ホントその顔、笑ってた方が似合うよ」

「…！！」

にこつと緑の眼を笑みに閉じる彼女は、正真正銘、“律佳”だった。

其の十一の十七

「あなたが…何故!? 何故出てこれるの!?!」

「なぜーって言われてもなあ…出来ちゃうもんは、出来ちゃうし」

にこつとまた笑って、律佳はコピー律佳をじっと見つめた。

「キミは私を殺したいの?」

コピー律佳は、驚きの顔をを怒りの表情に戻した。

「無論。私はその為に存在する…。あなたを殺すか…私が殺されるか…それでしかない…」

「ふーん…」

聞いてみてはみたが、実は話しの半分以上、律佳には理解出来なかった。だが、言う通りなんだろうと思いつい、

「分かった。じゃあ…あなたを倒すよ」

やはり笑ってそう答え、左手を失った状態で構えを取った。

「…あなたが、私に勝てるはずない!」

ビュン!と一瞬で顔が眼前まで飛んできた。そのとき、突然耳鳴りが表律佳を襲った。それは声にとても近い耳鳴りだった。

右だ!!

「え!?!」

瞬間的に右から来る捻りこみの拳を避けた。

え!?! え!?! なに!?! 誰!?!?

俺だあ!! バロー!! ビクビクすんじゃねえ!

どうやら裏律佳が、胸の中から、耳に訴えかけているらしい。なるほど、ごわごわとしたような声に聞こえるようだ。

…つと!?! 次下!! 足だ!

下!?!

コピー律佳から放たれる素早い蹴りに合わせ、律佳は顎を引き、フワリとそのまま宙返りした。

「!?!」

うめえじゃねえか!! アイツ動揺してやがんぜ!! 俺だったら今の、よけらんねーし。

え?

オメーは体がやわらけーんだよ。俺力テエの。

ふーん…。

つと!!?!? 次左だぜ!! しゃがみこんで、相手の右側に回りこめ!!!

え!?!? あ、うん…。

言われた通りしゃがんで、左からのパンチを避ける。さらに相手の右側に飛び込むようにして前転。

今だ!!! 回し蹴りを後頭部にたたっこめ!!!

よ、よーし!!!

やはり言われた通り、律佳は素早く体勢を安定させ、勢いよくジャンプ。その間にコピー律佳は振り返った。

ふ、振り返っちゃったよ!?!?

わーってる! そのままぶち込め!

えー!!!

言われた通り律佳は蹴りをかました。顔面ではなく、当初通り後頭部を蹴った。コピー律佳はそのまま前にのめり倒れる。

な…!!?!? なにやっつてんだよ! 顔面ぶちかましゃ殺せたのに!!!

私は殺すなんて言ってないよ…。

あまりに胸の中で裏律佳が騒ぎ立てるので、律佳はそれに気負われ、威勢を無くして言った。

はあ!!?!?

わ、私はあ… 倒すって言ったんだよ…?

ウッセー!!!

うづう…。

言い合ってるうちに、コピー律佳がムクリと体を起こした。

「お前のようなあまつたれに… 私が殺されるわけない… ゼツタイニ

コルサナイ…コロスンダ…」

「どうして…そこまで…」

殺気を帯びた目を見据え、律佳はコピー律佳の心情を探っていた。

「時限爆弾なんて装備されてない!？」

耕輔一行は、鏡や雄谷、智香によって、施設内の警備を次々と破り、律佳が装着しているプロテクターを開発した、技術班とやりに詰め掛けていた。今質問をぶつけている相手は、スピーカーから声を発したあの女性だった。

「ええ、私たちは、時限爆弾なんて装備していません…」

耕輔はさらに語気を強めた。

「じゃあ何で爆発したんだ!！」

「そ、それは…」

隣の雄谷も進み出て言う。

「僕は解析ライドです。僕の眼は、騙せませんよ」

「で、でも…本当に…」

今にも泣きそうになりながら、その女性は曖昧な返答を繰り返した。いや、本当に装備していない、というなら、たしかにこれらの回答は頷けるが…事実爆発して、それが装備されていたと言うことを雄谷が証明した。

「お待ちなさい」

いまましがた耕輔たちが突破してきた扉から、あの初老、五郎が入ってきた。

「五郎さん!！」

女性はそれにすぐろうとするが、耕輔がそこに立ちふさがった。

「真実を…話して下さい…五郎さん」

「その方が言っておられることは事実です。技術班は、あの鎧に爆弾を装備などしていません」

「なら、何故爆発したんです!！」

初老は眼を瞑り、深く物事を考えるような表情になりながら話し

た。

「…申し訳ない…あれは…コピー律佳がやったことなのです」

「えー!?!?」

その場が凍りついた。

「今データを解算してみたのですが…あのプロテクターの初期テスト記録に、コピー律佳が関与しているデータが検出されたのです」

「そんな…」

技術班の女性がそう呻いた。

「ともかく、あなたがたの意見は受諾しましょう」

智香がその意味を確認した。

「それって…つまり」

「ええ、この試験は“中断”します」

ヒュン！ブン！ブオン！ヒュヒュン！！

「はあはあはあ…」

おい！避けんじゃねえ！！また死ぬぞ！！

青い試験場の中、律佳の靴音と、コピー律佳の狂気じみた攻撃音だけが響いていた。

あれからずっと、彼女はまたコピー律佳の攻撃を“避け続けているのだ”。

出来ないよ！！私…殺すなんて…！！

律佳！！そんなこと言ってる場合じゃあねえんだ！！俺たちこのままじゃ死ぬんだ！！壊れちまうんだ！！

それでも私…だめだよ…。

こうすけともう会えなくていいのかよ!?!?

っ…こうすけ…。

そうだ！こうすけ！！あいつとまた遊びてんだろ？会いてんだろ？

…。

だったら！ここでくたばっちまったらいけねー！！

それでも…。

…は？

それでも私は…出来ないよ！！

…！？…お、おめー…オメー…！！

信じられないものを見たような声で、裏律佳は何度もそれを口走った。そして、

クソツ…狂ってるぜ…。

ぶっん。

裏律佳からの交信は途絶えた。

「はあ…はあ…はあ…」

「おまえが…死ぬんだ…私のかわりにあまえた…お前が…！」

コピー律佳の凄まじい連撃は、着実に律佳の体力を奪っていった。

「はあ…はあ…あうっ！？」

律佳は足をもつれさせ、バランスを失い、そこにコピー律佳の攻撃が容赦なく入った。

…ごめんね、こうすけ…死んじゃ…うね…。

ぶっん。

…。

「あ、あれ？」

律佳は…生きていた。

「無傷…？」

もとよりある傷が消えているわけではなかったが、コピー律佳からの最後の一撃を食らったあとは…
全く見当たらない。

あたりを見回す。前に、目の前に倒れているコピー律佳を見つけた。彼女は呼びかけてみた。

「…キミ…死んだの…？」

コピー律佳は、まるで全てが抜けきった抜け殻のようだったのだ。

「…ごめん…い…」

「え？」

彼女は、顔だけをあげて、そう言った。

「わた…し…ホン…は…あ…たのようになりたか…た…の…から

…」

その眼には、僅かながら光っているものが見えた。

「…ごめ…ん…ね」

どさり。

コピー律佳の顔が、重力に落ち…動かなくなった。

其の十一の十八

「これで、コピー律佳は止まったハズです」

五郎は慣れた手つきでキーボードを打ち終えた後、無表情でこちらに向き直った。

耕輔たちは確認のため、その部屋に備え付けてある、試験場のビデオを受信する画面から、試験場を覗く。

そこには、うつむけに倒れ手を伸ばしたままのコピー律佳と、手を伸ばされた律佳の姿が近距離で映し出されていた。下方、さらに背からの映像であったため、律佳の表情は知れないが、うなだれているように見える。

智香はその画面を食い入るように見つめ、

「律佳ちゃん……」

一言漏らした。とても悲しそうに。それが、彼女がもたらした結果だったのにも関わらず。

何故なら、試験の話しを律佳と耕輔にもちかけたのは、智香以外の誰でもなかったのだ。そんな彼女が悲しい思いをするハズがないが、それでも彼女は、悲しいのだろう。

自分に嘘について、二人に話しをもちかけたのかもしれない。この結果が予想できてもなお、これより他末路がなかったことを知っていたのかもしれない。彼女は、頭がいいから。

これ以外の選択肢は、耕輔と律佳が切り離されてしまっていたからだ。

続いて耕輔も一言呟く。

「律佳……」

思えば、彼女はここまでツライ思いを体験したことがない。殺るか、殺られるか。

二歳の赤ちゃんにそれを押し付けているようなものだった。そんな酷な事、普通出来ないし、周りもさせない。なりもしないかもし

れない。

けれど…。乗り越えて、彼女は…やっと到達したようだ。悲しみに。

今まで、長い長いユメを見ていたのだ。いい、ユメを。

こうしたい、ああしたいと思えば何でも出来た。彼女は頭が悪かったから、そのユメは小さいものだったけれど、力があつたから、その小さなユメを120%実現出来た。でも今、力があるうと、頭が良くなるうと、悲しみしかない結果をやつと招くことが出来た。

彼女はこれで知つたハズだ。人の悲しみ、憎しみ、恨み、嫉妬。何故そうなるか、ならないか。二歳にして…全てを知つたようなものである。

「これで律佳は成長しただろう。良い結果とは言わないが、それでも得たものは大きい。これからの時間を目一杯過ごすのだ…耕輔」やはり無感情な声で、鏡が言った。しかし彼にしては、珍しい言葉であつた。助言、というのだろうか。励ましも言うかもしれない。彼がそう言う他人へのプラスになる言葉を発した数は、驚くほど少ない。

「ああ、分かつてる…」

俺だつて、後悔したんだ。何故律佳の気持ちを汲み取つてやれなかったのかと。どうして正直に、彼女を思えなかったのかと…。

「耕輔、気に止むことはないだろう」

鏡が耕輔の心内を読んだように言った。

「お前は…。そう。優しい。だが自分に厳しい所がある。それを若干緩めてやればいいだけの話だ」

彼はじつ耕輔の眼を見つめ、

「律佳とともに成長しろ。耕輔」

楔を心臓にうちつけられたような気分だつた。だが、それは同時に優しい気持ちにもさせてくれた。

律佳とともに…

それがそう思わせ、同時に衝撃も与えたのかもしれない。

黙ってそれらを見つめていた無感動少年、雄谷は、画面から視線を五郎に振り返した。

「…五郎さん。データは」

突然の問いにも関わらず、五郎は慌てずに、

「…とれませんでしたな」

と笑ってみせた。その愛想笑いに愛想で返そうともせず彼は続ける。

「そうですね。それは残念ですね」

「…ええ」

「……」

「……」

沈黙。そして、

「条件があります」

やぶからぼうに出たその言葉と、空気から、五郎は“データをやるから、律佳を残せ”と言う雰囲気を感じて、

「なんでしょうかな？」

と分からないフリをし、答えた。しかし雄谷には分かっていたようだ。

「お察しの通り。律佳さん……そして智香さん。僕と鏡を耕輔宅に残ることをお許し下さい」

まさかこれらを仕組んだ張本人、智香まで残してくれと言うとは。

初老は目を真ん丸くして驚いたが、やはり温和に笑って、

「わかりました。出来る限りそうさせて頂きます」

と、答えたのだった。

其の十一の十九

戦闘：やっと試験が終わった。

帰りは、行きのように送ってもらえるわけではないらしく、色々
と“後片付け”があるということで、五郎から頭を下げられ、今、
電車で揺られ帰宅途中だ。

時間は午後5：30といったところで、学生たちが帰宅する時間
と合致してしまった。けれど、律佳と智香は制服、耕輔は私服だが、
まあ、不自然ではないはずだ。ただ鏡だけが不気味に目立っている。
何せデカい上に変な服だからだ。しかも美形（それはあまり関係な
い）。雄谷と鈴は、小学四年生らしくもなく、キチツと体勢を整え
座っているのだった。

「ねえ、こうすけ……」

耕輔の肩に頭を置き憔悴し切った様子の律佳が語りかけた。

「ん？」

「私……あれでよかったのかな……」

あれでよかったのか……ということは、先の試験場の話しだろう。
これを聞いてくると言うことは恐らく、律佳はあの選択を後悔し
ているのだ。あの選択とは、敢えて選択せず、闘いを正当に行わな
かったこと……。避け続けたことである。

彼女、コピー律佳の末路は、本当にアレで良かったのか……本当は
やられるべきじゃなかったのか、自分の手で止めを刺すべきではな
かったのか……律佳だけがその時、それらの選択肢を選べた。

「……良かったんじゃないかな……」

僕は答えた。

「……」

「少なくともお前は、彼女を殺さなかった。僕はそれを、偉いと思
うよ。すっごくね」

ぎこちなく、その大きな眼を耕輔の眼にじっと集中させる律佳。

「どうして？」

「お前は嫌だったんだろ？彼女を痛めつけるのは」

「うん…」

傷つけたくなかった・・・そう理解していい。

「けど、あのコ、本当はとっても痛かったと思うの…」

「…？」

予想外の言葉だった。

「何が、だ？」

「うん…心がね…」

心、か…。

「どう痛かったと思ってるんだ？」

律佳は手をもじもじさせ、うつむいた。

「よくわかんない…けど、うんと・・・結局あのコは…何にも出来なかつたんだよ…？」

「どうゆうことだ？」

「あのコは、“どっちかが倒されるまで続く”そう言ってたし、このときの為だけに、死んできたとも言ってた…」

それは鏡からも聞いたことだった。あいつは、あのときの為だけに、生きていた・・・つまり、その前は死んでいたってことだ。自分を棄てて。

「私はね、きつと、どっちかじゃないとダメだと思うの。やるか、やられるか…痛い思いはするけど…あのコの心の痛みは、和らいだんじゃないかな…」

「……」

そういえば、彼女はこの律佳を模して作られた律佳だった。と言うことは、彼女のことは、一番律佳が分かっているのかもしれない。そう思い、そうかもしれないと、発言しようとした時、鏡が隣から無感情な言葉を投げかけてきた。

「下らんことは考えるな。ヤツは“死んだ”」

「え…」

律佳が悲しそうに顔を歪めた。

「鏡…いくらなんでもそんな言い方ないだろ？」

無感情な鏡でも、さすがにそれは酷い。そう思った。が、語気を強めることも無く、彼は続けた。

「寝ぼけたことを言っているから注意してやったただけだ。お前たちは、そうやってヤツを慰めている気なのか？それとも、お前たち自身心の狭さを、力の無さを隠しただけか？」

まさに凶星だったのかもしれない。

「な…」

「そうだろう？そんなことより、この先のことを考える。お前たちは生きた。知った物もあった。なのにごちゃごちゃ過ぎたことを言うな。今更悩んでも、もう遅い」

彼の言うことはいつても正論である。普通なら自重するところをズバズバと見境もなく言うのだ。感情はこもっていないはずなのに、その言葉らはいつても一喜一憂させる。

「そうだな…その通りだ…」

耕輔は開き直り、うんうんと頷いて見せた。

「律佳、アイツは…そう、死んだ“かも”しれない。けど、どこかでまた生きてるかもしれない。じゃあ僕らは、また会ったとき笑顔でいられるようにいよう？絶対に悲劇を繰り返さない為にも、強くならなくちゃ」

そう言っつて律佳に笑顔を見せてやった。が、彼女の表情は固いまま。

「…まだあるのか？心配なこと」

「あ、うん…あの…」

何かを言おうとし、律佳は口ごもった。

「どうした、言えよ？」

「あ…うん…いや、あの、なんでもないの」

一目しただけで分かる作り笑顔を見ると、彼女は手をヒラヒラと、眼前で横に振った。

「ホント、なんでもないの。うん！そっだよね！強くならなきゃ！」
そしていつもの笑顔を見せてくれた。今度こそ本当に笑ってくれた様だ。

「ああ、そうさ」

やっと耕輔も、心の霧が晴れたようだった。隣で鏡も、その様子を鼻で笑った。

本当は…。

本当は、こうすけに言いたかった…。

けど、言えなかったんだ。あれは、こうすけにじゃなく…私だけに言った言葉だったから…。

あのコが死ぬ間際。こんなことを言ってたんだよ？こうすけ…。

「わたしはあなたになりたかった」

それでもつよくならなきゃなの…？

あのコは…私に…生まれたかったのに…。

其の十二

次の日から彼女は別人かと思うほど変わった。

いつもギリギリまで寝ていたのに、早起きになったし、夜に鈴を抱き枕にすることもなくなった。前はよくネズミの時計を握りつぶしたものだが、今は加減が出来るのか、そういったこともなくなった。朝にはいつものように鏡と雄谷が朝食を作っているが、今までの彼女ならそれに感謝もせずさも当然と食べていたのだが、今は「ありがとう」、と鏡、雄谷に言ってから、「頂きます」とキチンと手を合わせてから食べるようになったのだ。

学校に遅れるぞと発破をかけても時間に余裕がある場合なら「まだ時間あるよ?」と眼を丸くして言うし、通学中、隣の隣の番犬、ドク太の前を通るとき、昔ならにらめっこになっていたものだが、今は頭を撫でてやって、にっこり微笑み「行って来ます」という始末。

学校でもみんなに挨拶をするようになったし、授業中眠ることもノートにラクガキすることもなくなった(ただうつらうつらしていることはある)。休み時間は無闇に人を殴ること、蹴ることをせず、ただ渡された宿題と、今まで眠ってきた分の授業を勉強していた。大そうみんなに不思議がられ、

「あれ本当に律佳なのか?改造したのかよ?」

なんて言う質問が殺到した。

「違うよ、律佳は変わっただけ。自発的にね」

「へ〜…」

そう答えてもなお不思議がるのは仕方が無いことだろう。なにせ変わりすぎなのだ。五ヶ月間一緒に暮らした耕輔でさえ、違和感を感じるほどに。

生徒の中では、律佳の変化に一番雪也が冷静を保っているように見えた。こいつは鈴に父親ずらするといふ奇妙なこともやってのけ

るくらいだから、それも領けるかもしれない。

「律佳ちゃん、変わってよかったな」

雪也は笑顔で言ってきた。

「ああ、器物損壊も少なくなったし、傷害事件も少なくなったしな」
突然雪也の顔が怪訝顔になり、

「違うだろ？皆無じゃねーか」

「…まあ…」

彼の言うとおり、ここ一週間、律佳は傷害事件と器物損壊を起こしていなかった。それはもう、気持ち悪いほどにゼロだ。

「あーでも。国からの補助なくなったんだって？」

「・・・残念ながらな」

実はそうであった。何故彼が知っているかは知らないが（恐らく智香に聞いたのだろう）、僕はもう国からの補助を受けていない。五郎さんが必死に頼み込んで置いてもらった身だ、そこまで欲さないし、恐らくこの“ライド駐留”は本来禁止行為だ。

怪物がいなくなった以上、ライドはそこにはならない。

ライドがいる、イコールそれは、平和を乱していると言う象徴であり、また危険な区域だと思われる象徴なのだ。

ライド自身もいつ壊れるか、暴走するか分からない。

このようなことを踏まえ、さらに資金を補助しろと言うのは馬鹿が言うことだ。

「最近律佳が定量しか食わないから、そんなにお金かかんないんだけどね」

前から思うと、もっと食べてもいいくらい律佳の食い扶持は激減した。

「そっか。ま、良かったんじゃない？丸くはねえケド、万事OKなわけだし」

「そうだな…」

僕はにっこり笑って見せた。それを見て雪也もにっこり笑った。

「おっっ！じゃなー」

唯一律佳が変わらなかつたのは、下校中だつた。

例によつて智香はいつも下校が遅いので、帰りはいつも律佳と二人きり。彼女は突然今まで話していた世間話をやめ、鞆から教科書を取り出し、ページをペラペラとめくつて、32ページの左上を指さした。

「ここわかないだよ、こうすけ」

いつもと同じ下校とは言つたものの、内容は若干変わった。が、律佳の性格やら喋り方はなに一つ変わつていなかつたのだ。

「えつと。ああ、これは確か…」

律佳はとてつもなくがんばっている。それは一番ライドの近くにいる耕輔が分かつている。だが、今ひとつその理由が分からなかつた。

「へ〜！ そうなんだ！ ありがと！」

にこつといつものように笑つて、律佳は鞆に教科書を入れる。そんな彼女を見ながら、律佳は何の為に

“生きよう”としていいのか考えてみた。

其の十二の二

やはり、試験のことで変わったのだろう。と言うか、それ以外に変わる機会などない。それに、変わり始めたのは丁度試験が終わった翌日からだった。

そうやって的を絞ることが出来るのに、今ひとつ…彼女の“生きよう”とする理由が分からないのは何故だろう。

ある日の雨の強い金曜日だった。いつも突然の通り雨に降られ、僕らは急いで家へ帰っている途中、律佳は捨て猫を見つけてしまい、自分の方が風邪を引くかもしれないのに、「この子風邪ひくかもだから・・・」と抱きかかえて家に連れてきたのだった。

そして今。家の中で、雨で濡れそぼってしまった捨て猫を、律佳は丁寧に拭いてやっているところだった。僕はその様子をボーツとして眺め、ただただ考えていた。

「おい、耕輔」

隣の椅子に座っていた鏡が、愛想のカケラもない声で僕を呼んだ。
「なに？」

「何を悩んでいる」

凶星：だったのだが、今回そんなにドキリとしなかった。鏡ならそれがわかるだろう、そうであるに決まっていますとすでに覚悟していたからかもしれない。

「決まってるだろ…」

「…律佳の変化・・・いや、何故存在しようとするか、だな？」

「そう…」

存在しようとするか、もとい、なぜ生きようとしているのか。この“現代社会”に。

今言う“生きる”とは、社会的にどう存在しているかを言う。勉強強すとか、みんなに献身的だとかと言うのは、全て社会的に生き

ることに繋がっていくのだ。

しかし彼女はライドであって、人間ではない。それは本人もよく分かっている。しかし、だからこそ、何故あえて存在しようとするのか分からないのだ。ライドは、社会的に活躍する場が皆無なのだ。怪物退治以外は。

「フム…。ジツは俺も…分かり兼ねている所なんだ」

これは…驚いた。

「鏡も？」

「ああ。わからない。だが、分からない理由なら、分かるぞ」

「？ 言ってみてくれよ」

彼は憂鬱そうな顔をして、語り始めた。

「俺が分からない理由。カンタンだ。俺はライドであって、それ以外のものではないのだ」

耕輔は黙ってその話を聞く。

「律佳はライド以外の者になろうとしている」

「ライド以外…？」

「そう。察しはつくだろう」

耕輔は考える素振りをし、

「…人間か？」

おもむろに鏡が頷く。

「そうだ」

「……」

彼はため息のようなものをつき、俯いた。

「不甲斐ない。それ以外は何も分からないんだ」

こんなに悲しそうな鏡、初めて見るな…。

「いや、いいよ。ちょっとだけ、分かったし」

「そうか」

それでも彼は力なく床を眺めるだけだった。

その頃には、律佳はその捨て猫に餌をやって、頭を撫で撫でしていた。

そこに、“トットトット”ととても静かにフローリングを歩く音が近づいてきた。雄谷だ。

「僕にも、律佳の心理状態は、理解できません」

いきなり何を言うのかと思えば、唐突に本題へ入ってきた。

「はあ」

「しかし…」

「？」

「そもそも。ライドに心理状態なんてものがある時点で、オカシイんですよ」

其の十二の三

「つて、つまりどういうことだ？」

耕輔がそう尋ねると、雄谷は淡々と答えた。

「カンタンなことですよ。人間は感情を持ちますが、ライドはそうじゃない。そういった感情というものは、切除されているんです」
なるほど。確かにライドが感情を持っているなんて、聞いたことがない。だがそうになると、鏡が昔、律佳を愛していた、というのはどういうことだ。

「けど、鏡は昔の律佳が好きだったんだろ？」

鏡は相も変わらず無感情、無感動で答えた。

「それはそうゆう設定だったのだ。俺が律佳を好きになることは、最初から決まっていた」

そんなもの悲しい恋もあったもんだな、と思ったが、その答えでもう一つ疑問が生まれた。

「でも、それでも報復しようと思ったんだろ？ 律佳を殺した、律佳に」

それを言われても、鏡は全く動揺しなかった。

「ああ。だがしかし、それは“恋”への継続であって、特別なことではない。俺は律佳を愛しているから、復讐しようとしただけだ。律佳を殺した“律佳”にな」

理屈は分からないが、なんとなく、分かった気がする。つまり人間の矛盾と同じことなのだ。

「感情プログラムは、一つのことに対してだけ特化し、そしてそれはすでに完成していた。しかし、総合的な感情を持った、人間のよくなライドなどいかなかったのだ」

「つまり？」

「つまり律佳さんは…プログラムの書き換えを…悪く言えば、バグ状態にあります。よく言えば、生態系の進化のような・・・」

「しかし、やつは生物ではない」

雄谷と鏡がそう続けた。

「だからって、どうだというのだ。大体壊れているとかバグが起こっているからといって、律佳は決してオカシイことをしているわけではない。むしろ、善のほうへ向かっているように見える。それをこの二人はただ、壊れているとかバグだからとかで片付けるのか。でもだからって、どうなんだよ？ライドにバグがある。それで進化していつている。いいんじゃないか？このままでも」

そう言うと、二人は黙り込んだ。やはりバグだろうと何だろうと、“異常”と言う以外の異常は観測出来ないようだ。

数秒後、ようやく雄谷が口を開いた。

「…。確かに、いいことなのかもしれませんが、けれど、異常と言う事には変わりはないんです。彼女は、プログラムによって動いている。それを彼女は今、毎度書き換えて、書き換えて、動いているんです」
「だから、それがどうだったんだ？」

「…いつか、限界が来ないかと…。危惧しています」

言い残すと、雄谷は耕輔の横を通り過ぎ、玄関を出ていった。

「…限界か…」

何故生きようとするかの理由は未だ分からない。けど、分からないことは考えても仕方ない。とりあえず、その“限界”とやらは、あの人に聞くのが一番だろう。律佳が一番大切に思っている、あの人に。

其の十二の四

「智香さん」

「何のお話でしょうか？」

次の日の朝、律佳にはなんとか一人で学校へいつてもらい、僕と智香さんだけで登校するように仕向けた。というのも、智香に“限界”のことを聞こうと思ったからである。驚いたことに、智香さんと呼んだだけで、話しを切り出そうとしていることに感じたらしい。だが耕輔は驚かない。智香や鏡は、並外れた思考力の持ち主だからだ。

「律佳が限界に近付いているらしいんです…気付いてましたか？」

ピクンと彼女の肩が揺れた。ちよつと表情も暗くなったように思う。彼女にとつて、律佳はとても大切な存在。例え事実でも、マイナスのある話は受け入れたくないのだろう。

「……ねえ耕輔くん。人には寿命がありますよね」

突然そう振ってきた。話しの根幹を突く話し、なのかは分からないが、智香が無駄なことを答えるはずがない。耕輔は頷いた。

「ええ。あります」

「ライドも…そうなんですよ」

「そうですね」

「…ただ…律佳ちゃんはその…無理をしています…ですから…内部から少しずつ“壊れて”いつているんです。壊れるのは、通常より速いでしょう…」

「…でもそれは…無理をしているからでしょうか？それをなんとかすればいいんじゃない？」

コクンと彼女は頷いた。大分表情が暗い。

「でも、制止することは出来ません…ライドには“生存意義”がない。それくらい、律佳ちゃんも分かっています。けれど、それでも律佳ちゃんはそれに歯向かおうとしています。何か、特別な理由が

あるようで…そこまで分かっている、無理をしているんですから、やはり制止は不可でしょう…」

考えるようにして言葉を繰り出す智香も、どうやらその理由とやらに届いていないらしい。そして制止は不可。智香が念を押して言うのだから、きっとその通りなのだろう…。

「雄谷は生態系の進化だつて言つてましたけど？」

途端に、くすつと笑われてしまった。

「彼は物事を深く考えすぎているだけ。確かにその表現は間違つてない。彼的には、ね」

雄谷の自己完結を上手く表現すれば、“生態系の進化”も通るということが。

「でもそれは違う。ライドは進化なんて、しない」

彼女はえらく冷酷に言い放った。

「機械は各々の考えで動きますか？人形は心を持っていますか？断言します。機械も人形も、そんなものは持ちえませんが」

真剣に話しているのか、それとも落胆の意味を否定したい自主規制による声色なのか。その声はとても通っていた。

「残念ながら。律佳ちゃんも…ただ三人のプログラムを持ち合わせているから、ああゆう風な変わり方をしたのかと…」

最後は悲しそうに締めると、それ以上智香は口を開こうとしなかった。

三人の、人格：裏律佳、過去律佳、表律佳。この三人のことだろう。そして、彼女は決して進化したわけではなく、自分のプログラムを書き換えているだけに過ぎない。三人の思考パターンが合わさる事により、それが可能となったのだろう。

それは、分かった。分かりたくはなかったけど。

しかしやはり、律佳が変わろうとした理由については…答えが出なかった。

限界については…止められないらしい…。

其の十三

それからいくつかの日を越えた後に、大惨事が起こる。まさか、律佳があんなことをするなんて思わなかった。俺はその日のことを、“律佳の壊れた日”と、この日記に書き込んだ。…やっぱり、ライドって、“殺戮兵器”なのだろうか？その事件は俺に、思わずもそう思わせた。

その話しの前に、起こった出来事を話していこう。とても懐かしい…たわいもない、日常の話しを。

その日は特にとても気持ちの良い秋の季節だった。

「あれ？あれって雄谷じゃないか？」

「ホントだー。なにやってるんだろ？」

僕は律佳と共に守かみ盥公園へやってきていた。その砂場に一人、とても目立った白髪の少年、雄谷がいたのだ。無表情で突っ立っているその姿は、四年生と言う形容と、砂場と言うキーワードは似つかない。

「ぐすつ…ぐすつ…」

「？」

どこからか泣き声が聞こえてきた。視線を泣き声の主に移すと、そこはブランコの板の上。よくよく見ると、雄谷はその少年をじっと見据えているようだ。

そのうち雄谷は、ずけずけとその少年に歩み寄り（砂場にやっと完成した大きなお城を思わずも破壊しながら）、新たな泣き声にも目もくれず、彼はその少年の前に立った。

「ぐすつ…つ…」

「いつまで泣いてるんです」

あまりに無感動な声は、少年の鳴き声と表情を凍り付かせた。それはそうだろう、突然無感動に、いつまで泣いてるんだ、などと言

われては、少年でなくとも凍りつくだろう。

「……だって、ゆいちゃんに嫌われちゃったんだもん……」
「新しい靴下を汚してしまったから……でしょう？」

お前いつから見ただよ！と突っ込みたいが、ここはあえて見守ろう。どうやらその“ゆいちゃん”とやらの新しい靴下に、この少年は泥を被せてしまったようだ。

「うん……」

「そんな少女、たかが器が知れています。悲しみに暮れる事などありません」

そんなの小学四年相手に通じるかつーの！！と頭をポカリやりたいところだが、ここは敢えて聞き逃そう……。案の定、言われた少年は首を捻っていた。

「あなたは彼女が好きだった。そうでしょう」

「えっ……」

図星のようで、少年の肌が一気に赤くなった。

「しかし、僕はこう言ってるんです。あの程度で“キライ”等と人を蔑むように言って泣き喚く少女など、相手にしない方がいい」

だから！何言ってるか全ツ然わかんねえし！さらに小4の女の子にとつてはだなぁーっ！！？と殴つてやりたいが、ここは、何も言つまい。唇をぎゅうと噛み締めて、我慢だ。

「……」

「さ。もういいでしょう。無駄なことで悩んでないで、お家へ帰りなさい」

その少年は下を向いて、なにやら唇だけが動いていた。雄谷にはその行動が不可解らしく……しかし表情は一向にして変わらない。

「？なにをしているんですか」

そう言った途端、涙に濡れた少年の怒りの顔が雄谷を見上げた。

「お前になにがわかるってんだ！！」

「？」

次の瞬間、雄谷はその少年に投げ倒された。両手で肩を掴まれ、

横に投げられたという具合である。雄谷が倒れているその間に。少年は服の袖で頬を拭いながら走っていった。

何を言われたか、何が起こったかすらよく分からないらしい雄谷は、ゆっくり立ち上がって、頬に出来た傷から出た血を拭こうとせず、ぼうつとその少年の背を眺めていた。

「なにやっつてんだあいつは…」

「ホントにね」

僕と律佳は、その様子をどよんとした空気と顔で眺め終わった後、

“山へどんぐりと松ぼっくり探し”の散策”を再開することにした。

これであいつにも人の気持ちがあつたかな？

其の十三の二

と、思ったのだが、結局雄谷は、“意味が分からない”ままその出来事を自己完結して終わらせてしまっていた。

人の気持ちなんて知ったこっちゃない。僕にはそう見えた。

「……」

そして今、微妙にイラついているのか、視点定まった様子で机の上を無表情に眺める雄谷を、椅子に座って耕輔は眺めていた。

「…鈴さん」

「なあに？」

雄谷が隣に座っている鈴に声をかけた。彼女は今裁縫中で、人形をつくっているようだ。

「聞いてください。実はおとといに、こんなことがありました」

意外にも雄谷は、まだ自己完結していないらしく、心内あの少年の行動にクエスチョンを据え付けていたようだ。彼はおずおずとあの出来事を語り始めた。途中鈴が疑問詞を挟んだ。

「で、そのコはどうなったの？」

「ええ、僕を投げ捨てて行ってしまいました…」

「あら…ケガはなかったの？」

「頬に擦り傷が。しかしそれは問題ではない。何故彼は僕にあんなことを…」

「うーん…」

関係はないが、歳が同じなのに、その様子はまるで子供とその母親のようなやりとりだった。自然と笑みがこぼれてしまう。

「うーん…」

聞き終えた鈴は、裁縫をやめて、考え始めた。いや、彼女には最初から答えが見つかっているハズだ。ただ、それをストレートに言っているのか悩んでいるのだ。

数秒後、腹を決めたようだ。

「…多分、それは雄谷君が悪いよ」

雄谷の眼が少し大きく広がる。

「僕がですか・・・？何故」

雄谷からしてみれば、励ましたつもりだったのだろう。しかしそれは無用であり、しかも相手を傷つけてしまったのだ。雄谷にはそれが分かってない。

この内容を、鈴は雄谷に話した。彼はいつもの顔になり、何を考えているか分からない顔になった。

「…そうですね。よく分かりました」

彼はそう言うと、目の前に置かれていたコーヒーを手に取った。

当然飲むのだろうと思う。しかし

「あなたなら怒りませんか？」

「え　？」

次の瞬間、なんと人形にコーヒーをドボドボとかけはじめたのだ。

一瞬、見ている耕輔も鈴も混乱した。

何をしているんだ？と。

「　　ちよ…やめてっ！！」

バシツと雄谷の手を払い、反動でコーヒーカップがフローリングの床に落ち、残りのコーヒーが床にぶちまけられる。とは言ったものの、実際あとわずかしこコーヒーはカップに残っていなかった。鈴が一生懸命つくった人形に、それほどコーヒーが注がれたのだ。

人形にコーヒーが吸収されてもなお、机からコーヒーが滴り落ちるほどじつ。

「あ、あああ…」

今にも泣きそうな顔で、鈴はコーヒーでずくずくになった人形を持った。つまさきからコーヒーが滴り落ちている。

それを見てもなお平気そうな雄谷が、ズケズケと言った。

「あなたなら…こんなことで怒りませんか？鈴さんはそんなに器の小さい人じゃ　　」
ばちん。

乾いた音が響いた。

鈴が雄谷をビンタしたのだ。

「…つく…ひつ…うく…ゆうやくんなんて…あんななんてきらい！」

ぼろぼろと涙を零しながら、鈴は玄関を飛び出していった。

……………。

その場は、沈黙した。机の上から、重力に任せてコーヒーが落ちる音しか聞こえなくなっていった。

「……………」

「なあ、雄谷」

「…はい」

「分かったか？」

「…ええ、とてもよく」

時計の音も聞こえてきた。

コツチコツチコツチ。

もうすぐ七時を回ろうとしている。

其の十三の三

その時間帯に10歳の子供を、しかも女の子を家から一人で出すのはマズかった。だが、引き止めることも出来なかった。鈴が家から飛び出したくなった気持ちは、よくわかるから。

「鈴ちゃん!!!」

耕輔は夜に静まった住宅街に叫んだ。鈴が出て行ってからもう30分になる。何かあったのではないかと、だんだん不安になってくるのは自然なことだろうが…。

そこへ青ざめた雄谷が走ってきた。顔には玉のような汗がいくつも伝っている。

「鈴さんは…見つかっていないようですね…!!」

珍しく、雄谷が取り乱してそう言って、続けた。

「すみません…。僕のせいです…」

悔しそうに周囲を睨みつけ、頭をあっちへこっちへ振る。

彼が悪いのは事実だ。どんな理由があつたにせよ、人を傷つけることは良いことでない。もし仮にそのせいで鈴になにかあつたら。

雄谷は罪人も同然である。それは止められなかった耕輔も同じこと。

だが耕輔には、雄谷の行動に理解の余地があつた。彼に悪気は決してなかつたのだ。ただ、

「いいんだ…ただお前が過信すぎたんだよ。多分な」

過信。彼は鈴を信じて、あんな酷いことをしたのだ。自分にとつて特別な鈴は、普通の人間ではないのだと、そう信じて疑わなかったのだろう。結果はこうなってしまったが、結局雄谷はそれを認めず、やはり鈴を過信している。だから彼は鈴を必死で探している。だが決してそれだけでなく、それでも鈴は鈴なんだと言う感情が入り混じって。多分雄谷自身も、気持ちの整理ができず、ワケが分からなくなっていることだろう。

客観的に言い換えるとそれは、

「それに、まだ子供だしな。お前も」
「っ……」

言われて雄谷は、恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせ、肘を真っ直ぐ下に伸ばして握りこぶしをぎゅっと握った。

お、ワリと可愛いかも。

耕輔はその表情と挙動を見てそう思った。言っておくがそういうシユミはない。誰が見てもそれは可愛い、と見受けられるだろう。

「それより、鈴さんを探しましょう!!」

恥ずかしさを隠す為になざと大げさに言っただけで走っていく雄谷もまた愛らしかった。やはりライドとはいえ、子供のようだ。さらに言うなれば、人間よりも可愛い気がする。

「耕輔くっっ!!」

次に律佳が走ってきた。律佳も鈴探しを手伝ってくれていたのだ。因みに鏡もドク太も智香も探してくれている。

「どうだ？鈴ちゃんの居場所、掴めたか？」

「それが……」

彼女は下を向いて言い淀んだ。

「どうした……？」

……嫌な予感がする。

「うん……あの、鈴ちゃんね……。車で……連れ去られちゃったみたい……」
「なんだって!!?!?」

当たって欲しくない予想ほどの中してしまうものだ。律佳はおずおずと続けた。

「鈴ちゃんの足音とにおいを嗅いで捜してたんだけど……途中でゴムのにおいになって……」

「なんてこった……!!」

真っ白の頭が、さらに白くなっていくのを感じた。……まだ、死んでいないだけマシと思えば、いいのだろうが……。

「どうする？耕輔……」

どうしようか……。とにかく、一刻を争う事態である。が、一

度みなを呼び集めた方がいいかもしれない。相手は危険な人物かもしれないし…。それにみんなも何か有力な情報を掴んでいるかもしれない。

「律佳、みんなを呼んできてくれ！守盞公園に！僕は先いつとくから！急いでくれ！」

律佳はうん、と力強く頷き、暗い闇に跳んだ。

7時35分。守盞公園。

「みんないるな？」

耕輔が問い、鏡が答えた。

「いるぞ」

続いて智香。

「ええ」

続いて律佳。

「いるよっ！」

続いてドク太。

「ワウンツッ!!」

続いて雄谷。

……。

「…雄谷はどうした？」

耕輔が聞くと、みな首を振った。

「さあ…」

「俺も知らんな…」

「うーん…」

「わんっ！」

？…まさか…！？

7時40分。???

う…？

息ぐるしさに眼が覚めて、ゆっくり眼を開けると、そこは暗闇の、どこかだった。薄暗い電灯だけが消えたりついたりしている。

ここはどこ…？なんで口に布が…

…探して歩いていた時のことしか覚えていない。

…縛られてる…？

後ろ手にロープでぐるぐる巻きにされた感触がある。

…だ。明日までに用意しろ。でないとお前の…。

小さな小さな変な声が、暗闇から聞こえてきた。それは本当に変な声であった。まるで変声機を使ったような。

……！！！！

ここまで来てやっと分かった、つまり…！！

其の十三の四

7時54分。街中の道路。

「律佳！まだみつからないのか！？」

耕輔は、ビルや住宅、車のライトなどに照らされた道を走りながら、汗だくになった耳に、律佳と繋がった携帯電話を押し当て、答えを急かした。

「こうすけ、ごめん…！まだ見つからないの！」

「くそっ…！」

先ほどから、律佳に三分ごと電話しては、彼女に悪態をついていた。

彼女の結果に期待していたのに、全く成果があがらずイライラしていたのだ。

「ごめんね…私、役立たずで…」

もの悲しく答える律佳に、耕輔はようやく気付いた。何て酷いことを言ってしまったのかと。

確かに彼女の性能はとてつもなく高いが、だからといって、彼女はばかりに責任を押し付けていいはずがない。

「あ…いや、そんなつもりじゃ…」

「いいよ…じゃあとで」

彼が言い終わる前に、彼女は電源を切ってしまった。

「……………」

切れた携帯電話を見つめながら、溢れた光が照る町のなか、耕輔は足を止めてしまった。

「警察へ連絡をしたか」

「ええ。一応。けれど期待は禁物です。さらに言つなれば…搜索は中止してもらったほうがいいでしょう」

それぞれに暗闇の細い路地裏を走りながら、鏡と智香は体に内蔵

されている無線機で連絡をとっていた。鏡は智香の言葉に一つも驚きを見せず聞き返した。

「何故だ」

「この事件、どうも人間の手で起こされたとは思えないんです。ライドによる仕業でしょう…。そうなれば、警察の手に負えるわけないでしょう？それにそうだとしたら、警察のかたたちが危険です」

「犯人がライドである、その根拠は。その理由は」

根拠はともかくとして、理由、というのはライドが何故そのような事件を起こしたか？であろう。普通ライドは、防衛兵器でしかない。それが何故このような事件を起こしているかを聞いてきているのだ。根拠がないと理由云々もないのだが、智香は勿論根拠があった。

「根拠は…そう。鈴ちゃんを狙ったことです」

「鈴を…？だがそれは、有り得ることではないのか？」

10歳の女の子を連れ去る事件など、人間でもやりそうなことだが何故ライドと言う根拠になるのか。

「ええ…。けれど、決定的なのが、その場所なんです」

「場所？」

「ええ。律佳ちゃんが言うに、鈴さんの最後の匂いがしたのは、私たちの家の近くだったんですよ」

「だがそれでは確証にはならんぞ」

鈴を連れ去ったのは家の近くだった…。それだけではライドが犯人だと断定など出来ない。

「いいえ。なるんです」

「？」

智香はゆっくり息を吸い込むと、語り始めた。

「鈴さんは、あまり耕輔さんの家から外出したことがなかった為、今日道に迷ってしまったんです。匂いによると、何度も同じところを歩いていたらしいです…。事件のキツカケはここからです。いいですか？私たちはかなり“名が知れて”います。高校での律佳ち

やんのライドとしての活躍に、私が“情報色彩風薫”を作ったこととしても有名で、さらにあなたたちが私たちの家に住んでいるというところもかなり話題になっている。そしてそれは、つまり“危険な区域”として、世間から見られていることになります。周りの方々や、町内の方々は、私たちのことをちゃんと理解して下さっています。外の方はどうでしょうか？危険だと思っ区域にわざわざ来ますか？それも、夜に。私たちの家の付近に「

「……！！」

「そうです。人間の仕業とは・・・非常に考えにくいんですよ。なので・・・今回は、私たちで何とかしましょう。警察はアテになりません。逆に被害が出るかもしれませんね・・・」

智香の言い分は分かった。だが、それでは、命令に忠実なライドが事件を起こした理由にはなっていない。

「待て。それでは、何故ライドが事件を起こしたかの答えになっていない。あくまで状況証拠じゃないか」

「いいえ、人間の手であるとは思えません」

「どうしてだ？」

すると智香は初めて言いよんだ。

「……覚えがあるんです。これは、私のミスです」

やっと話すも、それでも言いにくそうだった。鏡はその様子に一切気を使わず、ずけずけと聞く。

「どういうことだ」

「またも言いよどむ智香。だが今度は答えることはしなかった。」

「……すいません。捜索に戻ります。では」

「おい、待」

「ザザッ……」

無線は、ノイズだけを受信していた。鏡は仕方なく電源を切る。ピッ。

「……一体何をしたというんだ」

一人呟き、彼は空に浮かんだ三日月を眺めて、また闇にまぎれて

走り出した。

其の十三の五

抜かった…!!

雄谷は闇となった街を走り続けていた。現在8時16分。

僕のせいだ。僕のせいで鈴さんが危険な目に…!

かつてここまで“こみ上げるもの”をひしとこの体に感じたことがあるうか。理由は分からないが、とにかく体が火照っているように感じるし、走り続けなければ死んでしまいそうになる。どうしてこんなものを感じてしまうのだろう…。

故障かとも思った。けれど自動故障発見システムが搭載されている雄谷に、それはなかった。それにこのような現象は、律佳共に智香、鏡までもが陥った現象であった。なので知識的に分かっていることである。だが“体験”すると、なかなかどうして冷静になれない。

鈴さんは無事だろうか？自分がいなければこんなことは起こり得なかったのではないだろうか？このまま見つからなければ僕は鈴さんはどうなる。

色々なことが胸の中で膨らんでいつては消えて、また膨らんで。

…苦しい、とても。

苦しいから、鈴を助けて欲しいから、と试试看みんなの力を借りるわけには行かなかった。だってこれは僕の問題。僕のせい。何とかできなくても、絶対に責任は取る。例えばこれで僕が“壊れて”も。

「どうしたの？耕輔？耕輔!？」

夜に暮れた街の、バス停にあるベンチで、耕輔は律佳の声が流れる携帯電話を耳にあてていた。

「……………」

「耕輔ってば!!聞いてるんでしょ…?」

「……」

答える気にはならなかった。だってもう…どうでもいいんだ。

耕輔は異常な失望感を覚えていた。

「ごめんな、律佳…」

「え…?」

「さつきさ…お前にあんなこと…」

耕輔の心の中にそのいたたまれない思いがあった。それこそが原因だった。今までに、律佳が律佳自身のことを、“役立たず”など言ったことがなかったのだ。それほどまでに自分は律佳を追い詰めてしまったのかと、耕輔は思っていた。だが律佳はそれを猛然と無視して叫んだ。

「そんなことどうでもいいよ!! ねえ! どこにいるの!?! 私そこに行くから!」

「来なくて、いいよ…」

……。

…そっか。今ので分かった。

つまり僕は、“足手まとい”なんだ。

律佳のような強い力も綺麗な心も持ち合わせてないし、智香のような切れた頭も、優しさもなく、雪也のような決断力も、鏡のような頼りになる助言も、時より感じる暖かさも持たず、鈴のような母親のような心を持ち人に接触することさえ出来ないのに…僕は…今までは…と偉そうに、律佳の親、頼りになる彼氏気取りで…。

「ねえってば! どうしちゃったの? 私言ったこと気にしてる

の…? それなら」

「違うよ…もういいから…僕なんかもう、ほっとけて…何にも出れない、人間なんかさ…」

「…!!」

いいさ。嫌いになられても…。人の命がかかっているときにこの大事な時に、俺は駄々こねてんだから。

とことん嫌いになっってくれ。

次の瞬間、律佳は怒鳴った。

…そんな耕輔、大ッ嫌い！！

乱暴に言い放たれて、携帯電話が切られる。

ツーツーツー…ピッ。

彼は空を見上げ、少し肌寒い風を感じながら、このまま人知れず朽ち果てていった…。

これが僕の予見だった。だが予想は大きく外された。

「耕輔の馬鹿！！私、そこに行くからね！！」

…え？

そんなことをされては困る。そんなことをされては、鈴が…。

「…お前こそ…馬鹿野郎…！！鈴をはやく助けに行ってやれよ！！」
とにかく僕のこととは放っておいて欲しいから、そう言っただけなのかもしれない。だが律佳はこう返してきた。

「イヤ！！私耕輔んとこ行く！！」

「来るなっつってんだろ！！」

「いや！！私、鈴ちゃんより…耕輔が大事だもおんっ！！」

「！？…お前…」

…その瞬間…律佳が…泣いたのだ。必死に我慢していたのだろう、突然嗚咽が激しく聞こえてきた。

「私…鈴ちゃんがいなくなるより…こうすけがいなくなる方がいいや

…」

「律佳…」

他のヤツが聞いたら、きっと俺たちを馬鹿でどうしようもないやつって、蔑むあはれんだらうな…。けど。

「…分かったよ…鈴を探そう。だから泣くな。でもって、鈴がいなくなってもいいなんて言うな」

律佳は泣きながら、それでもそれを抑えこもうとしながら、

「ひくっ…うん…ひっ…わたし…も…りんちゃんさがすう…」

「よし、後で会おうな」

「うんん…」

ピッ。

「ふう…」

色んなことが一瞬で始まって、終わったような、そんなすがすがしい気分になった。まさか律佳に精神を安定させてもらえるとはな…。

その瞬間、過去に雪也がボツと呟いた言葉が脳裏を横切った。

情けないな…目下には鼻が高くていられるのに…

律佳は自分から自分の誇りを消し去って、あえて耕輔の下につこうとしたのだ。当然律佳は、雪也のその台詞も、人間のそうゆう心理を知らない。

知らないが、知らないまましたことだが、彼女は結果的に、耕輔の精神状態を安定させたのだ。

彼女の心の本心、汚れのない綺麗な心から、そうなった。

「サンキュ。律佳」

次の時には、耕輔はそのベンチから消えていた。鈴の救出の為に、いや、恥ずかしながら、僕は鈴を助ける為に、動き出したわけじゃないかもしれない…。

そう、僕は…

律佳の泣き声を、聞きたくなかっただけさ…。

其の十三の六

「おい」

突然鏡からの着信が来たと思っただら、第一声はこんな愛想もない一言だった。だがその着信を取った耕輔は何事もなく返事をした。彼がそういうライドだと、よく知っていたからだ。

「どうしたんだ？」

「智香を追跡出来なくなった」

これもまた突然で、同時に異常事態だった。

「えッ…？それ、どうゆうことだよ！」

智香が追跡不能に…それは鏡に内蔵されているレーダーで感知出来なくなったということ、ひいては電話も繋がらない、そういうことだろう。

しかし智香が追跡不能…姿を隠した理由は、一体なんなんだろう？さしてメリットがあるとは思えない。ちょっと推理してみる。

一、智香が犯人だった。いや、それは考えにくい。根拠はないが、彼女が鈴を狙うそもその理由はないのだ。

二、搜索を諦めた…または勝手に離脱。これもまたないだろう。…なら、何故…？

一人で考えても、答えは出そうにない。鏡が言った。

「恐らく、“一人”で鈴を捜す気だろう」

「一人で…？何故？」

「彼女はこの事件をライドの仕業と踏んだ。その理由をお前に説明しているヒマはないが、それは十分信用していい内容だ。問題は、そのライドに智香が何か“ミス”をしたらしいことだ。それが事件を誘発したらしい」

智香は何らかの理由でライドを犯人だと思っていて、その犯人のライドになにかしてしまっただのは智香、それがこの事件の裏、真相・
・そういうことだろうか。

「ミスだつて？」

何のミスだろうか…？

智香は情報色彩風薫じょほうしきさいふうかの開発、並びに製作者である。故に彼女しか情報色彩風薫の起動の仕方は分からない。なので、各学校を回り、情報色彩風薫の説明を直に教えて回ったことがあった。人間ではなく、“ライド” たちに教えたようだ。人間が情報色彩風薫起動時に触れるということは、微々たるものの、やはり有害らしいからだ。彼女が長い時間他のライドと接触するのは、その時以外有り得ない。ミスをしたのは、その時だろう。

「恐らくお前の考えは正しい。智香は情報色彩風薫じょほうしきさいふうかの開発、並びに製作者で」

「そこはもういいから」

「……」

耕輔にさらりと突っ込まれ、鏡が重い重い沈黙を被った…。よほど突っ込まれたことがショックだったらしい。

彼はやがて、重々しい口調のまま話し始めた。そんなに落ち込まなくていいのに…。

「…恐らくその時、智香は何らかの手違いで、ライドに混乱を来たす様なコトをしたのだろう」

「それって…？」

「わからん。それが何かの言葉だったのか、直接ライドの体に関わることをしたのかさえな」

「…そっか」

彼女は謀らずもまた“黒幕” に成り上がってしまったらしい。毎回そんなことになってしまふのは、彼女の頭が良すぎるせいなのか、人当たりが良すぎるせいなのか。いずれにしても、不幸だということに変わりはない。彼女はとても努力しているのに、何故こんなこ

とばかり・・・思わずも同情してしまう。鏡が最後の言葉を呟いた。
「それだけだ。また連絡する」
ツーツーツー…。ピッ。

通話を切つて、携帯をポケットにしまう。

「智香さん…」

あなたは今度…何をしたんだ？

その時、ポケットにしまったばかりの携帯電話が、また鳴った。

耕輔は人によってあらかじめ着信音を設定している為、誰から着信が来たかすぐにわかる。が、その着信音は、律佳の着信音でも、鏡の着信音でもなく、“未登録”者からの着信音だった。

其の十三の七

未登録者の電話…？

携帯のディスプレイを覗くと、それは携帯でも公衆電話からでもなく、誰かからの電話番号だった。

警察の人たちからかもしれない。そう思い、警戒しながらも携帯電話の通信をONにした。

「もしもし、どな」

「あなたね！！？鈴ちゃんを誘拐したのは！！！」

キイイインと音が耳に響いた。あまりにも相手方の声が大きかったからだ。

声は女性で、なかなか可愛らしい声音をしていたが、今ヒステリックに陥っているのか、短い言葉の中で何度か声が裏返っていた。

「ってか…。この人、今なんつった？」

「僕が鈴ちゃんを誘拐しただって？」

「冗談はやめて欲しい、搜索しているのはこっちの方だ。」

「あの、一体何を言ってる？」

「黙りなさい！！分かってるのよ！！今どこ！？今すぐそこに警察を向かわせるから！！！」

警察、と言う言葉で、耕輔は背筋を凍らせた。

「どうして僕が警察に追われなきゃならないんだ！？」

脈略も何もないが、その言葉は耕輔を恐怖に至らしめるには十分過ぎた。

「ちょ、待って下さいよ！俺は」

「もう逆探知出来たわよ！！見苦しいマネはしないことね！」

「ブツツ…ツーツーツ…」

「そんな…馬鹿なっ！！！」

ビル街。午後8時20分。

律佳はビルの山を跳んで走っていた。においも足跡もない状態では捜しようがなかったが、鏡によると、どうやらこの辺りが怪しいらしいのだ。次の話しかから推測出来る。と鏡は言った。

7時40分頃に犯人からの電話があった。と言っても耕輔や智香、ましてドク太にはなく、鈴の“家”に電話が入ったのだ。鈴の家とは、勿論耕輔宅ではない、両親がいる家のことを指す。

どうやら彼女は、とても恵まれた家のご令嬢だったようだ。ということは可能性として、金目的で鈴を誘拐したと考えられる。だがそれは可能性ではなく、確実になった。犯人の電話の内容は、娘を返して欲しければ今日中に5000万用意しろと言うものだったのだ。そう、つまり犯人の目的は、鈴ではなく金であった。

それがどう犯人の場所特定繋がるかと言えば、場所が問題だと言う。正確に言えば、位置関係だ。

耕輔宅から約1時間20分で来れる位置がこのビル街ということと、鈴の家がこの真っ直ぐ2時間ほど行けばあると言う事実がその理由だった。金を今日中に用意しろ、ということから、急ぎであることは明らかであるから、鈴の家へ近付こうとするのは当然だ。さらに犯人、彼は、または彼らが本当にライドだった場合、その可能性は高くなる。ライドは人間、警察など怖くないのだから。

しかし…仮にこの場所に犯人が潜伏しているにしても、発見は困難になるだろう。視界も利かず、ビル外で死角が多い。これでは音しか頼りにならない。

どこななの…！鈴ちゃん…！！

ビルからビルへと、跳びながら、必死に音を探す。数分しか経ってないのに、とても長い長い時間跳び続けているように錯覚してしまう。…静か過ぎて…苦しい…。

その時だった。

ドカンと何かがビルに突っ込み、衝撃で壁がいくらか吹き飛んだ大きな音がした。

まさか！？

律佳はコンクリートの床を蹴って、その音の方へ滑空した。

現場へ着くと、そこには確かに“ぶつかった跡”があった。もの凄いいスピードでぶつかったのかと思うほど規模は大きく、大穴が開いて壁が崩れている。でも

車がぶつかつたんじゃないんだ…？

普通炎上するだろうが、その様子もなく、勿論車自体も見当たらない。

じゃあ何がぶつかったんだろ…？

瓦礫の山となった場所へ歩を進めると、小さいうめき声と、ある人物の姿が見てとれた。それだけで律佳の気が動転しそうになる。

だって…

「ちいちゃん!!」

「う…」

信じられなかった。

けれど、その事實は揺らぎそうになかった。

傷だらけの智香に急いで走り、そつと体を持ち上げる。べっとり手に血がついた。

この時、律佳は“何か”の違和感に気付いた。智香が血まみれだから？何故彼女がここにいたのかが分からないから？私が焦っているから？ひっくりくるめて全部なのだろう。

「どうしてっ…!!?どうしてっ!!?」

ぶわあつと水が零れ出して、真つ赤な智香が時折歪んで見えなくなる。

「り、律佳ちゃん…落ち着いて…」

「そんなの、無理だよあつ!!」

「律佳ちゃん…」

呼吸は整っているが、智香の眼は揺れていて、すぐにでも消えそうだった。律佳は思わず叫んでしまう。

「死んじゃイヤア!!」

「私は…死にませんか…」

嘘だ。このままだったら、死んでしまう。律佳は慌てて鏡への通信を開いた。誰でも良かった。とにかく誰かに伝えなければならぬと思ったのだ。

何も知らない鏡が無愛想に返事する。

「どうした」

「バカア！！！」

「…？」

突然馬鹿と言われ、さすがの鏡も動揺したようだ。

「何があった」

「何で言ってくれなかったのよお！！」

鏡はリーダーで智香を追っていたはずだ。

「落ち着け」

「無理だよお！！だって…」

「…何だ」

「だって、ちいちゃんが　！！」

バチン。

律佳の頬に鮮烈な痛みが走った。

「う…え…？」

まだ頬に涙が伝っている律佳に、智香が突然ビンタしたのだ。その衝撃で、内蔵された無線は故障したのか、ノイズばかり拾い始める。

智香が律佳の眼をグツと睨んだ。

「甘えるのは…やめて下さい…」

「ちいちゃん…？」

「…律佳ちゃん…この区域には…私を殺そうとしたライドがいます…。なのに、あなたがそれでどうするんですか！！？死ぬ気ですか！？鈴ちゃんを捜し出して、耕輔クンのもとへ行くのではなかったのですか！？」

猛烈な勢いで言う智香。律佳はハツとした。

「この、区域に、ライド、が…？」

「そうです…。恐らくそれが…」

鈴誘拐の犯人……。

「律佳ちゃん…私は、サポートライドなのでそのライドを止めることが出来ませんでした…敵は強くて恐ろしいです…一度鏡さんたちのところへ戻り、体制を整えてください」

心配そうな律佳の顔に、智香は笑った。

「私なら大丈夫です。だから、さあ…」

「う、ううっ…！」

「泣かないで…お願いだから…」

智香は血だらけの手で、律佳の頬を拭ってやった。優しく。

律佳にはその手が弱弱しくって嫌だった。飛んで行ってしまいそうで…離れていってしまいそうで…。

「だから…行って…」

はたと手が落ちた。眼は開き、どこへやらとうっすらで行く…。

「ちいちゃん…？」

体を揺すってやるが、首がグラグラと揺れるだけ。それはまさに、よく出来た人形のようなだった。

「……」

死んだ。

智香が死んだ。

律佳は悟った。

突然智香が気持ち悪く思えた。

腕から落とす、両手を見ると、血だらけ。

「イ…！…！」

「ナニ…コレ…！…！」

「イヤアア…！…！」

さらに気持ち悪くなって、手で血を落とそうとするが、べったり手にこびりつくだけ。

「いやああ…！…イヤアア…！…！」

取れない、取れない、気持ち悪い、キモチワルイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9618b/>

変な学校

2010年10月10日22時13分発行